

せい か ほう まさ  
星 火 方 正

~燎原の火は方正から~  
ほうまさ

天皇皇后両陛下の満洲開拓民への思いについて考える

陳毅副総理の永続的な日中友好への願い

「私と方正」 第6回方正友好交流の会総会でのお話

わたしの方正之路② 祖国の土を踏ませたい

「二つの国の物語」を読む

大類 善啓

飯白 栄助

奥村 正雄

森 一彦



2010年8月「歴史検証の旅」で方正日本人公墓を参拝。高野山真言宗の竹井成範住職が慰霊のため日本から駆けつけてくれた。般若心経読経の下、焼香をするのは最年長（85歳）の丸井保さん。チチハル宮前小学校高等科を卒業後、チチハルで仕事をするも徴兵された。日本の敗戦も知らず興安嶺を3カ月彷徨った。戦後初めて、65年ぶりの訪中だった。

### なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちが彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

### なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、国際的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

# 星火方正（第11号） ～燎原の火は方正から～

## 目次

天皇皇后両陛下の満洲開拓民への思いについて考える	大類 善啓	1
陳毅副総理の永続的な日中友好への願い	〃	4
.....		
飯白栄助さんのお話「私と方正」 ——第6回方正友好交流の会・総会でのお話	飯白 栄助	9
帝都からの満洲開拓団—転業商人の悲劇— (飯白タツ子さんのこと)	朝日新聞転載	25
.....		
わたしの方正之路① 近くて遠かりし…岩手と方正	奥村 正雄	30
わたしの方正之路② 祖国の土を踏ませたい	〃	32
「二つの国の物語」を読む	森 一彦	37
良心と責任	陳野 守正	40
.....		
草原の涼やかな風が眠る霊を慰めてくれるように	下山田 誠子	41
母ちゃん、タカシが死んだノモンハンだよ	千田 優子	42
兄と弟に会う旅	山田 弘子	44
中国人の寛い心	堺澤 一生	46
方正の中国人夫婦に会う	上条 八郎	48
意義のある思い出を残したい —亡き夫を偲ぶ鎮魂の旅を迎えて—	杉田 春恵	50
ノモンハン戦争は何の為の戦争だったのでしょうか？	〃	55
棄民	山岡 紀代子	57
方正日本人公墓を参拝する旅	島田 成夫	59
日本人公墓と731細菌部隊記念館を訪ね、改めて戦争を考える	高橋 修司	63
方正再訪	吉川 雄作	65

旧満州の日ソ戦跡を巡って	茅原 郁生	68
“異郷での虚しい戦争”を痛感	大類 善啓	69
ノモンハンと方正で国際主義的な精神を思う	〃	70
『嗚呼 満蒙開拓団』を若い人たちに見せたい	先崎 千尋	72
560名のお客様を迎えて —黒部市での『嗚呼 満蒙開拓団』上映報告—	鮫沢 祐二	73
満蒙開拓団の証言上映	読売新聞転載	75
成功裡に終わった『嗚呼 満蒙開拓団』自主上映会	加藤 重幸	76
益田市上映会でのアンケート集計		78
慰霊の夏—益田市から旧満州からへ—語り継ぐ思い	朝日新聞転載	82
みんなの家主催『嗚呼 満蒙開拓団』上映後の感想	NPO 法人みんなの家	85
.....		
日中船舶衝突事件から何を学ぶか	服部 健治	90
.....		
無神経な「拓魂」碑文と満洲開拓団	宮下 春男	93
『新潟県満州開拓史』を自費出版して	高橋 健男	99
高橋健男さん、自費出版文化賞を受賞	自費出版年鑑2010年	102
.....		
日本で『中国人就学生と中国帰国子女』を出版して	山田 陽子	104
.....		
養父母会ニュース	石 金楷	106
お知らせ 方正日本人公墓への旅(2011)		108
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの ——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	109
小説に初登場した方正日本人公墓 —佐江衆一著『昭和質店の客』を読む—	大類 善啓	110
書籍案内 報告 編集後記	編集部	111

# 天皇皇后両陛下の満洲開拓民への思いについて考える

大類 善啓

長野県は周知のように開拓民として満洲に渡った人たちが日本で一番多く、その数はおよそ3万3千人といわれる。大日向村（現佐久穂町大日向地区）からは、分村移民第1号として満洲に入った。1945年のソ連参戦時には800人近くが入植地にいた。しかし帰国できたのは半数だった。土地や家を処分して満洲に渡った人たちに、親戚も諸手を挙げて歓迎するわけではなく、故郷にいる場所もなかった。そんな経緯もあり、満洲から引揚げた人たちは、軽井沢町の浅間山麓に入り開墾し、新たに大日向地区を作ることになった。満洲では中国人や朝鮮人たちが開拓した土地に入植したが、今度は本当に自ら開拓したのだ。その大日向地区を、天皇皇后両陛下は今年（2010年）8月24日ご訪問された。

8月25日付読売新聞長野県版は、この事実を次のように報道した。

両陛下は、＜午後には、戦後、満洲（現中国東北部）から引き揚げた人たちが開拓した同町（注：軽井沢町）大日向地区で、キャベツやレタスの畑を散策され、農作業をしていた滝上文雄さん（69）のかやぶき屋根の家に立ち寄られた。滝上さんは、自家製のトウモロコシ5本を手渡したといい、「物腰がやわらかい方で、お話できたことが夢のよう」と話していた＞

実は両陛下は、2005年の9月2日にも、旧満洲の七虎力地区<sup>チーフリ</sup>に入植した人たちが戦後、栃木県的那須町に開拓した千振開拓地<sup>ちぶり</sup>を訪ねられている。その時には、戦争時代のことをこれからの若い人たちに伝えたいという皇后美智子様のお考えもあったようで、秋篠宮様とご長女の眞子さまも同行された。



両陛下を「開拓の碑」に案内する中込敏郎さん(右端)。「戦中戦後のことに触れてほしい」という皇后さまの意向で、秋篠宮さまの長女眞子さま(左端)も同行された＝2005年9月、栃木県那須町で

東京新聞 05年11月22日付

(左上写真) 大日向開拓地の野菜畑を散策される天皇皇后両陛下 (写真提供、共同通信社)

## 若い世代に戦争体験を伝えたい

昨年（2009年）の11月12日、天皇陛下は、国立劇場で行われた「天皇御在位20年記念式典」のご挨拶で、次のように語られている。

「先の戦争が終わって64年がたち、昨今は国民の4人に3人が戦後生まれの人となりました。この戦争においては、310万人の日本人の命が失われ、また外国人の命も多く失われました。その後の日本の復興は、戦後を支えた人々の計り知れぬ苦勞により成し遂げられたものです。今日の日本がこのような大きな犠牲の上に築かれたことを忘れることなく、これを戦後生まれの人々に正しく伝えていくことが、これからの国の歩みにとり、大切なことではないかと考えます」（宮内庁HPより）

両陛下は、戦後育ちの人たちに戦争体験がしっかりと伝わる重要性を認識してご挨拶された。

この記念式典に先立つ11月6日の記者会見では、在日外国報道協会代表の「両陛下は、日本の将来に何かご心配をお持ちでしょうか。お考えをお聞かせください」という質問に対して、天皇は、高齢化が進み経済が厳しい状況に日本はなっているが、一つひとつ克服されることを願っていると語った後、こう続けられた。

「私がむしろ心配なのは、次第に過去の歴史が忘れられていくのではないかということです。昭和の時代は、非常に厳しい状況の下で始まりました、昭和3年、1928年昭和天皇の即位の礼が行われる前に起こったのが、張作霖爆殺事件でしたし、3年後には満洲事変が起こり、先の大戦に至るまでの道のりが始まりました。第1次世界大戦のベルダンの古戦場を訪れ、戦場の悲惨な光景に接して平和の大切さを肝に銘じられた昭和天皇にとって誠に不本意な歴史であったのではないかと察しております。昭和の60有余年は私どもに様々な教訓を与えてくれます。過去に歴史的事実を十分に知って未来に備えることが大切と思います」（宮内庁HPより）

## 天皇陛下の言葉を噛みしめたい

「日米同盟」という錦の御旗を楯に、ブッシュ政権の尻馬に乗っかり、イラク戦争に「人道支援」という名の下で自衛隊の派遣を決めたのは自民党の小泉政権だった。某自衛隊の幹部は、「イラクの現場に立てば、自衛隊が戦争に参加したというのはまぎれもない事実だということがわかりますよ」と語っている。民主党の菅政権になっても、「日米同盟強化」の一点張りだ。一方、“憲法改正”を唱え、自衛隊の海外派遣に頓着しない戦後世代の政治家も増えている。

『CIA秘録』を書いたニューヨーク・タイムズ記者ティム・ウィナーは、直接、岸信介に金を渡したCIAの人間から取材し、「岸信介元首相がCIAのエージェント」であったことを明らかにしている。実はこの9月、渋谷の小さな映画館でドキュメンタリー映画『ANPO』を観た。日本生まれ日本育ちのアメリカ人女性、リンダ・ホーランドさんが、1950年代から60年代にかけて、朝倉摂や中村宏、池田龍雄などの画家たちの、当時の政治状況に対する抵抗の表現活動を紹介しながら、日本とアメリカとの関係を問い直した作品である。

この映画でリンダさんは、ティム・ウィナーにもインタビューしている。彼はそこで、日米関係を、<卑俗な表現でいえば「ヒモ（アメリカ）と娼婦（日本）の関係だ>と語っている。「日米同盟の強化」などという言葉は、ティム・ウィナーがいう表現に倣うならば、「ヒモと娼婦の関係を更にしっかりと強化しよう」ということなのだ。

昨今の政治家の言動の軽さ、戦争体験をどう若い世代に伝えていくかという、日本の平和にとって誠実な問題意識も希薄な国会議員先生のことを思うと、もう少し真摯に両陛下のお言葉を噛みしめてほしいと思う。

### 両陛下と『嗚呼 満蒙開拓団』

さて、この両陛下の大日向地区訪問のニュースをテレビで知った仕事仲間の一人が、美智子様はもしかしたら、映画『嗚呼 満蒙開拓団』をご覧になったのではないかと知らせてきた。そんなことはないと思ったが、映画を演出された羽田澄子さんに電話を入れた。そうすると以前に、羽田さんが創られた『歌舞伎役者 片岡仁左衛門』を、美智様が知人を介してご覧になりたいというのでお送りしたことがあり、お礼状もいただいたということだった。羽田さんは、ぜひ美智様に『嗚呼 満蒙開拓団』をご覧になっていただければ嬉しいとのこと。私ももちろんご覧いただきたいと思い、親しくお付き合いしているジャーナリズムのある方にご相談したところ、その方は天皇陛下ともご縁があり、美智様にDVDをお渡しできるかもしれないという言葉をいただいた。そこで美智子様宛てに私からの手紙を添えて、映画のDVDを会報「星火方正」などの資料と一緒にその方にご送付して依頼した。そしてその方から、確かに送りましたという言葉ももらった。その後11月中旬、その方から、両陛下ともDVDをご鑑賞された模様だとの報告をいただいた。私はすぐにそのことを羽田さんにお伝えした。羽田さんもたいへんお喜びになったことは言うまでもない。

とここまで書いたところ、その方からお手紙が来た。そこには、羽田さんにお渡ししてほしいと資料が入っていた。それは前述した、即位20周年記者会見の全文だった。

しばしば近隣諸国と歴史認識の相違で問題を起こす日本の政治家諸氏のことを考えると、お二人がしっかりと表明された「歴史観」は際立って輝いている。実は千振開拓地訪問に先立つ05年6月、両陛下はサイパンへも慰霊の旅をなさっている。それは千振開拓地訪問同様、両陛下の強い希望だった。

満洲開拓民の体験者はもとより、戦争体験者も減少しつつある。高齢化が進み、日本人公墓を参拝するかつての開拓団の人たちから、「参拝することも、もうこれが最後です」という愁いや嘆息の声を聞く。歴史を次の世代、若い世代に語り継ぐことが難しくなっている今、天皇皇后両陛下が次の若い世代を伴い、満蒙開拓団のゆかりの人たちを訪ねた意味は極めて大きいと考える。

両陛下の深い歴史認識と平和への並々ならぬ強いお気持ちを改めて感じ、襟を正さなければいけないと思った次第である。

(おおるい・よしひろ：本会事務局長)

# 陳毅副総理の永続的な日中友好への願い

## 陈毅副总理寄语中日友好

大類 善啓

陈毅副总理说：“过去的事就让它过去吧。”

野间团长和龟井先生都表示，尽管陈毅副总理这样说了，但我们日本人对于过去日本的侵华战争负有责任，既然如此，我们是不能忘记过去的，不能把它付之东流。陈毅副总理听罢，当即表示：“说得好！谢谢你们。我们说过去的事就让它过去。你们说日本人不忘记过去的事。这样，两国人民才能真正友好。如果我们总是恨日本，而你们日本人把伤害中国的事忘得一干二净，中日两国就永远不能友好。”

—刘德有著《心灵之约》第 550 页。商务印书馆，2002 年出版—

一到中国，就会发现有许多被命名为爱国主义教育基地的保存抗日时期历史的博物馆。的确，中国高层对于一部分日本人的否认南京大屠杀的舆论以及日本的右倾化倾向怀有危机感，为此“那就让你们看看证据！”的观念成为建设南京大屠杀纪念馆的发端，而日本方面也应该对此作出充分的反省。

然而，中国近几年新建的历史博物馆等设施中，在“勿忘历史！”的口号的号召下，对日本军队残暴的侵略事实通过照片以及情景模型等方式，一幕一幕不厌其详地展现给观众。

中国的青少年看了这些，内心受到强烈冲击，脑海中形成了“日本人不是人！”的印象。事实上类似的文字在展示现场的留言簿中曾经亲眼所见。这些做法只能将对日本人的仇恨深深刻在中国人心中。在此明知可能被误解，也要说“扭曲人性，使人疯狂的是战争！”。即使是“那些人”，只要真心反省所犯的罪行也能够重获新生。当年对被关押在抚顺战犯管理所的日本战犯给予宽大待遇的周恩来总理的精神直到今天仍然让人肃然起敬。

想及此，本文前述中陈毅副总理的对中日友好的拳拳期待，迄今萦绕于耳畔，叫人永志不忘。

(賈廣鑫訳)

《注：上記の中国文は、この原稿の 8 頁に書いてある「さて、中国へ行くと・・・永く記憶に留めていい言葉だと思う」という文章から、ほぼ同様の趣旨を訳したものである》

.....

ノモンハン、方正などを旅して 8 月下旬に帰国後、藤野文晤さんが『日本と中国』（社団法人日中友好協会機関紙 9 月 5 日号）に書かれた「忘れ得ぬ人々」を読んで本当に眼を見張った。藤野さんは有数の中国通経済人であり、中国の要人とも深い交流をされている方である。その藤野さんが、「どうしても忘れられない心の恩師ともいべき人が亀井勝一郎先生だ」という文章の後に、こう書かれている。

＜先生が日本作家協会を率いて北京を訪問された時、陳毅副総理と語り合った。陳毅氏は「亀井先生が日本が中国を侵略したことは忘れない、とおっしゃる。私達は忘れたいと

考えている。これは良いことです。逆に私達が忘れないといい、日本側が忘れないということになれば、これは悲劇です」と発言したそうである>

先日、藤野さんに久しぶりにお目にかかる機会があった。元NHKのアナウンサーでありジャーナリストである木村知義さんが主宰する21世紀動態研究所の定例会である。その日は、詩人の辻井喬さん（日本中国文化交流協会会長でもある）がお話された時だった。木村さんはかつてNHKラジオで、「21世紀の自画像～変わる世界！一日中関係」という特別番組を企画され、07年には方正日本人公墓を紹介したいというので参拝団を紹介したこともある。その番組のゲストがまた辻井喬さんだった。放送後、会報の「星火方正」を辻井さんにお送りしたら、「(当会の交流について)このような純民間の人的な交流こそ、両国の平和で友好的な関係にとって大切なことだと思います。私も機会を作ってお詣りさせていただきたいと思います。(略)運動が盛んになることをお祈りしています」という葉書をいただいたことがあった。

定例会が終わり、辻井さんにご挨拶したら、「なかなか立派な会報ですね」とも言われ恐縮した。その会合で藤野さんに、陳毅さんのこの発言は何年ですかとお聞きしたら、「いやあ何年だったか……。ただ、亀井さんにわざわざ呼ばれ、藤野さん、陳毅さんからこう言われたよ、とはっきりおっしゃった」とのことだった。

陳毅は1901年生れ。19年勤工儉学で渡仏。抗日戦争開始後は新四軍の創設に参加、上海市を解放し上海市長になっている。今でも上海外灘の黄浦公園には陳毅の大きい像が立っている。58年外交部長（外務大臣）、副総理として周恩来を補佐、解放軍元師の一人である。文革中は御多分に漏れず、林彪や江青ら文革派から批判された。

しかし豪放な陳毅は、批判された者は直立し頭を下げるのが当時の慣例だったが、椅子を要求し造反派を驚かせた。更に『毛沢東語録』を読み上げる際には、271頁を開くように大声をあげた。しかし、『語録』が270頁しかない造反派の参加者が不審に思ったところ、陳毅は自ら「陳毅はよき同志なり」と叫んだ。すると同席していた周恩来が「かつて主席（毛沢東）はそう言われた」と説明すると、会場はいつぱんに静まったというエピソードが残っている硬骨漢でもある。

亀井勝一郎は1907年生れ、戦前、東大新人会に所属しマルキシズムに傾倒して逮捕され、獄に入るが転向。その後「日本浪漫派」を経た後は、親鸞に親しんだ文芸評論家だ。私などは10代の頃に、若い人向けに書いた青春論や人生論のような本を読んだぐらいだが、NHKの番組でよく座談会に出られていたのは見ていた。品のいい温厚そうな人という印象が残っている。調べてみれば1966年に亡くなっている。文革時代のことをほとんど知らずに新中国とお付き合いできたなら、その意味ではとても幸せな方だったかもしれない。

今回改めて日本作家協会訪中団を送り出した日中文化交流協会の横川健さんに確認の電話を入れた。横川さんは、間違いがないようにと、その内容をFAXで送ってくださった。実はその内容は、後で探せば私の手元にもあったが見逃がしていた「日中文化交流」（日本中国文化交流協会編集、N o 716 2006. 3.23 発行）の創立五十周年記念特集に掲載され

たものである。

陳毅は1960年の6月6日、日本作家代表団と会見し、こう発言したと記されている。

「日本軍国主義の弾圧を受け投獄された亀井先生が、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私たちは忘れないと考えている。これは美談です。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れないということになれば悲劇です」と語った。

この事について、改めて日中の交流事情に詳しい武吉次朗さんに確認した。(武吉さんについては、昨年の方正の総会で「中国と私」という演題で講演をしていただき、その全容は「星火方正」9号に掲載している)

武吉さんは戦後、中国で留用された後、中国で大学を卒業されて1958年に帰国。その後日中貿易に携わった後は大学で教えられ中国語の翻訳で活躍されている。陳毅と日本作家代表団との通訳を担当された劉徳有氏とも親しい方である。武吉さんからはすぐに、劉徳有氏の著書『心霊之約』(2002年、商務印書館発行)の550頁に掲載されている中国文を送ってくださった。その中国文が冒頭に記したものである。

劉徳有氏は、中国文化部の元次官であり、1964年から14年間、特派員として日本に駐在された方だ。毛沢東や周恩来と日本の要人との通訳では大活躍された方である。

なお、武吉さんには中国語訳についていろいろとアドバイスもいただいた。



上の写真は、1960年6月6日に陳毅氏が日本作家代表団と会見した時の集合記念写真だ。陳毅さんは前列右から4人目。陳毅さんを挟んで左が野間宏、右が亀井。若き日の大江健三郎や開高健(前列左端とその隣)も写っている。また、西園寺公一、廖承志などの友好人士の他、茅盾、老舎という有名作家など、錚々たる人たちが並んでいる。

(「日中文化交流」創立五十周年記念特集より転載した)

劉徳有氏が記した陳毅さんの言葉を日本語に訳するところなる。

＜陳毅副総理は「過去のことはもう過ぎ去ったことにしましょう」と言われた。

野間団長（作家・野間宏のこと）と亀井先生は、陳毅副総理はそう言われるが我々日本人としては、日本が過去に起こした中国への侵略戦争については責任を負わなければいけない。従って過去を忘れてはいけなし水に流すことはできません、と表明した。それを聞いた陳毅副総理は即座に、「そう言われることは素晴らしい。皆さん、ありがとう。我々は過去のことは過ぎ去ったものにしようと言ひ、貴方たちは日本人として過去を忘れてはいけなと言われる。そうであるなら、両国人民は本当の友好を実現することができるでしょう。逆に我々が日本をずっと恨み、あなた方日本人が中国を傷つけたことを、きれいさっぱり忘れてしまうようなことになったら、中日両国はいつまで経っても友好関係を実現することはできないでしょう」＞

この陳毅さんの発言は本当に素晴らしいと思う。

なお、ここに出てくる野間団長とは作家の野間宏だ。1915年生れの野間も戦前、反戦活動で入獄した。



（上の会見日時は1964年3月20日。左が陳毅副総理、右が亀井勝一郎氏。亀井氏の右隣は作家の由起しげ子氏、写真提供：新華社）

さて、中国へ行くと、愛国主義教育基地として位置づけられている抗日の歴史を保存する博物館がたくさんある。確かに、南京での日本軍の虐殺はなかったという一部日本人の声や、日本の右傾化傾向に危機感を抱いた中国指導部が、「それでは証拠を見せようではないか」という考えが南京大虐殺記念館建設の発端だったようだ。日本側も十分に反省しなければならない点である。

しかし近年、新装になる中国の歴史博物館などでは「歴史を忘れるな」というフレーズの下、日本軍の残虐な侵略の実体を、写真やジオラマなどを通して「これでもかこれでもか」と詳しく展示している。

それを見た中国の青少年に、「日本人は人間ではない」と思わせるような印象を強烈に叩きつけている。事実そのような言葉を記している感想文ノートを見た。これでは、日本への憎しみの感情を刻みつけるだけだ。誤解を恐れずにいえば、「戦争はどんな人間をも狂気に駆り立てる」のだ。残虐な行為をした人間であろうと、その罪を心から反省し新たに生き直すことができるのだ。ここで改めて、撫順戦犯管理所での日本人戦犯に対して寛大な処遇をした周恩来の精神を、敬意の念をもって思い出す。

陳毅さんの発言はとても光り輝き、永く記憶に留めていい言葉だと思う。

これについては、拙文（70頁に掲載した「ノモンハンと方正で国際主義的精神を思う」や、またその前頁に掲載した、やや内容は重複するが「日本と中国」の記事を参照していただければありがたい。

尖閣諸島問題など、日中間で亀裂が生じると「愛国主義教育の成果」が表われて反日デモが繰り返される。日本でも一部の人たちとはいえ、「反中デモ」を繰り出す時代になってきた。

自分の生まれた国、育った国を愛する感情はいたって自然なことで、そのこと自体は決して否定されることではない。とりわけ自国の文化をいとおしみ愛でる感情はいい。しかし自国を愛するその感情が、隣国を敵視するような形で発露され、狭隘なナショナリズムを煽るような行動は、両国にとってマイナスでしかない。

「愛国無罪」などという反吐が出そうなスローガンを叫ぶ中国の青年たち、「歴史を忘れるな」と言って憎悪を煽り立てる指導者たちには、ぜひ陳毅さんの言葉をじっくりと味わってほしい。憎しみを超えて発言した陳毅さんの言葉は、感嘆するほど実に見事なものだ。中国の若者が、かつての抗日戦争を闘い抜いた革命家がこういう発言をしていたのだと思えばいい。同時に我々は、この言葉に甘えることなく、日本が侵した歴史の事実をしっかりと忘れないで理性的に行動したいものである。

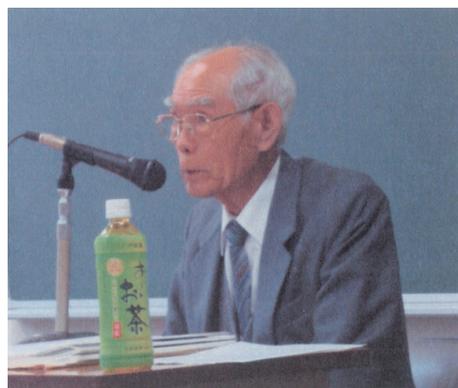
# 飯白栄助さんのお話 「私と方正」

聞き手：奥村正雄（方正友好交流の会 参与）

\*2010年5月29日「方正友好交流の会 第6回総会」で行われた講演の記録を基に、飯白・奥村両氏により補正されたものです。

## ○飯白栄助さんのプロフィール:

昭和8年(1933年)1月生まれ。2男2女の末っ子。  
昭和19年(1944年)4月、第13次興安東京開拓団として家族4人で満州へ(次女と長男は東京に残る)。敗戦で800人が逃避行の途中、303人が集団自決。飯白栄助さんと姉が生き残った。その後、解放軍に入る。朝鮮戦争にも従軍。昭和33年(1958年)帰国。  
現在 日本中国友好協会常任理事  
ちば中国帰国者支援交流の会会長 ほか。



飯白：飯白でございます。つたない話で心配しておりますが、よろしくお願ひします。座らせていただきます。

奥村：飯白さんのお話は、聞きだすと半日でも1日でも足りないぐらいたくさん貴重な経験談を話していただけるのですが、今日はその中のさわりを話していただくということです。飯白さんが、東京から開拓団として旧満州へ行かれたのは1944年、敗戦1年前の4月なんですね。このとき飯白さんは11歳。家族、両親ときょうだい4人のうち、すぐ上のお兄さんとすぐ上のお姉さんは日本に残って、あとの家族4人で行かれた。

私がまずお聞きしたいのは、なぜ、敗戦の1年4ヶ月前という時期に、長野や山形の農村県からではなく、東京から満蒙開拓団として行かれたのかということです。そのあたりから一つお話し下さい。

## なぜ この時期に 東京から開拓団か……

飯白：私は昭和8年生まれですから、当時の東京開拓団の結成されたときは11歳なんですね。小学校5年を終わって行ったわけですが、なぜ開拓団に行ったかという詳しいことは残念ながらほとんど知らないんですね。ただ、私の記憶では、当時の教育ですから、満州に行くのは名誉なことと、それこそ勇躍勇んで行ったという気持ちなんですね。はっきり言えるのは、家は乾物屋でしたが、とにかくその当時からすでに商売はほとんど上がったりで、私の生まれは戸越銀座で、「銀座」っていうのが付くんだからすごい所だったんだなあと思ったことがありますけれども、賑やかな商店街でした。その戸越銀座の2丁目という所で産声を上げたんです。先ほど言ったように、家は乾物屋をやっている、私の父の親戚が北海道の函館で問屋みたいなことをやっていたもんですから、そこから仕入れて商売をしていたんですね。ところが、やっぱり戦況が厳しくなると、もちろん荷物の輸送はままならない、物は来ない。たまたまその商店街の同じ乾物商を営ん

でいた浦野さんという方と私の親父が仲良かったせいか、満州へ行けば商売ができる……ということになったような気がしています。

開拓団の結成趣意書にも、「開拓団は関東軍に食料を供給する」とある。つまり、聖戦に備える、銃後の守りにつくのだ……、ということで、喜び勇んで行ったということですね。東京開拓団の特徴といえば、やはり、長野や山形などとは違って、ほとんど農業に関係のない人たちが開拓団として行った、これに特徴があったのかなと思います。それは、昭和 18～19 年ごろの、ああいう戦況の状況の中で、商売はできないということで、それぞれいろんな業種の方が集まって、商店振興会の理事会というか、そういうところで話し合っていた……、そういう話だろうと思います。

先ほど言ったように、私は上の姉と——私は末っ子ですけれども、上と下二人が両親について行きました。母親は心臓が丈夫じゃなかったようで、満州行きに反対したようだが、やはりなかなか東京でも生きて行けない、というようなことで行ったんじゃないかというように思っています。

今でも武蔵小山の朗惺寺（ロウセイジ）という所がありますけれども、そこに東京の開拓団の記念碑が建っています。そこには開拓団結成の趣意書というようなものが出ています。それは非常に立派な文言で、戦争を完遂するとつづられています。私の父親にしても、おそらくそういう気持ちで行ったのだらうと思っています。

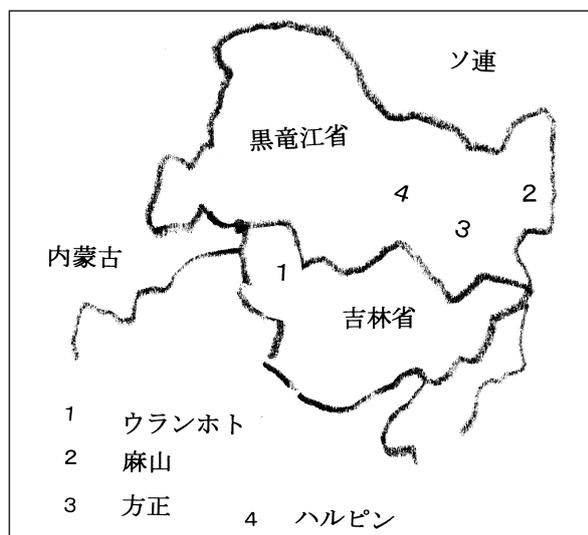
東京開拓団で行く前の年、昭和 18 年から 19 年にかけて、蒲田、京浜地区は、B-25 かグラマンかは記憶にありませんが、空襲を受けています。ちょうど小学校へ行く途中で空襲警報になったんですけれども、全然気にしないで、学校へ行く途中だったと思うんですが……。

昭和 20 年 3 月 10 日には、東京大空襲で十数万人が亡くなったということがあります。満州へ行けば、土地も広いし、食べ物はあるし、相当いい所に違いないということで、結果としては、東京大空襲には遭わずに、そういう難儀には遭わなかったということです。

今日お話す開拓団の入植地は、今で言う内蒙古なんですね。吉林省のウラン浩特（烏蘭浩特）、昔は興安と言いました。その前は王爺廟です。そこから 4-5 キロ離れたあたりにうちの開拓団が入植しました。

私たちの開拓団はほとんどが商業の出身者ですから、農業の経験のないところで、開拓に従事するといっても、実際に行ったのは土地もちゃんと耕されていて、あんまり肥沃ではなかったような気がします。いずれにしても平らな土地で、その中での作業ですから、初めから土を掘り返して……という開拓では全くありませんでした。昭和 19 年に行って、その年、私の親父は、消化器系統の病気で、胃癌か胃潰瘍か知りませんが、行って間もなく——7 月か 8 月か、あるいは 10 月か——姉とは記憶が違いますが間もなく死んでしまいました。

それから当然のことながら、私のおふくろは、とてもじゃないが、働き手はいないし、



こんな所にはいられないから日本へ帰してくれ、と開拓団に要求したようですけれども、時局柄なかなかそうはいかなかったという事情があります。

### 開拓団の実状は……

うちの開拓団は団員が 270 名、その家族が 770 名、全体は千人ちょっとの開拓団ですけれども、その主体は商店出身の人で、その他、友人関係、他地域から集まって来た関係の方々も一緒に入ってます。それからよく言われる「満蒙開拓青少年義勇軍」ですね。そういうところから若い人たちが農耕の手伝いということで、派遣されてきていました。

収穫 1 年目は、何が採れたか記憶がないんですけれども、おそらく一家に一頭あたり馬がいただろうと思います。翌年、作物が成長してきたところへ、8 月 9 日のソ連の、日ソ中立条約を破棄しての戦争に変わってきました。ちょうど、たしか昭和 20 年になってからだと思いますが、まさに軒並み動員で、関東軍主力部隊は南方に移されました。ボルネオを含めて、南方戦線へ主力部隊のほとんどみんなが行きました。その補充として、満州にいた成年層、40 代の方々がほとんど兵隊に引っ張られて、結局、ソ連が入ってくる頃には、(開拓団として残っているのは) 男は年寄りか、女か子どもという結果になっていたと思います。あと 15-6 歳から 17-8 歳の、義勇隊出身の方々は何人かいたように思いますけど、とりあえず青年隊と称して警備隊を作っていました。そういう状況の中でソ連の侵攻つまり戦争の形になったんですね。

ご存知のように(開拓団の入植地は) 興安嶺の西側のふもと近く、国境に近いところにあったんですよ。ほとんどの開拓団は東満、北満、方正ですね、それから黒龍江省、ソ連との国境沿いに開拓団がたくさん展開していました。東京開拓団の場合には、その西側、蒙古に近い所に配置されたということです。

それからあと、東京からもう一つ大きな開拓団として「ブツリュウ(仏立)開拓団」という開拓団があるんですね、さっき言った所よりもさらに西に、5-600 戸の開拓団があったと思います。これは東京を中心に仏教者の人たちが中心となって作って行ったんですね。ほとんどの人は東京の出身者です。その他、たくさんの開拓団がある中で、うちの開拓団がどういうわけか「第 13 次」というのはちょっとよく分かりません。東京の聖蹟桜ヶ丘という所には立派な碑が沢山ありましたけれども、その中に「第 13 次……」というのがたくさんあります。なぜ「13 次」なのかというのが分からないんですけれども……。東京から行った正式な開拓団というのは、大きな開拓団としてはその二つだと、今でも思っています。

ただ、東京に、「東京開拓団を知る会」というのがあって、東京からどういう開拓団が行ったのかということはずいぶん調べています。それによると、東京には訓練所があったり、大陸の花嫁養成……じゃないけれども、そういう婦人に開拓団に行かせるような教育の場所があったり、それから当時は不況ということもあって、いわゆる失業対策として集めてあちこちの開拓団に入れていった、というケースもある。まとまった開拓団としては二つです。終戦までの東京開拓団の当時の状況というのは、そんなところだろうと思うんですけれども……。

奥村：ありがとうございました。

敗戦を迎えないうちにお父さんが亡くなられて、お母さんと子どもさん 2 人、親子 3

人、いよいよ 8 月 9 日、ソ連軍が入ってきました、それからその家族で……、この資料で見ますと、応召者が、団員の 66.5% (179 人)、男性の 7 割方が軍隊にとられて、どこの開拓団でも同じように女性と子供と老人だけが残ったわけですけども、ソ連軍の侵入、逃避、集団自決……、その話に入っただけですすでしょうか。

## 死の逃避行 麻畑での惨劇

飯白：今日は興安の街にゆかりの方々が十数名来て頂いていますが、ここはまた、開拓団とはちょっと違った意味ですごい惨劇があった所です。よくはわかりませんが、「葛根廟（カッココンビョウ）事件」というのがありまして、千人以上の方々がソ連の戦車の蹂躪によって殺されたんですね。その前に 9 日に日ソが開戦して、その日かその翌日だったと思いますが、私たちが畑仕事をやったりしてたら、まさに街は爆撃に遭っているんですね。開拓団からモウモウたる煙がたくさん上がっているのが見えるんですよ。いったい何事だと思ったくらいですけども……。その飛行機が旋回して私どもの頭上に来て、もうどういわけかいつこうに、あまり怖いという感じはなくて、見上げていたような気がします。

東の方の街の中心は相当爆撃されているな、ということは私の記憶にも残っています。で、開拓団もそういう状況になったものですから、これからどうするかということになって、初めのうちは各人が適当に逃げろということであったみたいですが、街の方ではソ連軍の戦車部隊がすぐ近くに来ているということで、とてもそれは無理だということで、いちばん西の方の瑞穂部落という小さな部落に 800 人ほど集結して、たしか 15 日だったと思いますが、15 日の終戦を全く知ることもないまま、それから 16 日に集結して、集団で逃避行生活が始まりました。これは当時の副団長の足立さんも手記に書いておりますけれども、開拓団を先導したのは、いろんな噂があるんですが、二人の日本兵が開拓団の先頭に立って誘導していったということのようです。その後、何年前か、興安に行ってみて分かったのですが、その辺りは丘陵地帯で、全く隠れるような所なんて無いですね。そんな中、丘の中腹で休んでいる時に、第 1 回目の襲撃を受けて、そこで犠牲者が出たのです。誘導された場所は、丘の中腹の分かりやすい所で、「そんな分かりやすい所で休むとは何事か」ということもあったみたいですけども、私は子供だったので、そんなことは一切知らず、とにかくみんなについて逃げることしかないですから……。そこで襲撃を受けて、それですつと山に残って、その翌日かな、黒竜江省の方で「麻山（マサン）事件」というのがありましたが、それと同じような麻畑の中に数百人、600 人、もっといたでしょうかね、休んでいましたが、そこで襲撃されて 300 何人かが死にました。実体としてはよく分からないのですが、いずれにしても、いくら襲撃によって殺されたといっても、それだけでこれだけの人数が殺されたということはないですよ。それほど激しく攻撃されたというわけではないですから……。結局、途中で例の青酸カリが配られたんですね。開拓団の幹部の人たち、大人たちには相当配られていたと言われています。残念ながら、うちには女と子供だけだったので回ってきませんでした。したがって薬を呑む機会もなかったんですけども……。

## 親に殺された 子供たち

私の記憶では、もちろん何人かは襲撃で殺されたりしていますけれども、圧倒的に自分の

親に殺された、あるいは薬を呑んで死んだ……ということです。私の場合は、オヤジがすでに死んでいたの、自分は助かったと思ったことさえあります。帰国後、兄ともそんな話をしたことがあるんですね。そのような状況で、私の同級生、あるいはその下の子なんかは、まさに親に殺されています。これが戦前の教育の大きな特徴だったのではないかと、今でも思っています。

よく現地の襲撃で相当死んでいると言われますけれども、彼らは銃や機関銃はそんなにたくさん持っているわけではないですから、持っているのは、せいぜい何丁かの銃と、昔で言う青龍刀みたいなものですからね、そんなにたくさん殺せるわけがないで……。〈間〉ただ、多くの人間が死んだということだけは事実として残っています。

一つ年下の友人にも残留孤児となって帰ってきたのがいますけれど、これは、銃弾が耳に当たった。血を流しながら大声で泣くものですから、親父さんがゴボウ剣で殺そうとするんですね。そこまでは見たんですが、しかし、ゴボウ剣というのは、銃の先端に着けて刺せば別だが、すぐ傍からではなかなか突き刺さらないものです。勢いをつけてドンと刺す分には刺さるんですけども……。痛いからわんわん泣く、血が出て泣く……。結果として彼は助かりましたが、もう10年ぐらいいなくなりますか、中国から帰って参りましたが……。そんなこともありました。それから、同じ開拓団で、この人は、昭和21年に長春難民収容所までたどり着いた人がいるけれども、帰ってきた人がいます。その人の妹さんは川に放り投げられて亡くなっています。

また、麻畑の襲撃以後は、もう完全に統率を失って、バラバラに逃げ回った。途中で何人か同じ開拓団の人間と会っているんだけど、挨拶もできないというか、しないというか、そういう状態でした。

私は、その後の逃避ルートについて、どこをどう歩いたのか、全く記憶がない。たまにポツポツと記憶があるんです。襲撃されて逃げて、私は姉と一緒に逃げたんですけど、途中おふくろと離れて、2回くらい襲撃を受けて……。おふくろを置いて逃げるわけにはいかないものですから、戻ったときに、母親から、それこそすごい形相で「お前はどうしても逃げろ……」と怒られて、逃げました。襲撃が止んだというので帰ってみたら、おふくろはもうどこへ行ったのか全然分からなくなってしまった……。

帰国してから、坪川さんという人がいるんですが、飯白さんの奥さんに「子供に何か薬はないか」と聞いたら、キンカンならありますよ、とキンカンを飲ませたということがあったそうです。キンカンはきついから（気を失っていた子供が）目を開けて気がついたということでしょう……。

### 切れぎれの 記憶の中に……

そんな逃避行の中で、どういうわけか、いくつか覚えている中の一つは、ネギ畑の畝の中でのことです。中国の畝は割合大きな畝で底が深い。そこで疲れていたのでしょうね、寝てしまった。目が覚めたときに隣に変な音がする。ひょっと見ると、頭を銃で撃ち抜かれて、ゴホゴホいっている。ちょうど口から血が吹き出して……。この人は当然、亡くなりました。

もう一人、こっちの方を見ると、口が二つあるように見えたのでびっくりしたが、それはまさに青龍刀で顔の真ん中を（真横に）割られている、それで口が二つあるように見えたんですよ。そんな死体が見えました。どういうわけか、そういういくつかの悲惨

なところだけは記憶にあるんですけども、それがどんな所で、どういうふうにして……ということは全く覚えていなくて……。ただ、それから 2・3 日して農家に行ったことだけは分かっているんですけども……。手記などに詳しく書いている人もいますが、12 歳にもなれば、ある程度は覚えているはずだと思いつつも、ほとんど記憶にない、というのが実際で、不思議なくらい覚えていないんです。

他にも、東京開拓団の残留孤児で、20 年ぐらい前に帰ってきた人がいて、帰国前の 1956 年に会う機会があって、夜通し話をしたことがありましたが、開拓団の団長は誰で、開拓団の担任は……ということも全部覚えているんです。私は全然覚えていない。「お前、頭が悪いなあ、開拓団の担任の先生も分からないのか」と言われるくらい覚えていない。そのくせ日本語だけは忘れていない。その頃の帰国者の中には、もう日本語を喋れなくなっている人もいて、そんな話を中国語で話し合った人もいました。

どういうわけか当時のことはほとんど記憶にない。帰国後、団長はじめ、開拓団の人たちの集まりがあってそこに参加するようになって、人からいろいろと言われると、少しずつ、そんなこともあったかな……という程度です。どういうわけか、そんなふうにして今日まで来たのが実態なんですね。

ただ、他の開拓団の話聞いても、これだけは間違いのないと思うのは、頼りになるべき関東軍は、ほとんどすでに南へ行ってしまっていて、全くと言っていいほど役に立たなかった……ということです。当時は、県長は中国人、副県長は日本人で、実権をもっているのは副県長です。どこの官公署ももぬけの殻で……。

**奥村：**有難うございました。集団自決というのは大変な悲劇だと思いますが、前に一度有名な麻山の集団自決の話聞いたことがあるんですが、あの時は、やはり千人近い集団で逃げるうちに、ソ連の飛行機の攻撃やら何やら、もうこれ以上進めないという追い詰められた状態で、集団自決しようということになって、団長がまず自決してみせたというときに、「ここで私たちは何も死ぬことはない、できるだけ生き延びて逃げよう」という一団があって、そのリーダーのお医者さんでしたかね、そういう結論をとった人たちもいた。もう一つはこの悲劇を祖国に伝えるために、何人かは、「お前たちは帰って祖国に伝えろ」ということで、生かされて帰った……ということがあった。後ほど日本の国会でその真相を調べるということもあったようですけども、その辺りはやっぱり追い詰められてそういう事態を迎えたのか、そしてやっぱり生き延びたいと思った人たちというのは、麻山事件のように、一部は集団から離れていったということがあったんでしょうか。

### 逃避行が 多数の死者を……

**飯白：**そうですね、やっぱりうちの開拓団も、8 月 16 日に移動という時に、一緒に行動に加わらないで、独自に、その家族だけ、数家族だけで街の方に逃げた、あるいはハクジョウシ（白城子）という所を目指して行った、というのはやっぱりありましたですね。私が 1958 年に帰ってくる前ですから、軍から離れていましたけれども、開拓団跡に行った時に言われたのは、「お前らはみんな逃げて、あれだけ多くの人々が死んだけれども、逃げなければあんなにたくさん死ぬことはなかっただろう」ということですね。つまり、若干の犠牲はしかたなかったとして、あれだけ死ぬことはなかった……と。開拓団の幹

部だとか、あるいは憎まれていた人間は殺されたろう、これはしょうがない。それと、物については一切なくなることもやむを得ないが、あれだけ死ぬということは絶対あり得ない……と、そういうことを言われたんですね。

追い詰められたうちの開拓団の副団長は、集団自決したあと逃げて生き延びているんですね。手記でも言っているように「もし、私が、あるいは何人かが生きて帰らなければ、開拓団の最後は何も伝わらないだろう」と、これだけはぜひとも伝えたいという……、これも事実だと思うんですね。でも、結果としては、それはその通りになって、昭和21年に帰って来られました。ちょうど共産党軍と蒋介石の国民党軍の内戦が始まったころです。昭和21年までに帰って来られた人と、それからは帰国事業がほとんど止まってしまった、というような事情もあるんですね。中国側との関係や交渉など、いろいろありますけれども、いずれにしても、早く帰って来られたというのは、ちょうどそれぞれの地域で、帰国を司る機関があったんですね。中国共産党の支配地域から国民党の支配地域とかに入って、そこからアメリカ軍の施設に入って……というように、いろいろな形で帰って来ています。

うちの開拓団についても、帰って来て分かったんですが、現地召集された方々はほとんど昭和21年2月に帰って来ています。若干、シベリアに抑留されたという人もいたようですが、ほとんどそういうこともなく、帰って来られているんですね。その人たちは、ほとんど家族は失って、本人だけが帰って来た。残留孤児探しの時には、随分皆さん一生懸命自分の親族を探したようですけども、分からなかったという人がたくさんいました。兵隊に行った人たちは何らかの形で帰って来られたということ、これもひとつの特徴かなと思います。その人たちは、家族をほとんど失って自分だけが生き残ったんですが、これも大きな悲劇といえますか、惨劇の状態を知らない間に家族を失い、一人になったという話を、私もある人から聞かされました。

奥村：飯白さんはたまたまお父さんが先に亡くなったために助かったのかも知れない、もしお父さんが生きていたらお父さんに殺されていたかも知れない、ということでしたけれども、それでも生き残られたあと、お姉さんと飯白さんと、二人生き延びられて日本へ帰られ、その後もご苦労があったと思われませんが、そのあたりを少し話して下さい。

## 現地農家での2年半

飯白：そうですね、つまり中国人の家に世話になって、当然、私の姉はそこで結婚という形になりましたけれども、私はどちらかといえば、その労働力として働いていたんですけども、ひと言で言うんですね、それは昭和20年8月から1948年（昭和23年）の3月まで、2年半ちょっとですよ、この間、生活は、たしかに大変だったかもしれないですけども、日本での終戦当時のことよりもかえってよかったのではないかというふうに、今でも思っています。子供ですからすぐに順応しますよね。ただ、私と姉とが日本語で喋ると怒られました。絶対日本語で喋ってはいかんと、姉と二人の会話は禁じられました。これは相手にしてみれば何喋っているんだか分からないですから、向こうにとってはそうなのでしょう。したがって全くと言っていいくらい会話しない。どうしても必要なときは片言の、覚え始めた中国語でやるということでした。

その間、ここに安達さんがいらっしゃるし、体験した方もいらっしゃるでしょうが、

中国の農村での仕事というのは、そりゃ厳しいことは厳しいですよ。朝、夜が明ける頃には、山に行って草取りをして、冬になると燃料として山の草を取って来るんですね。熊手なんですけれども、大きな熊手でいっぱい集めてダーチョ（大車）と言われる車に積んで家の庭に積んでおく。それを冬中の燃料にするわけですが、冬はそういうふうやって、山に小さい杏の木みたいのがあって、その木の根っこを採ってきて干して燃料にする、冬になる前に燃料を確保する、というような仕事をやらされました。

それから豚の放牧、羊の放牧、それと牛なんかもやりましたかね。その家でいっぱい飼っているわけではなくて、その部落全体で、声を出してやると集まって来るんですね。それを彼らの畑で放牧して夕方になって連れて帰る、というようなことで、放牧なんかもやりました。

いちばん困ったのは羊の放牧ですね。山羊とか羊とかを各家庭からの1頭か2頭ずつ、20何棟かの家から集まって来るわけですから、私なんかはどの羊がどの家のかは全く分かりませんが、とにかく頭数だけは数えているわけですね。山へ行くとやっぱり狼が出るんですよ。狼が出ると、羊なんてのはどうしようもないんですね。止められて全く動かなくなって、食べられるのを待つような状況で、非常に怖かったという記憶があります。ところが牛になると、これは狼が来ると集団にまとまっちゃってね、立っていると狼は寄って来ないんですね。私はその上に乗かって少しも怖くない。これは不思議なもんだなあと思いながら、そんな放牧もしました。それからうちの部落では、豚だとか、馬糞を集めたり牛糞を拾ったり……。

私は、今もそうですけれども、痩せて背が低いし、力はないんですよ。どうしても中国人と同年齢の連中には負けたくないというのがあってですね、喧嘩をやるんですけど、どうにもかなわないんですよ。やっぱり奴さんたちの方がよっぽど力があって元気なんです。でも負けられないように、よく頑張ったような記憶があります。

## 児童団の仲間と 解放軍に……

先ほど言ったように、戦局は蒋介石の国民党軍と共産党軍（昔は八路軍と言っていた）の戦争がだんだん激しくなってきた、私たちの内蒙古に近いその部落にも解放軍の撤退部隊がやってきて、奥地へ撤退するんですけれども、たまたまその時、私が日本人だっことを知っている人がいて、我々解放軍には日本人がいっぱいいる。その中でいちばん偉いのは岡野進という人間だと——共産党の野坂参三さんですね。解放軍には日本人がたくさんいるという話を聞いたとたん、軍国少年じゃないけど、子供のときから軍隊に入りたいという気持ちが強かったものですから、やっぱり行きたいなと、何とかならんかなというような思いで、昭和22年だったと思いますけれども、養家を抜け出して区役所に行き、解放軍に入りたい、と言いますと、いくつだと聞かれて、14歳だと答えたら、14歳ではダメだ、帰れ、と言われて帰されました。解放軍は17歳からなんですね。家に帰ってから姉の夫に、せっかく助けてやっているのに逃げるとは何事だ、とさんざん殴られたという記憶があります。その頃、中国の土地改革というのがありましてですね、封建地主と闘うということで、すごい闘争というのが行われたんですね。

私はとりあえず小学校を出ていますから、若干の漢字は読める、彼らの中には読めないのもいっぱいいますから、そこで児童団の副団長として、通行人を調べたり、そんなことをやったりしたんですね。

学校が再開されるというんで、学校にも行かしてくれましたが、先生がいるわけじゃないですね。昔のせいぜい小学校か中学校へ行ったのが先生になるわけですから、飯白は算数の1+1ぐらい教えられるだろう、足し算、引き算、掛け算、割り算と……それだけは教えろっていうんで、教えながら一緒に勉強をしていました。そこで少し漢字や中国語を覚えましたが……と。ところが、それからわずか3ヶ月くらいで、日本人に教えてもらうのはまずい……ということで、クビになりました。〈笑〉そんな経験もありました。

戦争が終わって、そこに行ってから生活というのは、食事はもちろん、いいものは何もないですね、野菜の葉っぱだけとか、それにちょっと塩を振って、白菜もみなそうですね、夏はトウモロコシだけ……。うまいけれども毎日食べていたらやになりますよね、飽きちゃうしね。そんなようなことで、夏でも3食は食べられませんでしたけれども、たしかに大変だったなあと思える思い出はありますが、全く中国人と同じおかずですから、別に日本人だからと差別されるということはないし、同じように来ているわけですから、そういう意味では、かえって楽だったんじゃないかなという感じすら、正直言って思っています。

昭和23年(1948年)に15歳になったときに、今度は戦いが激しくなってきた、人はいくらでも要するという状況になってきたんですね。で、その時に、その部落の悪友というか、同じ児童団と一緒にやってきたり、一緒に畑をやったり、喧嘩もしたけれども、そういう連中4人で、解放軍に参加しよう、ということになりました。ちょうどタイミングよく、病院関係だったんですけれども、募集の人がやってきて、人がほしいんだというんで、じゃあ行く行こうってことでそこに行ったんですね。

それが昭和23年の3月でしたけれども、それで病院へ行ったところが、お医者さん、看護婦さんのほとんどが日本人だったんですね。で、かえって戸惑ったこともありました。それまでは日本語を喋らないでいたものですから、忘れてるんですね。何を言っているのかはわかりますけれども、返事をするのに、ごく自然に、当たり前中国語が出てくるんですよ。これはいかんと、考え直して日本語で喋る、……と、そんなようなことでした。

そのお医者さんはもちろん亡くなりましたけれども、その当時世話になった、いろいろ面倒を見てもらった陸軍の看護婦さんと日赤関係の看護婦さん、それから保母さんもしましたし、今でも、つい3年ぐらい前まで元気で会っていたんですけれども、たぶん皆さん80半ば過ぎたものですから、だいたい私より10歳ぐらい歳上の方が多かった。私は15歳で、3年ぐらいになってますからね。そこに日本人がたくさんいたんです。おかげで残留孤児にならずに帰って来られました。

奥村：1950年、朝鮮戦争が始まって、八路軍の一員として朝鮮にも行った、と私は聞いたことがあります、そのあたりと、もう一度中国本土に戻ってから帰国までというのは、簡単にどういうことだったでしょう。



## 朝鮮戦争にも 参加……

飯白：当時中国では朝鮮戦争が勃発した

ときに、中国全土で「抗米援朝」、アメリカに抗し朝鮮を助けるという運

動が非常に盛んだったんですね。これには中国のみならず、中国にいた日本人たちもみんな志願して……、当然、私も若いですから、申し込んでぜひ行こうということは、やっていました。

そこまでのことを少し説明しますと、1948年に移動して、錦州（奉天から北京へ行く途中）まで来たんですが、はじめ軍に入ったときは、第36遼吉軍区衛生部幹部休養所という所で働いて、すぐに遼北軍区に変わり、遼西省（満洲国が崩壊後、新中国の遼寧省になる前の省名）政府の門診所（註：外来診療所）にいたんですけれども、朝鮮戦争が勃発して編成変えがあって、私は病院にいたとしても役に立つような仕事何もないんですから……。日本人医師で元満鉄チチハル病院の大橋先生という方がいたんですけれども、この人の通訳や雑用の手伝いをしていました。注射などもさせられました。その後、遼西省立病院に統合されて、そこに行ったんですね、通訳したり買い物に行ったり、小使いみたいなことをしていたんですが、その時は戦線を離れて、今でもそう思うんですけれども、特別に何をしたのかと思い返しても、あんまり仕事をした覚えもないんですけれども……。

1950年の夏だったと思いますけれども、朝鮮戦争は6月で、中国がそれに介入したのは10月ですね、錦州の近くの飛行場建設に行つて……。そこに遼西省の衛生部幹部学校というのがあったんですね。そこで、医者まではいかないけれども、医者の助手みたいな幹部を養成するところなんです、それから戦争時代ですから緊急に衛生要員を養成するということになりました。

ここにも日本人たちが結構いたんですけれども、省立病院の合同のための衛生隊を組織したんですね。そして朝鮮に行くということになりました。それは1951年になってからのことです。ほとんど交代で出たり入ったりしてますから、その遼西省というところで編成して行く……。ということで行ったわけですね。ところが、途中でどういうわけか人が足りなくなっちゃうんですね。おそらく兵隊でも逃げたりする者もいるから……。衛生隊員でもそういうことがあって、緊急に補充するというので、補充隊員として私が選ばれて入っていったんです。1951年の4月か5月だったと思います。シュウアン（集安）という所がありますね、通常は、シンギシュウ（新義州）からアントン（安東）に入る、その真ん中辺りに集安という所があるんですが、その対岸にナントカ言うところがあるんですけれども、そこから鴨緑江を渡つて北朝鮮に入る……。

瀋陽に集結する時にたまたま衛生部の部長に会ったんですが、「お前が行くのはダメだ、日本人が行つてはいかんのだ」と言われたんですね。ところが、私は「飯白」と言うんですが、中国語では「ファン バイ」というんですね。それがそのまま中国人の姓にも名前にもなるんですよ。私はまだ「国籍＝日本人」という意識はありませんから、中国人の一人として、「絶対、日本人だということは言うな」と念を押されながら行きました。

1950年6月以降は、「抗米支援、保家衛国」の一大キャンペーンをはっていて、日本人も同じように、志願していった。兵站部ですから、南へ行ってドンパチというのは全くしませんでした。18歳でしたけれども、空襲警報で怖い思いをした記憶があります。

## 衛生隊では 日本語が……

やっていた仕事というのは、衛生隊の管理や、日本人医師に少し習った知識での薬の管理だとかが主体でした。ただ、そこで非常に困ったのは朝鮮語が分からないんですよ。通訳もないんですよ。どうするか、ちょっと日本語で聞いてみようかということで、使ったら、「お前の日本語は日本人の日本語だ、中国人の日本語ではない」と言われたんですね。〈笑〉それで、「私は日本で生まれて、終戦で日本から中国に帰ったのだ」と、「だから子供の時から日本語なんだ」という話をしたんです。初めのうちは医薬品も非常に乏しいですし、現地の住民は診ないということだったんですね。ところが、やっぱり医者というのは患者を見たら放っておけないんですね。その時通訳をやって、日本語ですよ。近くには朝鮮（人民軍）の野戦病院がありました。ところが、そこには皆行かないんですよ。どういうわけか我々の所に診てくれと言って来る。これはやはり中国軍と当時の朝鮮人民軍とはずいぶん違う感じがしましたね。中国軍は「老百姓（ラオバイシン＝民間人）」に親切で、絶対悪いことはしない……、これは非常に徹底してますから……。外科主体だけれども、それぞれの処置をしてやる。

食事なんかも、おコゲができますよね、おコゲを食べたいんですが、それを現地の朝鮮人に与えて、そうすると彼らは焼酎ですか、ドブロクなんかを持ってきて時々飲ませてくれる……。私は酒はダメだったんですけども……。

## 帰国のきっかけ 薬品包装の日本語新聞

そんなような生活をしていた 1953 年（昭和 28 年）、この頃、日本人の帰国の動きがあったんですね。日本赤十字社・平和委員会・高良トミさんなどの尽力で、日本人の帰国が実現した。そういうニュースを、私が管理している薬品の包装紙、これがたまたま日本語の新聞だったんですよ。長春の日本人会を出していた新聞です。それにたまたま帰国問題が出ていたんです。そしたらとたんに帰りたくなっちゃって……（笑い）、上の人の方へ行っただけです。「私は日本へ帰りたと思うんですけど……」というと、私が日本人であることは知っていますから、「いいだろう」と即刻OKなんですね。実際にはこの頃は休戦協定の交渉中で、8月頃には休戦になるだろうと、上の方では通達が出ていて知ってるんですね。「帰ってよろしい」ということになったんです。

通行証をもらって、お金はないですから、通行証だけですよね、通行証があればどこかで食事はできるわけですよ。それで、はじめトラックに乗って、平壤の近くまで来て、その部隊で下ろされて、そこから平壤までずーっと歩いて来てるんですね。もちろん平壤なんて全く何もなかったですけども、どこをどう歩いて来たのか、分からない。気がついた時には、今の丹東（タントン＝昔の安東）ですね。ちゃんと汽車に乗って帰って来てるんですよ。でも、この部分が記憶から抜け落ちている……。

1953年のたしか3月頃、丹東に行って、行く所がないんですから、ただ、証明書があれば何とかメシだけは食えるから、部隊へ行ってメシを食わしてもらって……。瀋陽の招待所という所に入って、街に行ったら、皆さん、きちんとした服装をして帰る準備をしているんですね。私はまだ油だらけの軍服を着ているものですから、とても羨ましい思いをしたんですけども、街では日本人がたくさん買い物してるんですよ。やっぱり帰りたいなーと思いました。

そのときに東京開拓団の残留孤児が集まっている所へ行きました。そのときに言われたのは、「お前は朝鮮から帰ってきたばかりだから、もうしばらく中国に留れ」でした。つまり、すぐに帰すと国際問題になる……と。そこまでは問題にしないと思うんですが、何かそれらしいことを言われて、もうしばらくいろと言われたんです。(笑)

そのほか、ソ連の援助による自動車工場にもいたことがあります。その前には北京の軍政幹部養成学校にもしばらくいました。病院に電話をした時に、お前も一緒に帰ろう、と言われて、「帰してくれれば帰るんだけど、帰ったらダメと言われた」と話したことがあります。

そんな状況で 1958 年に帰って来たんですけれども、ただ、帰って来ていちばんびっくりしたのは、兄が「お前が朝鮮へ行ったことは知っていた」と言われたことですね。なぜ兄がそれを知っていたのか……。昭和 23 年か 24 年か、朝鮮戦争が始まる前だったと思うんですが、日本へ手紙を出したんですよ。それが 1 年ぐらいかかって着いてるんですよ。兄の方から私に返事をくれているんですね。その返事が病院に着いているんですよ。その返事をくれたのが錦州の病院に着いていた。私が付き人みたいなことをやっていた大橋先生のところに届いて、また先生のほうから、「飯白は朝鮮に行きました」ということを兄に返事を書いていたんです。だから、兄の方では朝鮮に行ったのだったら、その後、アメリカの捕虜になって韓国経由で帰って来るんじゃないか、ということ願っていたんだ、と言われたんですね。へーっとちょっとびっくりしましたが……。

#### 中国人と 対等に喧嘩……

よく、「苦勞したことは？」、と聞かれることがあります。私は何もしなかったなという感じがすると、それから苦勞といっても、逃避行のときはたしかにいろいろポツポツといやな目にも遭いましたけれども、それ以後というのは、生活そのものは中国人と一緒にだし、仕事をやっても中国人とほとんど一緒ですので、特別差別されたということもなかった……。ただ、ご存知かも知れませんが、よく「小さな日本の子供」「シャオリーベンズ=小日本子」って言いますよね。これはよく言われました。そうすると、こっちも腹が立って喧嘩するんですね、やっぱりやりました。これは多少は差別ではあったでしょうけれども、こちらは差別という意識は何もないですから、取っ組み合いの喧嘩をする……。すると、必ずと言っていいくらい中国の共産党の幹部が出てきて仲裁するんですよね。まず叱られるのは中国人の方ですよ、苛めた……ということ。それから私に「お前も民族意識が強すぎる、もっと国際主義の精神を持て」と言われました。(笑)

そういう意味で、いろんなことがあったけれども、喧嘩ができるんですね、中国人と対等に喧嘩ができるというのが、やっぱりよかったんじゃないかなと……。 (笑い)

戦後のそれこそたいへんな時期ではあったんでしょうけれども、私にとっては全く中国人と同じ生活で、決していい生活ではないけれども、日常の生活ができていますから、かえって日本にいるよりも恵まれていたかも知れないですね。ただ、学校だけは行けなかった。小学校を卒業して、高等科 1 年で終わりましたけれども、なんとか今日まで生き永らえてきています。

二三日前にも、錦州のお医者さんの方と電話しましたが、こちらは偉い人のことはあまり知らないんですが、向こうは私のことをよく知っている……。 「お前はこうだった、

ああだった……」と言われるんですが……。一緒に仕事をした人たちが、いま日本で体の具合が悪いのが何人かいるものですから、その辺の状況を中国の友人に報告したり、連絡し合っていますけれども、そういう点ありがたいと思っています。

ただ、非常に残念なのは、当時の友人もずいぶん文化大革命の時に亡くなっていることです。文革の時にも方正の日本人公墓を守り通したという、これはすごいなと思いますが、文革の時に……昔の幹部もほとんどやられたという人がいますけれども……。元気でも、87から90近い人たちが4-5人いるんです。電話をすると、誰々は元気かと聞かれ、だんだん少なくなってくるのがさびしい……。という話になります。

奥村：中国に行かなかったお兄さんたち、それから逆に向こうで苦勞されて、向こうの方と結婚されて日本に帰って来られたお姉さん、肉親の方のその後についてお話し下さい。

### 再会の兄姉たちとは 心の距離が……

飯白：私の姉や兄はどんな人間が帰って来るんだと、やっぱり心配してくれたようです。“赤い国”から帰って来るんだから、当然“赤い人間”が帰って来るんだろう、と心配していたようです。11の歳から25の歳まで、兄弟としての心の交流はないですから、正直言って、兄さんとか姉さんとか、そういう感情というのは確かに薄かったですね。最近になってむしろ兄弟の情が出てきたような感じがしますけど……。正直言って、成人に達していますから、価値観も当然違ってくるし、いろんな意味で考え方が違っているんですが、しかも、一緒に生活していないんですよ。初めから私は私一人ですし、向こうで生活してますから、兄弟4人で過ごしたというのは満州に行く前ですし、時間はごくわずか……。それから、それ以後というのは、私と中国に行った姉ともわずか2年ちょっとしか一緒に生活していないのです。その後、私は軍に入り、帰って来るまでに2回ぐらい会ってはいるけれど、それ以外、一緒に生活はしていない。それから20何年、姉が帰って来たのは1980年かな、80年に子供を連れて帰って来たんですけども、そういうわけで、本当の意味の兄弟の情というのはどうなのかと、心もとないな、という感じはしています。

よく残留孤児の皆さんから、「中国に残留したお姉さんとの間と、日本に残っている兄弟との間はどうですか」と聞かれるんですけども、いずれにしても、本当に一緒に長く生活したことがなかったものですから……。

### 方正日本人公墓の意義

あと、最後に、私がちょっと感心したのは、この方正ですね。方正の日本人公墓については、本当に難しい状況の中で、松田ちゑさんはじめ、よく地元政府が立派なお墓を建てられたなあということ……。さきほど事務局の方が訴えられていましたけれども、全国どこにもないですよ。あれだけしかないですよ。葛根廟事件の関係者の皆さんもいらっしゃいますが、そこで千人以上でしたか、亡くなっていますよね。何らかのお墓を建てたい、だが、なかなかできない、そういう中で、方正だけは、周恩来のひと声があったとはいえ、立派なものを建てられたということ……。

もう一つは“文化大革命”の頃、正直言って中国の人と大論争になっちゃったんですけども、私は中国で学んだことと全く違っていると思いました。むしろ私たちがいいじ

められた方なのですが、その時期に、あの日本人のお墓を守ったということはすごいことだと思います。

方正のツアーに参加して、たまたまそれが、例の「嗚呼 満蒙開拓団」の映画に出演することになっちゃたんですけれども、……。またぜひ行きたいなと思っています。

方正の日本人公墓というのは、単にあの近辺だけのことだけではなく、ある意味では開拓団全体の養母と、それからその結果があそこに表れているんじゃないかと思っています。ぜひとも多くの人に行ってもらいたいと思っているし、方正県の人々の……。守ってきてくれたということについては、心から感謝したいと思いますね。

もうひと言言わせていただきますと、現地の住民（農民）に殺された、襲撃されたという日本人もいるんですけれども、実際にはその裏で、同じ人たちが、あれだけの多くの残留孤児を育てたということですね。私を含めて助けられたわけですけれども、おんなじ部落に住んでいる人たちが、同じように日本人の家族、子供を助け、養育し、立派に育て上げているんですよ。このことは絶対忘れてはいけないと思います。

そういう意味で、この平和な時代、毎回いろんな大きなことがありますありますけれども、二度とわれわれのようなことは、あつてはならないと思っています。この思いだけは後世に伝えてなくてはいけないと思っています。

どうも、つたない話で、喋るのが苦手で、申し上げないほうがよかったかも知れませんが……。以上で終わります。〈拍手〉

奥村：ありがとうございました。このあとは質疑応答の形で進めたいと思います。

これだけはどうしてもこの機会に聞いておきたいということ、どうぞお願いします。



## ＝ 質 疑 ・ 応 答 ＝ （ 要 旨 ）

質問者A：15歳で解放軍に参加されたとのことだが、満州では「サイゴン第4野戦軍」が南方に移動している。飯白さんの所属部隊は錦州に留まったとのことだが、「第4野戦軍」ではなく、最初から病院関係所属ということか？

飯白：所属したのは、まだ「解放軍」と呼称する前のことで「民主連軍」と称していた。その後、編成変えにより、「人民野戦軍」「第4野戦軍」に分かれた。私は「第36号陸軍病院」の所属であった。同じ軍に入った連中も、二人ばかり南に行ったが、帰国後、「お前はいいよなあ、おれたちは帰って来ても田舎暮らしで貧乏している」と嘆いていた。

質問者A：当時は解放軍に外国人は入れないと言っていたが、飯白さんは後方部隊、病院

関係だから入れたのか？

飯白：所属は兵站部で、(幹部は私が日本人であることを知っていたが)当時、私は日本人ではなく、全くの中国人扱いで行っている。

質問者A：ソ連の侵攻の時、日本人が内蒙古の興安街に集まってきた、というのは、いくつかの開拓団の統合でなく、東京開拓団への避難ということだったのか？ また、個別の行動(自由行動?)はあったか？

飯白：開拓団に避難して来たもので、団としての合流ではない。自由行動ということはない。また、ブツリュウとの合流もしていない。

質問者B：「ブツリュウ開拓団」について

正式名称は？ 文字は？ また、東京開拓団の慰霊碑の所在は？

飯白：正式名称は「佛立仁義開拓団」。

「東京開拓団」の慰霊碑は、武蔵小山駅そばの「朗惺寺」(ロウセイジ)境内にある。毎年10月第2日曜日に慰霊祭が行われる。近年参加者が少なくなっている。

\*興栄山朗惺寺 〒142-0062 品川区小山3-21-6 電話 03-3781-2876

質問者B：「13次」について 満州国建国の昭和7年に入植した「弥栄(ヤサカ)開拓団」を「第1次」とし、昭和19年が、その年から数えて「13次」としている。

**\*これにより、飯白氏長年の疑念、「13次」が解決した。**

飯白：他に聖蹟桜丘にも「第13次」と書かれた慰霊碑が多数ある。

質問者C：1980年代半ばに、飯白さんのお姉さんのお話を「三互会」(中国帰国者を支援する会)の会合で聞いたことがあった。原稿用紙に書かれた逃避行の話を、時折り絶句しながら読まれたが、本当に悲惨な体験をされたと思った。お姉さん、弟さん(飯白さん)それぞれ異なるが貴重な体験をされたと思った。

今の中国は「愛国主義」と言っているが、中国共産党の初期の国際主義的な精神が復興してほしいと思っている。飯白さんが中国人と喧嘩をした時に、幹部が出てきてまず中国人を叱り、それから飯白さんを叱ったときに、「お前は国際主義的精神が足りない…」と言われたという話を嬉しく聞いた。ほかに中国共産党の「国際主義的精神」に関するエピソードがあったら聞かせてほしい。

飯白：「日本鬼子」と言われるとカッとくる。私が怒られたのは、「日本鬼子というのは、当時の日本の侵略者の象徴だからお前が気にすることはない」と諷められたということ。彼らは軍国主義者と普通の人間とを区別する。仲間同士の喧嘩など些細なことだが、言われると敏感に反応し、カッとされるのはよくない、という意味での諫言であった。

「朝鮮人民軍」と「解放軍」の違い 解放軍は軍規が厳しく、特に一般市民に対する態度が朝鮮軍とは全く違う。朝鮮軍の中には昔の日本軍の下士官だった人が多数いた。彼らは威張っており、女性に対しても不遜であった。解放軍は絶対そういうようなことはしない。住民に対して「人民の軍隊」ということが徹底しており、すべてがソ連式の朝鮮人民軍とは違っていた。

質問者D(日本写真家協会 小西氏)：飯白さんのお話を感銘深く聞いた。麻畑で襲撃されたとのことだが、襲ってきたのはどういう人たちか？ ソ連軍か？

飯白：襲ってきたのは現地の住民だ。銃はあまり持っておらず、青龍刀など……。位置は不確かだが、内蒙古と吉林省の境の辺りと思う。

麻畑は背が高くて周囲からは見えにくい。そこに逃げこんだ。青年隊が残って、その

銃声を聞いている。(開拓団の)銃は十何丁かで、ほかに三八式や村田銃だ。その時の襲撃で、多数が自決をした。

質問者D：青酸カリは開拓団に置いてあったのか？

飯白：倉庫にしまってあったという。中には(使ったが)効かなかったという人もいる。

質問者D：7-8年前からハイラルなど各地の戦場跡や開拓団跡の写真をいろいろ撮っている。写真の展示を通じて、「戦争の悲惨さ」「平和の大切さ」を広く伝えて行きたい。当時の解放軍の“清廉潔白”は心に残る。実際を知る人の高齢化に伴い、次第に声が小さくなってきている。伝えて行くことが大切だ。

質問者E：朝鮮戦争に参加されて、日本人の戦死者について何かご存知ないか？

飯白：朝鮮戦争で日本人に会ったことは一度もない。

質問者E：大連のガボウテン(互房店)に十数名の日本人の墓がある。どういう所で戦死したのかと思っている。空中戦や空爆の体験は……？

飯白：ミグ戦闘機の攻撃は、ほとんど1日1回はあった。空中戦を実際に見たことはない。

52年か53年頃ミグが初めて出てきて、日本軍が教育したパイロットの1期生が、国境に近い鴨緑江のほうで初めて空中戦をやった、と聞いている。

質問者E：ソ連空軍参加の作戦のようだ。旅順には朝鮮戦争で戦死したソ連兵の墓がある。

飯白：最後の頃には、「カチューシャ」と呼ばれたソ連製のロケット爆撃隊も、義勇軍の所に多数配備された。近づくことはできなかったが、管理者はソ連兵だと思う。

奥村：まだ話は沢山あると思いますが、このあと懇親会ということで、会場を変えて用意しておりますので、どうぞそちらへお出で下さい。

以前この総会に何度もお出でになった方で、開拓団の生き字引のような方がいるんですが、最近は出ていただけない。Iさんという高齢の方ですが、そんなふうが高齢化していて体験者が少なくなっています。飯白さんは私より二つ下ということで、これからも体験を伝えていっていただきたいと思います。今日は貴重なお話を有難うございました。

〈拍手〉 ——終了——

〔記録・文責：吉川雄作〕

朝日新聞東京都内版 2010年10月11日付

# 農業移民の苦難継ぐ

## 集団自決・襲撃…在在郷開拓団

終戦前年の1944年春、商売が行き詰まり、農業移民として旧満州（中国東北部）に渡った山の商人がいた。1039人の東京在在郷開拓団。翌年の夏、ソ連軍や中国人の襲撃や、集団自決で、多くが非業の最期を遂げた。10日、品川区の武蔵小山商店街の一角にある朗愴寺で慰霊祭があった。

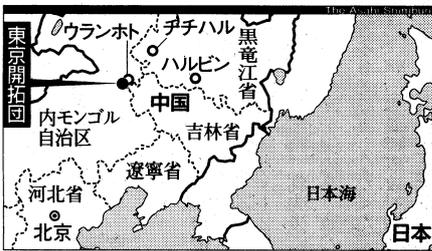
（池田孝昭）

### 引き揚げ者ら慰霊祭

武蔵小山商店街



慰霊碑の前に集まった東京在在郷開拓団の引き揚げ者ら=10日、品川区小山3丁目の朗愴寺



多くの買い物客でにぎわう武蔵小山商店街。アーケードから歩いて1分ほどの朗愴寺に、約20人の引き揚げ者やその遺族が集まり、殉難者を追悼した。残留婦人や孤児となり、長らく帰国できなかった人も多く、中国語を交えなが

ら苦難の半生を語り合った。東京開拓団は、日中戦争の拡大に伴い次第に物資が乏しくなり、商売が難しくなった武蔵小山や周辺の商店主らを中心に結成。内モンゴル自治区のウランホト市（旧興安）の郊外に入植した。家が瀬戸物屋だった永久保恒雄さん（78）は「父はいつか満州で店を開くつもりで、商売道具一式を別便で送っていた」と振

り返る。「大戦完遂のため食糧増産に挺身し…五族協和の実を挙げんがために敢えて転産業し入植する…」引き揚げ者が同寺に建てた慰霊碑に刻まれた「結成の趣意」にはこう記されている。しかし手探りの農作業に慣れる間もなく、若者は次々と現地召集された。ソ連軍、中国人の襲撃になすすべもな

く、女性や子どもは集団自決に追い込まれた。折本守平さん（77）の家は武蔵小山駅前でカメラ店をしていた。「盗賊に包囲された時、幼い弟に青酸カリが渡され、泡を吹いて死んでしまった」。父親が表具職人だった平原美英子さんは（77）は、「同級生の男の子に、母親が小刀を渡し、切腹の仕方を教えていた」。集団自決の惨劇

をこう振り返る。大井川君子さん（77）の家は武蔵小山駅前の甘味店。「大きな鎌を首筋に突きつけられ、身へるみはがされた」。引き揚げ者も高齢化が進む。慰霊碑顕彰保存会の副会長の飯白栄助さん（77）は「自分たちが開拓団を肌身で知る最年少の世代。何とかこの碑を守り、後世に伝えていきたい」と話している。

## 帝都からの満州開拓団

転業商人の悲劇



1

飯白タツ子さん（84）の父は、品川・戸越銀座で海産物を中心にした乾物商をしていた。結構、繁盛してたんですよ。「ターちゃん、銘仙（絹）の服ばかり着て、ぜいたくね」ってご近所から言われたのを覚えてますから。学校が終わった後、よく店を手伝いました。戦争が始まってからはサケもアジもサバも品薄で、売れるものがなくなっちゃった。あるのは、配給品の砂糖の大きなおひつくらい。隣の洋屋屋さんも店を閉めてしまいました。だんだん生活が苦しくなり、

## 売り物品薄に 家族で大陸へ

子どもたちに食べさせた後、父の食事が、たくあんとお茶だけだったのを見たこともありま



飯白タツ子さん

父は工場に勤めることも考えていたようです。そんな時、武蔵小山の同業者から開拓団への誘いを受けました。「お国のためにやる農業だ。土地も、家もあるから、一緒に満州に行こう」って。鉄道局で働いていた私は当時、18歳。仕事が楽しくて満州になんて行きたくなかった。父

だって体が強くなかった。でも商売が立ちゆかなくなり、子どもたちのためにと思い詰めたんでしよう。「満州ならお米はなくても雑穀なら、腹いっぱい食べられる」と説得されました。それに病弱な母を放っておけなかった。

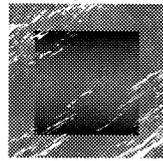
農業なんて全く知らない父は、1カ月ほど農業の研修を受けました。両親と当時小学6年生だった弟（栄助さん）と4人で満州へ向け、上野駅をたったのは1944年4月末です。まじめな父は最後まで悩んだんだと思います。団の中では最後の方でした。

満州で両親を失い、戦後も40年以上も現地にこもりざるを得なかった飯白さんの体験から、東京開拓団の悲劇の歴史をたどる。

(平成22年)10月13日 水曜日

# 帝都からの 満州開拓団

転業商人の悲劇



2

東京開拓団の入植地は当時、興安と呼ばれたウランホト市の郊外。1万3千畝の敷地は、16の部落に分かれていた。部落名は戦意高揚目的で選定された「愛国百人一首」から採られた。飯白タツ子さんと家族は柏部落に入った。

新潟から船で大陸に渡り、興安駅からはダーチョ(馬車)に揺られて部落に着きました。土を日干ししただけのれんがで造られた粗末な家にはびっくりしました。

電気もガスも水道もない。土間のかまごでまきを炊き、その煙で床下を暖める。明かりは油のランプでした。その家も畑も、現地の人を追い出したもの

## 倒れた父の後 一人で農作業



だったんです。確かに食べ物はありました。トウモロコシやアワなどの配給も多かったし、お菓子も買えた。着物も支給されました。畑は、畝の端まで歩いて半日かかってしまうほど広がった。最初は草刈りもできなくて、見かねた現地の人たちが手伝ってくれました。炎天下で無理をした父は、数カ月で倒れてしまいました。

飯白さんの父は10月に亡くな

満州での耕作の様子 戸田孝明さん提供。中央が戸田さんの父、市平さん。戸田家も品川・戸越銀座で茶屋をしていた。日本で徴兵された孝明さんを残し、満州に渡った両親と妹3人がかえらぬ人となった

る。母は病弱で、農作業は飯白さん一人が担うことになった。毎日、井戸の水をくんで、てんびん棒で担いで運ぶんですが、ふらついてこぼすと、冬場はすぐに凍っちゃう。そこに足を滑らせて転んでしまう。本当に大変でした。

父が生前に決めた同じ開拓団の若者と11月に結婚しましたが、翌年の春には召集され、団から離れました。「開拓団に入れば、兵隊にとられない」と聞いていたのに、20代、30代の男性が、根こそぎもっていかれました。

1945年夏、900人余りの団員のうち、成人男子は70人程度だったと言われている。

# 帝都からの 満州開拓団

転業商人の悲劇



3

1945年8月11日、ウラン  
ホト市街は参戦したソ連の空襲  
を受ける。飯白タツ子さんは弟  
と2人、草刈りをしていた。  
かまどにくべる草を刈っていたら、飛行機が低空で飛んできた。日本機だと思って「万歳」とやろうとしたら、機体に目の丸がない。慌てて逃げました。  
関東軍に助けてもらおうと団  
でまとまって南へ逃げることに  
なりました。でも盗賊の襲撃に  
あって麻畑に逃げ込んだ時、周  
りを囲まれてしまったんです。  
8月17日。この麻畑で3000  
人以上の開拓民が自ら命を絶っ  
たと言われている。  
もう生き地獄ですよ。あちこ

## 盗賊に襲われ 麻畑が地獄に



ちで「痛いよお」とか「お母さ  
ーん」とか、子どもの声が聞こ  
えてくる。  
団で青酸カリを配つたらしい  
んですが、弟に取りに行かせた  
時には、もうなかった。母は手  
ぬぐいを首にまいて、「2人で  
両側を引っ張って。お父さんの  
ところへ行かせて」と言っ  
ます。どうしてそんなことがで  
きますか。母を背負い、雨の麻  
畑を脱出しました。  
でも母は私の背中からずり落  
ち、ぬかるみに倒れたまま、指  
だけ指し「先に行け」と言っ

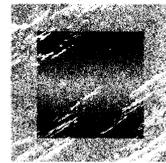
開拓民が逃避行でさまよった原  
野。1988年6月、平原英美  
子さんが慰霊に訪れた時に撮  
影。大田区で表具屋をしていた  
平原さん一家4人も開拓団に参  
加。逃避行の末、4人とも帰国  
を果たした

です。「この子(弟)だけは日本  
に帰して」って、絶え絶えと声に  
ならないような声でした。私は  
弟の手を引き、走り出しました。  
盗賊の襲撃は終わりませんで  
した。頭に銃撃を受けた女性の  
頭や口からガバガバと音を立て  
て血が流れるんです。きれいな  
人だったのに。私をお姉さんと  
慕ってくれた年下の少年も何か  
叫びながら、日本刀を振りかざ  
して飛び出し、撃たれてしま  
いました。  
腹巻きにお金を隠していた弟  
は丸裸にされました。泣きなが  
ら、死んだ少年のスポンを脱が  
せて弟にはかせました。

2010年(平成22年)10月16日 土曜日

# 帝都からの 満州開拓団

転業商人の悲劇



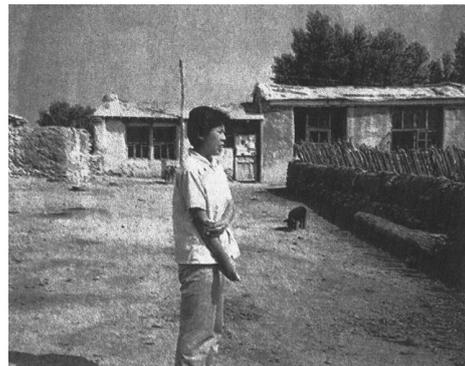
4

飯白タツ子さんは、弟と2人、低木しか生えない広野をさまよった。

小川に差ししかかった時、ポケットに石を詰め、しゃがんで顔を洗め、死のうとしました。でも死ねないですよ。苦しくて。弱い人間なんです。のどが渴いた時は、馬の足跡にたまった泥水だつてすくって飲みました。

現地住民の集落に寄り、食べ物を買ってもらうと、「嫁になりなさい」と言われる。何度か逃げだしましたが、ある集落にいた日本人女性に「ソ連兵は日本人を見たら男を殺し、女は襲

## そっと歌った 「誰か故郷を」



う。弟さんを日本に帰りたいなら、中国人と一緒にあって、とりあえず落ち着いた方がいい」と諭されました。弟のためならと、あきらめました。

7歳年下の弟、栄助さんは3年後、飯白さんの元を離れて八路軍(中国共産党軍)に入隊。衛生部隊の一員として朝鮮戦争にも加わった。1958年、先に帰国を果たす。

弟と一緒に帰ろうと誘われましたが、まだ幼い子どもを置き

日干しれんがづくりの家。飯白タツ子さんは開拓民時代も、戦後もこうした家で暮らした。中央は現地の住民。1988年6月、ウランホト市郊外、平原美子さん提供

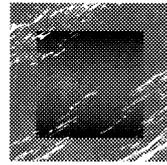
去りにできなかった。でもいつか必ず帰りたい。歌詞に「故郷」のつく歌を歌っていました。

家族が畑仕事に出て、近くにいない時などに、そっと小さな声で「幼馴染のあの友 この友 ああ 誰か故郷を想わさる」って。弟に日本から送ってもらった女性雑誌や文庫本はむさぼるように読みましたね。日本語は私の宝物ですから。

文化大革命の後、頼まれて村の大学受験を目指す子たちに日本語を教えるようになりました。本当にうれしかった。どうとう自分の国の言葉は、忘れなかつたぞって。

# 帝都からの 満州開拓団

転業商人の悲劇



5

飯白タツ子さんは、日中の国  
交回復後の1975年、ようやく  
一時帰国を果たした。

飛行機の窓からうつすらと富  
士山が見えた時、思わず手を合  
わせて喜んで、涙が出ました。

羽田空港に着いて、日本の発  
展ぶりにはびっくりしました。  
映画を見てみたい。ラジオも  
ない生活でしたから。

向こうはお風呂に入る習慣も  
ないので、日本の温泉に入った  
時は、本当に幸せでした。日本  
人でよかったです。

永住帰国は86年。18歳で満州  
へ渡った飯白さんが還暦を迎え  
ていた。

満州に行く前に勤めていた鉄

## 自尊心も夢も 戦争で奪われ

道局の職員は、列車に自由に乗  
れましたから、福島まで買い出  
しに行ったこともあります。楽  
しかったです。

こんな私にだって夢があった  
んです。

働きながら夜学で女学校を卒  
業したばかりで、同僚と「私た

ちこれからだよね」「25歳まで  
は、お嫁になんかいかないわ」  
なんて話してた。そろばんの資

格も取りたい、タイプライター  
も習いたいねって。「自分らし  
い仕事を持ちたい」と夢見てた。

でも全部、満州で終わってし  
まった。  
7人の子ども全員を呼び寄せ

た飯白さんは、足立区の都営住  
宅で1人で暮らしている。

母を見捨てた負い目は、いま

も消えませんが。どこで死んだの  
かすら分からない。父の墓標も  
焼かれてしまい、形見が何もな

い。両親と一緒に写った写真す  
らありません。

日本に帰れて、両親に申し訳  
ないほど幸せです。でも自尊心

も、夢も、奪われました。とにか  
く戦争はやめてほしい。一番犠  
牲になるのは、国のえらい人で  
も、兵隊でもない。何にも悪いこ

としない庶民なんですから。  
〓おわり(この連載は池田孝昭  
が担当しました)



飯白タツ子さん。足を  
悪くして遠出はできな  
いが、冬の晴れた日  
には、踊り場まで富士山  
を見にいくという

## 近くて遠かりし…岩手と方正

奥村 正雄

誘われて映画を観た。『いのちの山河』（大沢豊監督、「日本の青空Ⅱ」制作委員会）なる近作。岩手県の山あいの寒村・沢内村はかつて豪雪、多病、貧困にあえぎ続けた。新しい村づくりのため帰郷した深沢晟雄は多くの困難を乗り越え、1986年の老人と乳児の医療費無料化で、それまで全国で最悪だった乳児死亡率を、全国初の「死亡率ゼロ」へ導いた。その軌跡を追った映画である。

### ■涙こぼる

私は映画を見ながら、わけもなく涙を流した。話の展開を追う一方、この映画の舞台となった村と、そこにつながる人間群像との個人的因縁をあらためてかみしめていた。まず20代のころ、私の幼い歌ごころをとらえた民謡が「沢内三千石、およねの…」という「南部牛追い唄」だった。1969年5月、二番目の妹の祝言に、病いの父に代わって出席した私は、厚い壁に挑みながら新しい人世に船出する二人のために、万感の思いを込めてこの歌をうたった。

この山村との、二つ目の縁は1980年代である。当時、親交のあった趙喜晨氏（本誌10号で方正地区日本人公墓建立の経緯をつづられた、当時の黒竜江省外事弁公室幹部）から藤原長作さんの事績を聞き、ぜひ取材したいと思った。この時、藤原さんは方正にいと聞いたので連絡先を教えてもらい、電話を入れた。ところが藤原さんは中国政府から国家友誼賞をもらうことになって、北京へ行っておられた時だった。私は藤原さんの北京の宿舎へ電話し、お会いして話を伺いたい旨、話した。電話でのやりとりは、後日、藤原さんが方正か岩手へ帰った時に、あらためて取材させてもらうことになって受話器を置いた。その後、方正の友人から藤原さんが酒で体調を崩されている噂を聞いた。その間も方正県から政府の幹部たちがいろいろな目的で訪日するたび、彼らは何をおいてもまず岩手の寒村で病を養う藤原さんを表敬訪問し、それから東京の中央官庁など来日の目的地へ向かっていた。その後、藤原さんがもう会って話を聞ける状態ではなくなった上、息を引き取った藤原さんを追うように息子さんも世を去り、私はついに藤原さんにも身内の方にもお会いする機会を失ってしまった。

### ■分骨という重荷

その後、すでに冥界に去られた藤原さんと、いかにも現世的な話で関わることになったのは、この方正友好交流の会の前身の中心的存在だった故石井貫一さんが2002年に亡くなられた後である。中国への貢献で中国政府から国家友誼賞を受賞した石井さんは、

1994年、会のメンバーを伴って方正へ行き、帰路、ハルピン、北京で親しい人たちと会合を重ねるたび、「私の遺言」として口をついて出た言葉が「私は半分日本人、半分中国人。だから死後は骨を半分方正に埋めてもらう」だった。方正、ハルピンでの公式会合が終わった後、北京に回った石井さんは、公私にわたって深い付き合いのあった北京政府の高官の招待宴の席でもこの「遺言」を私に通訳させたのだった。

処理上の問題はまず、この「分骨」という日本流の発想を中国政府が認可してくれるかどうか、認可してもらえたら、それを公墓の中に入れさせてもらうのか、あるいは別の形を考えるか、である。私たちはまず方正政府の外事弁公室を通して、中央政府による認可を具申してもらった。この回答がなかなか得られない。「分骨とはいえ、中国で唯一公認の日本人公墓の園内に外国人のお骨を埋葬させるというのは、やはり簡単ではないのか」とイライラして待った。ところが、ある時、来日した方正政府の幹部にその確認を求めたところ、とっくに許可が下りていたことが分かったのだ。それならなぜ早く、待ちかねている私たちには知らせてくれなかったのか。伏せておいたほうがいい理由があったのか…しかし私たちには、それを詮索している余裕はなかった。分骨をどういう形で実現するか、が次に急がなければならないテーマだったからである。

## ■夢潰ゆ

たまたまこのころ、藤原長作さんの顕彰碑の建設が思うように進まないでいるという話が伝わってきた。

「建設費が250万円かかるが、岩手ではその半分、125万円しか集まらないというので困っているようだ」

というのである。ここで私は、藤原長作さんの顕彰碑、石井貫一さんの分骨の計画、さらにこれから将来、現われるであろう、方正のために献身する同胞のための、「方正に尽くした日本人合同顕彰碑」のようなものを建てるプランはどうか、と考えた。そしてこの話をしたためた手紙を、岩手の藤原さんの郷里で顕彰碑の実現に奔走しておられ、この土地の日中友好協会の会長でもある僧籍のRさんに送った。しかしこの返事はついに来なかった。

「お前が考えていることは、藤原先生の顕彰碑を建てる話と次元が違う」という理由だったかもしれない。しかしそれならそうと、私の提案が稚拙過ぎる、顕彰碑の話はそれとは別個に進んでいるから、話に乗らねる、など、ひとこと回答があつてしかるべきではないか、と私は憤慨した。

たしかにその後、中日友好園林に立派な「藤原長作記念碑」が建立された。映画『嗚呼満蒙開拓団』を撮った羽田澄子監督に方正県政府の担当者は「この碑は方正県政府が建てた」と説明したそうである。一将功成つて万骨枯る…か、石井さんの分骨は今もまだ東京吉祥寺の旧居に安置されたままだ。方正をめぐる、人目を引く話題の裏で、ひっそりと朽ち葉のように沈んでゆく歴史もある。

(おくむら・まさお、本会参与)

## 祖国の土を踏ませたい

『嗚呼 満蒙開拓団』にも登場

徐士蘭が3月来日

支援の集會に あなたもぜひ！

奥村正雄

『徐士蘭に祖国の土を踏ませる会』という集まり（千葉市）がある。徐士蘭とは、現在、中国・方正県に暮らす残留孤児で、長年、厚労省に孤児の認定を申請しながら、孤児である物証がないために認められず、帰国できないでいる女性（70歳）だ。

目元に愁いを帯びた、品のある顔立ちをご記憶のある方も少なくないはずである。羽田澄子監督の記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』で娘たちとともに自分の生い立ちを涙ながらに訴えているシーンが印象的だったからである。彼女が初めて私たちの前に姿を現したのは4年前（2006年）の6月である。その機縁となったのは次のような、ある偶然の出会いからだ。

### ■ 駅前カメラ店で

恒例となった「方正・交流と歴史検証の旅」（2006）に参加された稲川清さん（千葉市稲毛区在住）が方正へ出発直前、近くのカメラ店に立ち寄った。そこに中国語を話している夫婦がいた。国際線のパイロットとしてスペイン暮らしも長く、気さくな人柄の彼は夫婦に声をかけた。

「中国の方ですか？ 私は明日、中国の方正というところへ行くんですよ」

相手が日本語に未熟だったり、吉林省や遼寧省からの帰国者で、「ホウマサ」という日本語の発音に戸惑ったりしたら稲川さんの、この話しかけは、その場限りで終わっていたかもしれない。

ところがこれを聞いた帰国者の妻は間髪を入れず、こう応じたのだ。

「ほんと？ 私たちも方正からの帰国者なのよ」



彼女の名は瀨瀨代美子さん（中国名・焦玉賢）長野県から一家で旧満州へ渡った時、彼女はまだ4歳だったから、今から25年前。1985年、方正県から家族で帰国した時は日本語が全く話せなかった。しかしその後、懸命に勉強して、ほとんど不自由なく日本語を話せるようになっていた。そのために稲川さんの日本語がすぐ通じたのだった。瀨瀨さんにとっても、いや徐士蘭を知る私たちにとっても、これは運命的な出会いとなった。瀨瀨さんは稲川さんに徐士蘭のことを話し、方正へ着いたらぜひ彼女に会って話を聞いてくれるよう頼んだ。

### ■生母は着物の切れ端に

2006年6月22日、私たちが方正の宿「鑫禧大酒店」に一步、足を踏み入れた時、ロビーのソファにかけて待っていた徐士蘭と三女たちがさっと立ち上がって寄ってきた。話は部屋で中国側の通訳を交えて詳しく聞いた。

「私は長い間、私が日本人の孤児であるということを知りませんでした。1945年8月に私を拾ったという張文学さんからそのいきさつを、初めて詳しく聞いたのは、ずっと後のことです」

敗戦の年の8月、近くの小学校にたくさん日本の女性が来ているという話が伝わって、20何歳かまでまだ独身だった張さんは、のち徐士蘭の養父になった男に誘われて小学校へ行ったそうだ。しかし勧められた日本女性は彼より年齢が離れすぎて結婚の相手とは考えられなかった。帰ろうとするとき一人の日本女性が駆け寄ってきた。丸顔で背はあまり高くない。「どうかこの子をもらってください」と哀願し、自分が着ていた和服を破いて何か字を書き、それを張文学さんの懐にねじ込むと、拝みながら去って行ったという。

こうして張文学さんに預けられた幼い徐士蘭は、まだ独身だった張文学の手から養父（徐汝庚）へ渡った。優しくったという徐家の養母が1年後に亡くなったあと、徐士蘭の受難が始まった。2歳下の義妹と3人暮らしとなったが、養父はことごとくに彼女につらく当たった。8、9歳の頃、牛の世話、薪ひろい、飯炊き…。学校へ通う義妹の送り迎えをさせながら、養父は徐士蘭を学校に通わせなかった。

「あるとき養父は妹を連れて食堂へ餃子を食べに行ったが、私を連れて行かない。私は家で犬のえさのトウモロコシめしだけで、漬物もない。一度、食堂のおばさんが私にも一緒に来たら、と言ってくれたけど私は行かなかった。行っても家に帰ってきてから折檻を受けることがわかっていたから。またあるとき、盆踊りがあって私は行きたくなかったんだけど、義妹がどうしても私に連れてって、というので一緒に行った。その時も養父が私を探し出して牛の鞭でさんざんたたかれ、早く家に帰って飯を作れって怒られました。それを見て隣の王さんが、いくらお前の子じゃないといっても、それはひどすぎるじゃないか！と言ってくれました」

しかし、養父の虐待はその後もやまなかった。

## ■高粱と子牛1頭の嫁入り話

徐士蘭が13歳の時である。

「養父は70斤の高粱と2歳の子牛と引き換えに、私よりずっと年上で耳が聞こえない男に嫁として売ろうとしたの。私はどうしても嫌だと言った。すると養父は草刈鎌で私の脳天をたたき割ろうとしたの。それでも私が承知しないのを見て、とうとう村役場の人と近所の人が仲裁に入ってくれ、やっとこの結婚話は解消されたわ」

その後も彼女に対する養父の虐待は続いたが、彼女が16歳の時、人生の転機が訪れた。紹介する人があって方正県武装部の通信員だった丛志文と結婚した。この結婚によって徐士蘭ははじめて養父の虐待から逃れることができ、周囲の話から、次第に自分が日本人であり、残留孤児であることを確信するようになった。

だが残留孤児として帰国を申請するには、周囲の証言だけでは話が進まなかった。実の親が彼女を中国人に預けた時に渡したという、自分の着物のきれっぱしに書いた彼女の名前…その小さな「物証」さえ1つあれば、と彼女は裏の畑を掘り返したりして探しに探した。だが多くの証言が示すように、日本の孤児を育てた養父母たちは、1966年に始まった文化大革命で、残留孤児を育てたなどの情報が伝わってひどい目に会うことを恐れ、少しでも証拠となる品はひとつ残らず焼却するなどして身の安全をはかったのだった。徐士蘭の養父もまた例外ではなかった。



前列左端が奥村、徐士蘭さんの左が孫娘、右が三女。後列左が吉川雄作、右が飯田栄助。

こうして徐士蘭が厚労省に提出した孤児として認定してほしいという申請は証拠不十分で受理されなかった。厚労省によっていったん却下された孤児認定の申請は、その後新しい物的証拠でも提出されない限り、覆ることはない。

しかし一昨年の晩秋、「あるできごと」が起こった。北京の大使館で話題の映画『嗚呼 満蒙開拓団』が上映され、関係者が観賞した。これを観たある高官がふと「彼女（徐士蘭）は可哀そうだ。一時帰国でひとめ、祖国を見せてやれないものだろうか」と漏らした、と伝えられる。この情報は千里を走った。孤児の支援者を通じて徐士蘭本人の耳に届いたのである。

誤解のないように、ここで徐士蘭の現在の家庭環境（本誌別掲の吉川雄作氏「方正再訪」参照）と、そういう事情によって彼女は現在、特に日本への永住帰国を望んではいないことを付記しておかなければならない。ただ、彼女の気持ちの中で誰よりも強烈に切望しているのは「私は日本人」という公式の認証を得たいということだ。日本人である唯一の物証になるはずだった、実母が着ていた着物をその場で切って書いてくれたという現物が永遠に喪失してしまった以上、ほかに何を根拠に日本政府に訴えればいいのか。

## ■腕に残る疤痕のあと

私たちが今、彼女のためにひとつ望みをつないでいるのは、彼女の右腕に残る「疤痕の痕（あと）」だ。これは厚労省が中国で行った検分では日本人とみなすための証拠にはならなかったようだ。しかし私たちが見たところ一見して彼女と同じく、明らかに中国人のそれとは違う疤痕あと、によって日本人と認定され、日本に永住帰国している帰国者がいることを知った。

私は秋の一日、この女性を訪ねた。千葉県浦安市で一人暮らしのRさんの自宅である。彼女は中国・黒竜江省牡丹江市穆稜県で育った。1989年、厚労省に孤児の認定を申請、半年後に身元不明のまま残留孤児と認定され、1996年6月に永住帰国した。彼女が孤児と認定された根拠は二つ。1つは彼女が自分の姓は知らないが名「××子」を覚えていたこと。もう一つは腕に遺された疤痕跡だった。

徐士蘭の腕に遺された疤痕跡とRさんのそれとの違いは、一見、判然としない。一方をシロとし、一方をクロとする根拠は何か。この説明を厚労省に改めて求めることができるのかどうか。また、すでに制度としてはとっくになくなっている疤痕について、戦前の旧満州時代に日本側が行った疤痕と、中国が行ったそれとの違いについて、詳しい研究者などがいて、これを判別してもらうことが可能かどうか。この件に関する情報があったら、ぜひ文末の連絡先まで知らせていただきたい。

徐士蘭が求めてやまない日本人としてのアイデンティティを、今度の来日で見つけてあげることができるかどうか。また、たとえそれが叶わなかったとしても、夢に描いてきた祖国の土を踏みしめた上、彼女を励まし、慰労し、支え続ける同胞がたくさんいることを彼女に実感させてあげることができたら、どんなに喜ぶだろう…。

### ■ 3月来日を申請

参考までに、いま彼女に準備してもらっている来日ビザの申請書は年明け早々に黒竜江省方正県の外事弁公室に提出され、問題がなければ書類が瀋陽の日本領事館に回る。そこで問題がなければビザが発給される、ということになる。そしてこの申請に記入した来日の日程（10日間）は次の通りである。

3月23日（水） ハルピン→新潟→千葉へ  
24日（木） 千葉で帰国者たちと会う  
25日（金） 東京で見学と買い物  
26日（土） 千葉市で励ます会  
27日（日） 西伊豆一泊旅行  
28日（月） フリー  
29日（火） 東京で励ます会  
30日（水） 買い物  
31日（木） 千葉の帰国者とお別れ会  
4月 1日（金） 東京→新潟→ハルピンへ

なおこのプランをスムーズに進めるために次のことをお願いいたします。

- \*カンパをお寄せください。ご連絡をいただければ振込用紙をお送り申し上げます。
- \*日程の変更や「励ます会」の詳細など、プリント（会報）をご希望の方は連絡先をお知らせください。でき次第、適宜、お送りいたします。
- \*西伊豆の温泉で富士を見ながら一泊、に同行ご希望の方はお知らせください。
- \*その他 お気づきのことをどうぞお聞かせください。

#### 徐士蘭に祖国の土を踏ませる会

連絡先

〒262-0033

千葉市花見川区幕張本郷7-7-3

奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

メール [k.beijing6918@mx5.ttcn.ne.jp](mailto:k.beijing6918@mx5.ttcn.ne.jp)

## 「二つの国の物語」を読む

～地は貧しい——希望がひらかれるとき～

森 一彦

つい先日 2010 年 10 月 6 日、株式会社理論社が民事再生法の適用を申請とのニュースが流れた。理論社は、児童文学の草分け的な出版社である。創業者の小宮山量平氏は、同社の経営から退かれて久しく、94 歳となる現在は上田市にあるエディターズミュージアム(小宮山量平の編集室)を主宰されている。同氏が軍隊生活を終えて理論社を創業したのは、敗戦から 2 年後の 1947 年 6 月であった。その思いは、詩人ノヴァーリスの詩をかかげたことに表れている。

同胞(とも)よ 地は貧しい  
我らは 豊かな種子(たね)を  
蒔かなければならない

「この詩は、戦争によって深い傷をおった日本人のところに、新しい希望が芽生えることへの願い」であり、「その願いは、とりわけ子どもたちに向けられるものでした」と、理論社のホームページにはある。理論社はこの理念のもとに良書を出し若い作家を育て続けた。小学生のときに私が読んだ大石真「チョコレート戦争」は今も読み継がれている。それから私は、理論社の本をむさぼるようにして読んだ。神沢利子「ちびっこカムの冒険」、乙骨淑子「乙骨淑子の本」(日中戦争を描いた「ぴいちゃあしゃん」他の全集)、灰谷健次郎「太陽の子」、今江祥智「優しさごっこ」、新村徹「魯迅のころ」、下嶋哲朗「ヨーンの道」、倉本聡「わが青春のとき」……。

理論社の倒産後、毎日新聞に出版<冬の時代>を語る小宮山氏のインタビューが掲載された。「日本の出版界はベストセラー屋さんばかり……あー、情けない。いやしくも編集者なら、本当の作品とは何か、読むべきものとは何かを考えないと……」と、出版界への苦言を呈した後、尖閣問題でぎくしゃくする日中問題とナショナリズムの台頭に対して、こう語っている。「ぞっとする。僕たちは視野狭窄に陥ってはいけない。流されてはいけない。20 世紀はせつちな時代でした。革命と戦争の時代でした。21 世紀は漸進の時代です。再び祖国の喪失があつてはいけない。まだ地は貧しい。いまこそ良書が必要です」(毎日新聞 2010 年 10 月 28 日東京朝刊、「毎日 jp 小宮山量平」でネット検索)

ここに紹介する赤木由子の「二つの国の物語」も、理論社が生み出した児童文学作品である。1966 年(著者 36 歳)に「柳のわたとぶ国」として初版が出され、1980 年に「二つの国の物語①—柳のわたとぶ国」、1981 年に続編の「二つの国の物語②—嵐ふきすさぶ国」と「二つの国の物語③—青い眼と青い海と」を出版、「二つの国の物語」三部作となった。

1995年には、理論社の戦後50年特別企画として、三部作を一冊にまとめた「二つの国の物語」《全1冊》が発行されている（余談になるが、この全1冊は、二段組みの小さな文字に広辞苑の半分はあろうかという厚さと重さ、およそ子供が読める代物ではない！）。



「二つの国の物語」は、1935年（昭和10年）のシーンから始まる。両親を亡くした小学1年生の「ヨリ子」は、山形の実家の貧しい村から、満洲の寧安で写真館を営む兄三郎と愛子夫婦の元にもらわれて海を渡る。写真館は、竜宮城のように豪華な建物だった。三郎は優しく、愛子は天女のように素敵な女性だった。隣家の満人家庭の子ホウラン、その友人のミンホイたちと、ヨリ子はすぐに仲良くなり、町中を駆け回る。ケシの花を栽培してアヘンをつくり軍資金にしてい

たのは日本軍で、ケシの花畑をつぶそうとしていたのは、匪賊と呼ばれる人々だった。ホウランの兄で、抗日運動に身を投じる路英とヨリ子との運命的な出会い、肺病となり鞍山の病院へ行ってしまふ愛子、そして抗日運動家の妹だという理由により殺されるホウランの死……。第一部「柳のわたとぶ国」では、植民地時代を生きた日本人の群像と、満洲の実像とを描き出す。

小学校を総代として卒業したヨリ子は、保証人となって破産した兄三郎とともに、愛子のいる鞍山へと引っ越す。鞍山は、中国人から<エンマ殿>と呼ばれていた昭和製鋼所の街だった。愛子は「アカ」の嫌疑で憲兵隊に捕まり、拷問を受けていた。第二部「嵐ふきすさぶ国」では、支配が崩壊するなかでの忍び寄る暗い影、そこに翻弄される人間の条件を克明に描く。朝鮮人にとっての満州とは、モンゴル人から見たノモンハン戦争とは……。歴史を俯瞰しつつそれを個別の人間の物語として息吹を与えリアルに描き出す。

昭和20年8月15日、敗戦の日、灯火管制が解かれた鞍山の夜は、久しぶりに平穏と明るさを取り戻し、ヨリ子は読書に没頭していた。ソ連軍が攻め込むなか、芸者風の日本人の女たちが身代わりとなり助けられるヨリ子。中国人と朝鮮人も日本人を襲い始める。国府軍と八路軍との激しい市街戦、忍び寄る極寒の冬、何者かに殺され街にころがる日本人憲兵の胴体、路英とヨリ子との抱擁と別れ……。第三部「青い眼と青い海と」では、国家に見捨てられた人々と敗残者たちの生きざまから、中国人と日本人の多くの死者を乗り越えての祖国への出航、そして帰還船から祖国日本が見えてくるまでを描いている。

最終章、帰還船のなかで生まれた、青い眼の赤ちゃん。ソ連兵にやられたことを激しく非難する人々、ヨリ子は船内演芸会で立ち上がり、涙ながらに訴える。何故、苦勞をとものにここまで引き上げてきた人のことを悪く言うのかと。次から次へとふきあがる思いを、ヨリ子は訴える。船内の人々は、絶望のなかで生まれた新しい生命を、祝福することができるのだろうか……。

「二つの国の物語」は、そのほとんどが著者、赤木由子の実体験に基づいていると思われる。子供を連れて引き揚げた著者の日本での生活は、上野の地下道で浮浪者の子どもた

ちとともに始まった。本家の裏切りと兄の死、貧困、本を読むことも小説を書くことも許さない夫との確執、闘病、火災による子どもの焼死、原稿の焼失……。著者と家族たちは、そんな絶望のなかで、《その原因にたいして体当たりしないかぎり、希望は生じないことを自覚するように》なる。そうして生まれたのが、本書であった。「二つの国の物語」は、著者赤木由子にとって、まさに絶望の果ての帰還船のなかで生まれた新しい生命そのものであった。本書は、物語としても、その存在としても、希望がひらかれるときを描ききっているのである。

最後に、1980年に出版された「二つの国の物語①一柳のわたとぶ国」の最終頁に小宮山量平氏が寄せた言葉から、抜粋してここに紹介したい。

『……たしかに、日本と中国との間に平和な交流は始まり、両国の関係は日まじに親密となりつつあります。けれども、お互いがお互いを「必要とする」がための親密さだけではなく、ほんとうに信じあい愛しあう国民同士として心と心が結びあうためには、今こそ、瞳を大きく開いて、あの戦争下の苦しみをこそかえりみるべきでしょう。人間同士として傷つけあい、しかも人間同士として熱く信じあい愛しあった歴史の日々を、赤木さんは、日本の若い世代にこそ送りとどけたいと、献身したのです。……』

私は、小さな活動が続ける方正友好交流の会の存在意義も、まさにここにあると考えている。現在の中国と日本の姿を見たら、「ヨリ子」は何と言うのだろうか。

(もり・かずひこ、1958年生まれ。93年から百貨店の駐在員として北京に3年半滞在する。現在、広告会社に勤務。ここ数年、方正友好交流の会総会では司会を務めている。趣味はカラオケ、ヨガなど)

## 良心と責任

陳野 守正

小谷純一先生は、良心について繰り返して「聖霊」誌に述べてこられた。

「神様は、神を信じる者にも信じない者にも、良心を与えておられる」

「人間は神から自由意志と良心が与えられている。しかし、神に反逆し神から離反している人間は、自己を神として、自己中心に生きるしかない」

満州移民に対する責任の取り方も、良心に基づいてなされていると考えられる。したがって、責任の取り方は同一とは限らない。その点を四人の事例からみてみたい。

野村満夫（仮名） 夫婦とも満州二世。

穀物の仲買商をやっていたのでチチハルよりも更に奥地に住んでいた。野村は、開拓団、現地人の別なく商売を続けていたため、奥地の現地民たちの信用が高く、ソ連軍が侵攻して来たとき、現地民に助けられて無事帰宅できた。その夜、夫は妻に話した。

「奥地にはまだ多くの開拓移民が残されている。それも全部が老幼婦女子ばかりだ。自分は奥地に今一度入って、その人たちを助けてあげたい。お前は子どもたちを連れてハルビンに行くように」

「私一人では出来ません」

「奥地からここに辿りつくまでのあの惨

状は、目を覆いたくなる情景だ。自分が行くことでどれほどの人が助かるか分からない。自分たちがここまでやってこれたのは、開拓団のおかげではないか……」

妻は末の子を失い二人の子を連れて引き揚げたが、夫は帰国することはなかった。

村井長八郎 無教会キリスト者村井長正の父村井長八郎は、戦前、水戸営林署長時代、東海村付近を中心に松の砂防林造成工事を担当していた。

長八郎は石黒忠篤（敗戦時の農商大臣）

と親交があり、後に、内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所所長となる加藤完治とは友人であった。三人はスクラムを組み、国策満州移民事業の推進に協力することとなり、長八郎は訓練所建設に全面協力した。

「父は石黒忠篤の意を受け内原満蒙開拓団教育機関に協力しました。敗戦の色濃くなるや、父の懊悩は極度に達し昭和二十年六月には割腹責任をとる決意が窺えました。上司から、短刀類一切は身辺から遠ざけるよう父の疎開先に急報せよ、との勧告を受け、私はそれに従いました。内原訓練所創設当時、よもや斯かる事態に遭遇するとは父の予期せざりし所でありましたけれども責任回避は不可との決意は私も承知して居りました」（村井長正から筆者への私信）

石黒忠篤 追放解除直後の一九五一年、改進黨総裁に就任を懇請された時、こうい

って固辞した。

「わしはかつて満蒙開拓に賛成し、沢山の同胞を大陸に送りこんだ。彼らの多くがかの地で鬼哭、啾啾、荒野の土と化しているのを思う時、いまなお眠れぬ夜がある——わしは晴れがましいポストにつくべきではない、と考える。これからも戦前、戦中の反省を忘れぬようにしたい」

加藤完治 満蒙開拓移民送出の最先頭に立ち、軍と協力、青少年義勇軍として子どもたちまで送り出した訓練所所長加藤完治は、敗戦を迎えつぎのように述べている。

「多くの人を満州で亡くしてしまったことが分かって、僕は一時は坊さんになって全国を行脚して、亡き同志達の冥福を祈ろうかと思ったり、いっそ死んで責任を償おうかと思ったりして、だいぶんもがいていたのだが、しかしよく考えてみると、そういうつもりで開拓を始めたわけではもちろんないのだし、これまでやって来た開拓が間違っていないことが分かったものだから、死ぬこともやめたし、坊さんになることもやめて終生鋏をとることを決心した」

内原に加藤完治を訪ねた武田清子（国際基督教大学教授）に対し加藤は、「——自分は誠意のありつたけをもつてやったことであり、何ら後悔をしていない」と語った。武田清子は、「——良心の傷みの不在は驚くばかりであった」と述べている。

陳野守正さんは無教会派のキリスト者。出典を記す氏の手紙に拠れば野村満夫（仮名）は堀切辰一著『布がかたる戦争』から。が、本にはこの名はなく、わかりやすく仮名にしたとのこと。村井長八郎については息子の長正氏から陳野氏への手紙。長正氏は、現天皇の学習院初等科1年生の教育係、以降東宮侍従を務められた方。石黒忠篤氏は、朝日新聞社説。加藤完治は加藤の全集第5巻、武田清子の発言は『土着と宗教』から。（大類注）

# 草原の涼やかな風が眠る霊を慰めてくれるように

——歴史検証の旅に参加して——

下山田 誠子

「満州開拓団」のことは長らく心にかかっていたが、今回よい機会を頂いて参加できましたこと感謝いたします。

私と妹は当時の新京（現長春）に生まれ、敗戦後、平壤の難民収容所に暮らし、米国の船で佐世保に上陸したとのこと。3歳に満たない私にはほとんど記憶がなく、両親の元気な時に何も聞かなかったことが悔やまれてなりません。

祖父母のもとに送られた茶色に変色した写真には、みどりごの妹、淑子が母に抱かれ、幼い私が父母の間に座っている、この一葉があるだけです。父は根こそぎ動員で現地召集され、母と私たちは、ソ連参戦により逃避行を重ねて38度線を越えたようで、藤原ていさんの『流れる星は生きている』と同じような状況だったようです。

引き揚げ後も母は「淑子ちゃん淑子ちゃん」と、「今生きていれば今日は〇歳よ」と言っており、幼い私は「この私がいるのに・・・」などと思ったりしたのです。

ほんのわずかの髪の毛と、爪を切って襟に縫い込んで故郷の墓地に埋葬された、妹淑子ちゃんの存在。この世に生きていたことすら、もう知る人もいなくなってしまうことが、あの広大な大地のどこかに小さな骨が眠っているのでしょうと心を安らかにすることにしました。

母は生前、「開拓団の方のご苦労はこんなものじゃなかったのよ」と言っておりました。それ以来、なぜか、私は開拓団の方々に負い目のような思いを抱いてきました。父は役所のどんな部署にいてどんな仕事をし、どこの戦地に行ったのか、何も知ろうとせず、封印して生きてきました。

孤児探しが始まり、新聞に顔写真付きの経歴が載るようになり、私は幼い子どもたちを寝かしつけてから深夜まで、その一人ひとりをじっと見つめたことを思い出します。「もしかして淑子ちゃんが生きて、助けられたかも・・・」と、あり得ない想像をしたりしたのです。肉親を失った悲しみに優劣などないのだ、と、最近思えるようになりました。

満蒙開拓青少年義勇軍、開拓団、国策として送られた方々、領土拡張の野望、「人民廃棄止むなし」と打電したのは誰なのか？ それを実行した人は誰なのか？ 土地も家も奪われ、苦力にさせられた方々への謝罪と補償はどうなのか？

悲しみを共有する私たちの課題は何だろうかと考えさせられております。

かつて今も、あの広大な蒙古の草原を吹きわたる涼やかな風があの地に眠る方々の霊を慰めてくださるように、あの地に働く方々の上に活力を与えてくださるように、と祈り願わずにはおられません。

（しもやまだ・せいこ：長野県松本市在住。日本友和会会員、NCC中国委員会委員。

\*編集者注：友和会は国際的な非暴力キリスト教平和団体、NCCは日本キリスト教協議会のこと。このNCCより日本語教師として江西医科大学に派遣された経験をもつ）

## 母ちゃん、タカシが死んだノモンハンだよ

千田 優子

大正4年生まれ之母は82歳で、亡くなった。穏やかな死に顔だった。一番大変な時に育て、一番愛した長男を病院のベッドで待っていた気がして。「母ちゃん、兄貴は忙しくて来れないって。待ってても無駄だよ……。ごめんね」（兄夫婦は山形の鶴岡に住んでいる。母が70の時、松戸で私たち家族と同居を始めた）

そう耳元でささやくと、ツーと一滴の涙を流し、1時間後に息をひきとった。騒がせすぎた割りには……。何と穏やかで、清しく仏になったことか！

およそ3年の間、寝たきり・徘徊・被害妄想・惚け。歳とればどの道も通るすべての経過を辿って、母は逝った。激しく、壮絶に、派手に……。「娘に焼き殺される」「年金を盗られる」「髪をつかんで廊下を引きずって怪我させた」警官が来た事2度。弁護士に頼んだこと1度。その他モロモロ……。

そして、入院のちょっと前までは……。時々すっかり娘時代に戻る”まだらボケ”であった。「ゆうこ、TVにタカシと似た人が出てる！」「このオーバー買ってきたよ」何と……。真っ赤で黒い毛皮の襟つき。

「タカシ」はお医者さんだった。「タカシ」は母の許婚だった。「タカシ」はノモンハンで死んだ。本当はお医者さんの奥さんになるはずだったのに！ 本当は「タカシ」のお嫁さんになるはずだったのに！ 私がもの心ついた時から、そう教えられた。

何度も写真を見せられた。夫婦ケンカして家出する時、タカシの写真も切り取っていた。私のダンナに最初に見せた写真がタカシだった。

死んだ青い鳥を追いかけ続ける母……。という訳で、私は昔お嬢様のままの母を好きでなく、深くは考えたことなかった。

両親が死んで、10年以上たって、自分が還暦を過ぎて、一人になる時間が多くなって……。そして”富士国際”の新聞で「ノモンハン」という地名を見た時、突然に母のことを考えた。

ノモンハン……。タカシが死んだところ。ソ連の戦車が一杯出た、近代戦だったというところ。母が生きていたら、最期に娘に戻った母だったら……。きっと行きたかったに違いない。

思えば、満鉄勤務の父と暮らした大連、二人の兄が生まれた大連も、父母が生きてる間に行こうと考えたことなかったっけ。引き上げ後のことの苦労話はいっぱい聞いてたけど……。満州」での話しは聞いたことがなかった。

そして、大連の防空壕で生まれた兄と「満州」の大連に行ったのは、ほんの数年前。レンガ住宅の並ぶ大連の街並みに房をたれるライラック（リラ）を発見した時、「リラの花が咲いてきたねえ。この花好きだよ」と母は良く言っていたっけ。あれはこの風景をなつかしうかしてたんだ。

あの戦争最中に子どもを生んで、育てること。着のみ着のまま引き上げてきた両親の世代のこと。私はどのくらい知っていたのだろうか？ どのくらい考えただろうか？ 母の底の

底の思いを・・・振り返ったことがあっただろうか？

五味川純平の本を読んだ。辻正信の本を読んだ。（この本は吐き気がして途中で止めた）こんな理不尽なことで。こんな不条理なことが。戦争を指揮した人がのうのうと暮らす？「鴻毛より軽い人の命＝肉弾戦」「現地調達」（食料から陣地から）「虜囚になるより死ね」そして、それが15年戦争の最期までの日本軍（皇軍）の真髓だった。

そして、知った。タカシだけではなく、理不尽な死を迎えた兵隊たちのこと。兵隊ばかりでなく、満蒙開拓団の4千人を超える人たちの最期。集団自決。お墓をつくってくれた新生中国。一人ぼっちになった養父母への感謝の墓。米どころ庄内平野よりもっと整然とした田んぼ。これは70歳の岩手の人の技術指導によるもの。（すごいこと。日本のノー政に頭に來たに違いない！）

帰ってきて、仏壇に母の写真を返し、そして、私は、とても素直な気持ちで、母に言えた。「母ちゃん、タカシに会いに行きな。タカシの傍に行きな。父ちゃんはこの世で苦勞かけたからね。父ちゃん？ 大丈夫。一番可愛がられた私が納得させるさ！」

戦争さえなければ・・・一人ひとりに違った人生があった。（その前に私が産まれていない、ということか！！）

まあ、でも、こうやって死んだ許婚と一緒に娘に承認された母は・・・あの世で、やっばお前を産んで良かったって・・・大人になった娘を褒めてくれてる気がする。

（ちだ・ゆうこ：山形県鶴岡市出身。現在、千葉県松戸市在住。知的障害者ホーム運営を経て、余暇支援・ふれあいの場「はいビスカス」代表）

## 兄と弟に会う旅

山田 弘子

6月23日から4泊5日の『中国・日本人公募への旅』に参加した。私の出生地でもあり、兄と弟が埋葬されている場所でもあるハルピン訪問は、かねてからの念願であった。

初日は方正県政府を表敬訪問した後、日本人公募へ向かった。しっかり施錠され、管理人もいるという友好園林の入り口に立った時は、中国政府の手でしっかり守られているという印象を受けた。中はゆったりとした広さで、とても落ち着いた場所である。公墓をぐるりと守るように植えられた松の木の間からチラチラとこぼれる木漏れ日が、私たちの訪問を喜んでくれているようであった。日本から持参した森永ミルクキャラメルの小箱を供え、手を合わせる。飢えと寒さと病と、絶望の思いを抱えたまま息絶えた、ここに眠る多くの人たち。キャラメル一粒の甘みをどれほど欲したであろうか、そんなことを思っていたら、目の奥が熱くなった。苦しみから解放され、母国ではないけれども第2の故郷でやっと安らげる時を迎えられたのだと思う。「どうぞ安らかにお眠りください」と祈らずにはいられない。

### ■カプセルの恐怖

この日は方正のホテルに宿泊。方正の「五つ星」(?)だとか。少しユニークな五つ星。各部屋のオートロックのドアは、カードキイはあるのだが、出入りのたび女性サービス員に開けてもらわないと難しいのだとか。

洗面所をのぞくと、一角に、いかにも後からつけたような、カプセルみたいなシャワールームがついている。さっそく汗を流そうと入ってみたが、カプセルの正面と右横にコックがついているが、どう回してもひねっても、お湯も水も出ない。いろいろいじっているうちに水が出てきた。汗ばむ一日だったので、水でもいいと思って中に入った。こんどは水が止まらない。困った。仕方なくいったん出てバスタオルを羽織り、もう一度いじってみたら、なんと上から横から一斉に水がジャー!! そしてやっと止まった。やれやれと思って足元を見ると、洗面所が水であふれてしまった。そのカプセルルームからは水が流れるようになっているというのを後で知ったのだが、その時はもう泣きそうで、下の階に漏れては大変と、今度は排水処理に必死で、大汗をかいてしまった。夕食の時にその話をしたら皆に笑われた。

### ■弟が眠る寺

「ハルピン北方、極楽寺裏手の日本人共同墓地」父が書き残した、弟の埋葬された場所である。今回、私が方正訪問のツアー「中国・日本人公募への旅」に参加したのは、公墓訪問とともに、65年前、相次いで亡くなった私の兄と弟を弔うためでもあった。方正からハルピンに戻った翌6月26日、弟が眠る場所を訪ねた。ハルピン北方「極楽寺」、さら

びやかだが荘厳な感じのする大きなお寺だった。

いくつもの門を左手に見ながら、広い通りを歩いて行くと、寺の終わりあたりに遊園地の入り口がある。中に入って間もなく、その一角はきれいに手入れされた一面の芝生で、夏のような暑い陽が降り注いでいた。この芝生の下に、当時1歳半で亡くなった弟が、そして多くの日本人が眠っているのか。通訳の王さんの話によると、

「ここは昔、お墓があって、とても寂しい場所でした。この奥のロシア人のお墓は今もありますよ」

ということだった。目を上げると植込みの奥は遊園地になっているようで、観覧車が見え、賑やかな歓声が響いていた。私は日本から持参した水と線香を供え、手を合わせた。真ん中の私を挟んで兄と弟が相次いでこの地で亡くなって自分だけが日本に帰れた。私は涙もぬぐわず、その場で立ちつくしていた。

当時、私の兄弟は枕を並べて寝ていて、昭和21年4月に弟が肺炎で亡くなった時、兄（当時8歳）は「今度は僕の番だね」と言ったそうだ。その3か月後には、兄もこの世を去った。弟がここ極楽寺に埋葬されたことは父が残した記録で確定できたが、その3か月後に息を引き取った兄の遺体がどこでどう葬られたのかについて父は「ハルピン東方、日本人共同墓地」としか記録していない。その頃は、ハルピンに集結していた避難民の帰国計画が動き出し、父はその仕事に忙殺されていたさ中だったため、「わが子の死を悲しんでいる余裕もなかった」と書き残している。ハルピンの現地に立ちながら兄の埋葬場所の特定ができない。しかし兄は、私がこの地を訪れたことで理解してくれていると思う。「日本人共同墓地」とあるので、兄ばかりではなく、大勢の日本人が埋葬されていると思う。その場所は、せめて弟が埋葬されていた芝生地のものであって欲しい、と願いながら心の中で手を合わせた。

## ■ 弔いの旅を終えて

亡き子を残して引き揚げざるをえなかった両親の思い、そしてまた自分一人だけ引き揚げてこられて、兄と弟から命をもらっていると思えてならない昨今の私、そんな思いを抱いて訪れた今回のハルピンへの旅。この日は訪問4日目の、今年一番という暑い日だった。

私たち家族が約7年間過ごしたハルピン。父が活躍した松花江流域、伊漢通船着き場跡地、そして弟の埋葬場所等など、充実した4泊5日の旅であったと思う。

兄と弟の死がなければ、当時4歳の私も残留孤児になっていたかもしれないと思えば、立場こそ違え、「方正地区日本人公募」として他人事とは思えない。

様々な思いで今回は自分なりの弔いの旅になった。

同行の皆さん、ありがとうございました。

（やまだ・ひろこ：埼玉県越谷市在住。1942年、旧満州で生まれる。敗戦で一家5人、ハルピンで帰国を待つうち、弟、兄を亡くす。結婚後、二人の娘を出産、父が波乱に富んだ95年の生涯を閉じたあと、悲願だった「兄と弟の供養」に、今年6月方正への旅に参加）

## 中国人の寛い心

堺澤 一生

ハイラル伊敏河断橋のほとりにある「望郷」と名付けられた像に胸を打たれました。難民と化した日本婦人がトランクを片手に、幼子の手を引いて日本を目指す姿です。婦人はきれいに髪をなでつけ、衣服もきちんとしており、やつれた様子はなく端正な印象で、制作者の暖かい心が感じられます。

矛盾するようですが、しかし全体の感じが日本人のそれとどことなく違う—— 非難の意味で言っているのではありませんが——像は日本人がつくったものではないとわかります。感じがどことなく違う。そのことは制作者もあるいは気付いていたかも知れない。それでも、一面加害者でもある日本人の流浪の像を同情をもってつくった。そこに制作者の、中国人の心の寛さを感じました。

像が示す頃、黒竜江省で乳呑児を抱えた避難民の日本婦人から、重病の幼女をひきとって育てた貧しい農民が、その養女が学業成績抜群で師範学校に合格した時、宝物のようにしていた中華鍋を売って洋服を整え、彼女は涙して感謝したという話に感動したことがあります。像を前にそのことも思い合わせました。

日本人公墓が国交回復前にもかかわらず建立されたのは、こうした中国人多数の支えがあってこそ可能だったといえるでしょう。



<板垣裕一撮影>

それにつけても、難民、流浪の民と化した開拓団の苦難を旅で実感しました。戦時中に口にした歌を想い起こしました。「見渡す限り果てもなき、ここ満州の<sup>ひろのほら</sup>広野原——」バスで移動することが多かったのですが、かなりの時間走っても景色は変わりありません。どこまでも広野原が広がり、地平線はいつまでも彼方です。歩いて逃避行を続ける難民は何を思ったのでしょうか。方正の松花江のほとりに「対岸の左方、はるか彼方がハルビンです」との説明とあわせて絶望の底知れぬ深さを思いました。

甘南県の開拓団入植地跡が整然と区画されて今に残る様子に、いわゆる“王道楽土”を夢見た開拓団の理想を垣間見る想いがただけに、落差の懸隔をなお強く感じました。

ところで、もう随分前に聞いた話があります。日中国交回復前、旧開拓民のあるグルー

プが、関係者自決の地への墓参が許されて、その地を訪れた時のことです。訪れた人たちは線香、花、供物を供えしばし涙にくれました。しばらくしてまわりの雰囲気がおかしいことに気付き、われに返ってあたりを見まわすと、中国人にやや遠巻きにかこまれていたそうです。決して好意的な雰囲気ではなく、異様なども形容すべき雰囲気だったと。

第二次大戦後でのアジアの犠牲者は一千万人といわれます。取り囲んだ中国人たちは家族を失わないまでも親類、知人を失った人が多かったのではないかと、帰国後に語る人がいたそうです。

日本人が加害者でもあった一面は忘れてはならないことだと思います。“前事忘れず、後事の師となす”その上に日中友好を築きたい。

<さかいざわ・かずお：1933年生まれ。名古屋市在住。94年退職後、戦後50年を節目に、南太平洋の戦跡（ガダルカナル、ラバウル他）を巡る旅や日本の旧植民地などを訪ねている>

## 方正の中国人夫婦に会う

上条 八郎

今回、私がこのツアーに申込した理由は三つある。

一つは、内モンゴル出身で飯田市に嫁いでいる女性から『ノモンハン事件によって、日本が負けたから、モンゴルは中国領、ロシア領、モンゴルの三つに分けられてしまった』と常々聞いていたので、その場所に行ってみたかったこと。そして彼女の郷里は内モンゴルでもフフホトより西のオルドスなので、どこまでも砂漠化してしまっていたが、ノモンハンの辺りはホロンバイル草原と云って一面草原地帯だと聞いていたこと。

二つ目は、飯田市郊外の阿智村に、来年建てる予定の「満蒙開拓平和記念館」の敷地内に植える樹木を全部私が寄付すると云ってしまったので、旧満洲の現地に植っている樹木を調べることにした。結果は大部分がポプラ（和名ヤマナラシ、ドロノキ）であったが、その他もほとんど手掛けたことのある樹種で安心した。

三つめは、方正で自由行動にしてもらって、中国人の夫妻に会うことである。方正県出身の姉妹が塩尻市に嫁いでいる。親族訪問ビザで来日した両親に仕事をさせてやったことがある。村内の仲間と二度にわたって農作業をしてもらった。7年前、方正へ行った時、彼等の自宅へ行きそびれたので、今度こそはと前日ツアーガイドの韓さんに電話してもらって、合流場所を打合せしておいた。旅行7日目、方正の人民政府訪問先に10:40にバスは到着した。

しばらく待っていると、グッピーの様な橙色の三輪タクシー「ガンデン」から、張さん、門さん、孫の芸馨（イーシン）ちゃんが降りてきた。夫婦共前回見た時よりヤセた様に見える。学生結婚して名古屋の大学へ行っている、息子夫婦の子供を首もすわっていない頃から4年半も育てたので、その苦勞の為かと思った。孫のイーシンちゃんは、私の3才の外孫に比べて小柄だが、色白で、ママそっくりの大きい目をしてとても可愛い。自宅までは歩いて15分位だというので、街を見ながら4人でゆっくり歩いた。7年前に比べて、ずい分、きれいな建物が増えた。

あの時は小雨だったが、今回は快晴で気持がいい。大通りを横断するのに妻の門さんは信号赤でもさっさと渡ってしまった！ 孫を抱いた張さんと私は左右をキョロキョロ見ながらやっと渡り終えた。方正県竜星小区が建てたという新築の6階建マンションが何棟も並んでいる。8号楼が彼等の家が入っている棟である。今まで住んでいたアパートを売った代金に長女の由加里が送ってくれた260万円を足して買い、今年の6月17日に移ったばかりだと云う。

床張りの3DKで真新しいテレビ、洗濯機、流し台、ガスレンジ、洋式便器、Wベットと一通りそろっているが、まだ使いこなしていない感じがする。途中で買ってきた冷たい飲物とスイカとお菓子を出してくれた。お土産にと下山田さんと矢田さんから預った品物と、残り物の「ミニ赤いキツネ」3ケと一万円札を包んで渡した（由加里から9月3日に来日すると聞いていたので、物入りだろうと思って）。

しばらく休んで昼食にかけた。まだこの団地はできたばかりで中庭は整備されていなく、水たまりの未舗装である。隣の建物の1階に裏口から入った。表にまわると食堂の看

板がかかっている。両側3人ずつ6人掛の小部屋に入り、ビール2本持ってきた。スイカでかなり腹ができていたので、「大量×、少量○」と書いたのに料理を一杯注文したらしく、次々と出てくる。干豆腐、羊肉沙鍋、溜肉段、牛肉羊葱、スイカをスライスして砂糖かけたもの、水ぎょうぎ2皿。3人でこんなに食べられる訳がない。金も無いのに何て無駄なことをと思うと共に、精一杯ごちそうしてくれているのが伝わってきた。しばらくすると、門さんが何か買って帰ってきた。赤い箱の月餅2箱ずつ、3袋である。朋友（友人）の分もおみやげだという。

結局、ビールに酔い、どれも2口ずつ食べた位で、7～8割余ってしまった。料理代を払おうとしたら門さんに強引に止められた。もらって家に持って行くよう云うと、最初からそのつもりだったのか、スイカ以外はビニール袋に入れてもらって店を出た。

昼食も済み、皆と合流することになっている「方正賓館」に向かうが、近くだから歩いて行くという（また三輪タクシー「ガンデン」に乗りそびれた！）。大通りへ出て地下街へ入った。300～400mあるだろうか、両側真新しい店が並んでいる。衣料品、装飾品の店が多い。最近オープンしたらしいが、こんな田舎町に立派過ぎる地下街。何か他に目的があるのかな？ 通りぬけて交差点を渡ると、「方正賓館」の前に出た。あの時は反対方向の道路は砂利道で、オンボロトラクターが黒煙を上げて走っていたのに、ずい分街並も道路もキレイになったものだ。

午後2時で、待合せ時間より大分早く着いてしまったのでロビーで休んでいると、一行のバスが見えた。皆が入ってくる頃にはイーシンちゃんも目ざめて、皆に可愛い可愛いと云われて、人気者になっていた。名古屋にいるこの子の両親はこの春、大学を卒業し、パパは製造業の会社に、ママはアパレル関係の会社に就職して一応生活も安定してきたので、9月になったら孫を返しに行くという。9月3日に方正を発って、バス、列車を乗り継いで大連に行き、名古屋へは4日に行くという。乳呑み児の頃から4年半育てたイーシンちゃんと別れると夫婦共、<sup>たましい</sup>霊がぬけたようになってしまわないだろうか？ そしてイーシンちゃんは4年半も離れていた両親になつくだろうか……。涙、ポロポロだろうという二人共、笑っていた……。

今回二人に会って感じたことは、元来農民であった二人が、日本に嫁いだ娘の仕送りによってマンションに移り、完全に都市住民になっていたことへの驚きと同時に、そうなくても農村戸籍のままだとすれば定職にもつせず、子供達の仕送りに依存した生活しかできないであろうということ。月3万円かかるという生活費は大変な負担だと思う。マンションの入口には電気料を滞納している部屋番号と料金が掲示してあったが、幸い彼の部屋番号はなかった。しかし、帰りがけに彼はピッとのはがして捨ててしまった！

方正に住む前は松花江の対岸の通河で田んぼを作っていたらしいので、藤原長作翁のことや、両親から聞いているだろう開拓団のこと等、聞き出せたらと思いつつも、筆談ではほとんど聞き出せず、もどかしさが残った3時間余りであった。

（かみじょう・はちろう：1940年、長野県山形村生まれ。緑化木生産販売の丸八種苗園を経営。飯田日中友好協会会員。父が満蒙開拓に行けば、ドラマ『大地の子』の主人公は、もしかしたら自分自身だったかもしれないと思い、14年前から中国各地を旅する。内モンゴルのオールドス砂漠の植林に2度参加する）

## 意義のある思い出を残したい

——亡き夫を偲ぶ鎮魂の旅を迎えて——

杉田 春恵

<解説>杉田春恵(すぎた・はるえ)さんは、1927年生れ。読売新聞に掲載された「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立—という方正日本人公墓記事(「検証の旅」にも参加した徳毛貴文さんが執筆)を読み、大類の方に電話をいただいた。その後何度も会にカンパして下さっている方である。以前、会報に寄稿してくれとお電話をしたことがあったが、「いえいえ、そんなことは・・・どうぞ少しでもお役に立てれば」という言葉があり、ついぞお会いする機会もなかった。今回旅に参加したいが、からだのことも心配なので、介添え役として孫を連れて行きたいという。孫の啓輔さんは24歳の大学生。終始、杉田春恵さんを支え、その結果、全行程をなんなく支障もなく旅を終えられた。啓輔さんはロシア語を第二外国語として専攻されているが、初めての中国の旅を終えるなか、「中国語も学ぼう」という気持ちになったという。

この手紙は、出発する1ヵ月ほど前に行った旅の説明会のあと、大類宛に送ってくださったものである。文章を書くのは苦手だという杉田さんだが、手紙は当時の貴重な体験が綴られている。杉田さんのご了解の下、ここに掲載する。パソコン入力には森一彦さんの手を煩わした。

(大類善啓)

暑中お見舞い申し上げます。うだる様な暑さが続いて居りますが如何お過ごしでしょうか？

去る七月十四日の旅行説明会にはJRが遅れた為にぎりぎりの時間になっていましたので、初めてお目にかかりますのにご挨拶もせず本当に失礼致しました。

八月になり何やらそわそわした気分で、資料を何度も繰り返し読んで居りますが、なかなか頭にインプットできません。

昭和二年生まれの神田っ子も八十三才を過ぎ、久し振りに伺った小川町周辺は時折りテレビでは見ますが、私の育った頃の神田周辺の様変りに、迷子になってしまいました。

戦前の良き時代、忍ヶ岡女学校の二年生の時に太平洋戦争勃発、それからは軍需工場への動員勤労奉仕と何時もモンペ姿、十九年三月卒業、軍需工場へ就職し、十一月から急に米軍の東京空襲が目を追って激しくなり、一回目は日本橋、京橋、神田の吾が家の上空をヒューッズズン、ひどい地響きの怖ろしさに身震いしたのが忘れられません。それから連日空襲があり、田舎の有る人はそれぞれが東京を後にして行きました。私の夫が満洲から来たのはその二十四日、義兄からの遺言を持って来ました。

### 結婚のため満洲の白城子へ

義兄が関東軍第一師団に召集されたのは昭和十六年夏でした。そして孫呉に国境警備につい

ていましたが、十九年南方戦線が負け戦となり「山下奉文」にフィリピンへ転戦命令が下り、ソ満国境が空っぽになったそうです。

義兄は、自分もフィリピンへ行けば必ず戦死することになるから弟のお前が義妹の春恵と結婚して実家を継いで呉れと云う事だったのです。白城子から東京へ義兄の言葉を伝え、私の長姉に子供が出来ず出征してしまった義兄の無念を思い、私はまだ十八才なのに結婚に同意したのです。東京、日本全体が日に日に空襲がひどくなり、十二月三十日下関に着き釜山経由、ひかり特急の一等車に乗りました。元日の列車のお弁当は東京ではとてもとても目にする事の出来ないお料理でした。

白城子の社宅へは二日に到着、理事長の計らいで六日に満鉄の厚生会館で披露宴を、その時も中華料理が日本では考えられない程の素晴らしいお料理でした。

実にのんびりと誰も「モンペ」もはかすスカートだったので、お隣の奥さん（山梨から嫁いだ方）と二、三人にモンペの作り方を教えて差し上げた程でした。夫の会社は、「興農合作社」と云って半官半民の食糧を扱う会社で社員も「満人、韓国人」が一緒に仕事をして居り、夫は自家用車ならぬ馬でした。白城子の西部に開拓団が有り、そこへは馬でまる一日かかると云って居りました。そこの方々は、どうされたのでしょうか……。夫は七月二十一日召集令状が来て出征して行きました。

### 突如、ソ連軍の攻撃

八月九日、朝五時頃いきなり爆撃が有り、空を仰いだ人達が「日の丸じゃないネ、ソビエトかな……」「そんな、日ソ不可侵条約が有るんだから空襲なんてする訳ないよネ……」。ところが現実十日に着のみ着のままの人が逃げて来て、駅に近い私共へ来られました。少し休んでから、白城駅へ次の列車に乗ると云って帰って行きました。「明日は我が身」とも知らず……。十二日真夜中、通化へ行って弾丸運びをするかも知れないし、途中何かが起きた時は皆で一緒に死にましようと思つた理事長の奥様はピストル（ブローニング）を晒に巻き、しっかりと腹に巻きつけました。何の情報もなく無蓋車に街の人々と一緒に、合作社の社員は一かたまりになって乗り込みました。年寄り、女、子供。男性は一人も乗ってない貨車です。すぐ隣には並行して軍人軍属が家財まで積み込んでいて私達の列車より何時間か前に出発しました。後日聞いた話では、通化へ行ったとか！！大変な思いをなさったとの事、その列車に乗っていた方から伺いました。

十二日夜中～十三日朝まで、どしゃ降りの雨で、無蓋車の中は水浸し、皆でその水を何とかかき出しました。十三日奉天に着き、理事長の奥様、妹さん二人が、「大連へ行けば知人が沢

山居るから、そこへ逃げて行きましょう」と云うので荷物をおろしかけました。「一寸待って、駅にも街にも人が一人も居ないなんて、兎に角駅員さんどころか人っ子一人いないのは変だワ、大連へ行くのは止めましょう」と云ってまた元の様に貨車に戻りました。つなぎきれない程の貨車は青息吐息、トンネルの中で止まった時はずっと熱気で死にそうになり、どうぞトンネルでは止まらないでと満鉄の運転手さんに祈る思いで、運を天に任せるしかありませんでした。けれど親切な機関士さんで、赤ちゃんの顔を拭いてやりたい、ミルクを作るのでお湯が欲しいと走って行くと、「ヤケドしない様に離れて!」と云って下の方から熱い湯を出して呉れました。あの運転手さんはどうしたでしょう!!

### 平壤で敗戦を知る

十五日は朝鮮と満洲の国境の山中で、もう皆疲れ切って口を開く人も無く、駅に着くと水を汲みにだけ走りました。ところが朝鮮国内に入ると列車の側を「日の丸ではない国旗」をかざし乍ら、苦々しい顔で私達を見やるので、私は何か変だ!と思いました。

やがて十七日、平壤に着きました。私ともう一人の妹さんとで停車場司令部へ走り、そこに居らした憲兵さんに「私達は十二日夜、満洲の白城子から貨車に乗ったまま、戦争のことも何も知らないんですけど、一体戦争も私達の家もどうなったのでしょうか?」と聞きました。するとその若い憲兵さんは、涙をいっぱい溜め乍ら無言で、十五日の「詔書下る」と右から書いた新聞を渡して呉れました。「エッ、戦争は負けて終わったんですか?」その新聞を持って走り皆に告げました。もう泣く力もなく無言で一点を見つめている人ばかり。夫を戦場に送り消息も解らず、家も財産も捨て身体ひとつで逃げのびて来た人ばかり・・・。

貨車は駅のホームに着かず線路の離れた所に停まり、とうとう京城駅に着きました。「国防婦人会」の襷をかけたご婦人が何人かで「お疲れでしたネ、お茶でも飲んで休んで下さい」と接待して下さいました。再び貨物に乗り込みました。日焼け、ススだらけの顔、自分の体だけで精一杯と云ったところです。

釜山の駅から、だらだら坂を上がって小学校校庭にやっと到着、好天に背負って来た荷物を庭いっぱい拵げ、そしてそこでご飯のお弁当が配られ、皆やっと笑顔になりました。二十日に乗船というのでまたあの来た時の坂を下り、港の待合所（コンクリート）に皆べったんこと坐って一夜を過ごすことになりました。ここ迄来ると日本に帰ることより「もうどうにでもなれ」と肝が据わってしまう自分を感じました。ウトウトとした時、隣に居た会社の同僚の方の奥さんが「杉田さん!!ちょっと由美が変なの!」。まだ一才に満たない女のお子さんです。私はすぐ坐りこんでいる人の中をかき分け乍ら、「どなたかお医者さんはいらっしゃいませんかでし

ようか？」・・・するとご年配の女の方が「医者ではないですが産婆ですけど」と私について来て呉れて、由美ちゃんのお腹の下に手を当てると、「お気の毒ですがこの赤ちゃんは二時間位前に息を引き取ってますネ」——泣き声ひとつ出さずに——。ママ達もみんなお乳になる様な物は食べてないのですから、丸々肥っていた可愛い由美ちゃんは餓死に近いものだったのでしょう。ご主人様は理事長と一緒に白城子に残っていましたので、奥様はとても心配していたので、どれ程切なく悲しかった事でしょうか。後で聞いた話ですが、翌日白城子を出た後、新京に暫く居て日本へ帰ったそうです。

### 下関駅で女子供を突き飛ばす日本の兵隊

翌日、日本から朝鮮へ帰る人を乗せて船が入港、その帰りの船（名前は覚えていません）に乗り、海を見ました。由美ちゃんの遺体はきれいな赤い着物をかけ、港のブリッジに置いて来ました。釜山の憲兵さんが近くのお寺に預けて下さるといっているので、水葬せずをお願いしたのです。船が沖へ沖へ遠去かるのにチラチラ赤い着物が眼に入り、悲しくて船上で抱き合っただけ涙を流して居りました。

二十一日、米軍が下関に上陸するというので、引揚船は島根県須佐沖に行き上陸用舟艇に分乗して上陸。駅からぎゅうぎゅう詰めの列車に乗り、下関迄やっ到着きました。下関駅は日本の兵隊が九州周辺から帰郷するので大変な混雑。「アメリカは女、子供に優しいから俺達を先に乗せろ」とすごい剣幕で突き飛ばし我れ先に乗って行きました。また臨時の貨車が出たので、やっ乗りました。何処でどうなったのか、会社の方々とも別れ別れに。

二十四日、三鷹に着きました。神田の実家は三月十日の東京大空襲で焼けたのを知っていたので、父親の実家へ帰り着きました。頭は「スス」が積もり真っ黒に日焼けした顔は別人の様。姉は新聞でソ連の先陣が白城子も手中に収めたと報道していたので、もう死んでしまったと思い込んでいたようで、そこへ、ひょっこりきたない乞食の様になって帰って来た私を見て、声も出ませんでした。夫の稔が出征した事も、その時始めて知らせた様なことで、喜びと悲しみが交錯して居りました。八月二十四日は夫の誕生日、きっと義兄も夫も私を守って呉れたに違いなく、感謝々々でございます。

以上が私の引揚時の思い出でございます。

ですから、方正のお墓に祀られた方々の様に、またソ連の進入と共に戦車のキャタピラで大勢が踏み殺された話、あの本（会報の「星火方正」）で書かれているような悲惨な思いをなされた方々、南満洲から帰った人々からのご苦労話を伺うと、ソ連兵、八路軍、満軍兵を一度も見ずに日本へ帰り着いた私、そしてあの満鉄の十二日夜白城子駅を出発し釜山迄着いた貨車何十輛かに乗っていた人々は、幸運だったとしか云い様がありません。

## シベリア抑留を経て帰国した夫

理事長ご夫妻も他界なさいましたし、私の夫もシベリアで三年半抑留（カザフスタン「アルマタ（現在アルマトイ）」）後、ナホトカで脱走し、二十三年十二月最終船で復員して来ました。義兄はやはり、レイテ島で昭和十九年十二月二十六日に玉砕しました。ソ満国境に居ても、どうなって居りましたか・・・。

二十四年三月、夫、姉、私の三人で商売を始め、今日に至って居ります。夫の後継は長男が二代目、次男は姉の養子となり実家を継ぎ当社の専務として兄を助けて居ります。何やら取り止めのないお話を書きましたが、お解り頂けましたでしょうか？私がチチハル方面へ行きたかった事情、苦しみを乗り越えられた幸せ、何事にも動じない強さがあの時身に付いたお蔭で今日が有り生きて来られた自分。そして報恩の思い感謝の念を、八十三才の現在、これからも持ち続けて行きたいと思つて居ります。

亡夫も中国人からロシア語を教わり、抑留中に隊員を体を張って守つた話。ナホトカで脱走、要塞地帯とは知らず九月末の寒さに火を焚いた途端にソ連兵に囲まれ、隊長の所へ連行され一週間営倉に入れられ、戦友たちの所へ戻つた時には、当然殺されたと思つていた杉田、豊田が帰つたと皆大喜びして呉れたそうです。十二月、作業の途中で二人だけ呼ばれて乗船、所長は約束通り帰国させて呉れたそうです。

アルマタの収容所の頃覚えたロシア語が、本当に役にたったし、小さな黒パンと塩汁（スープ）ではこの様な重労働は出来ないと所長にかけ合い、仲間を助けて貰つた話とか、後で復員して来た戦友の話を聞きました。隊長は絶対に部下達を守る立場の者だと云う信念を持って居りました。

現役の兵隊として水戸の工兵学校から中支、南支、北支、満州で除隊、チチハルに落ち着いた後、就職。興農合作社で中国語が出来るので大勢の中国人と仕事が出来たと申して居りました。

今度の旅行も夫が一緒だったらなんて考えますが、七年前に他界、八十六才でしたから無理な話です。夫の分もこの旅を、意義のある思い出を残したいものと念じております。何しろ八十三才ですので無理は出来ず、孫の力を借りて参加させて頂きます。

大類様の様に素晴らしい文章は書けませんが、私の思いを一気に書いてしまいました。ご判読頂けましたでしょうか？ 申し訳ございませんでした。お許し下さい。皆様方の足手纏いにならぬ様、頑張つてついて行きますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

まだまだ暑さが続く様でございます。くれぐれもご自愛下さいます様お願い申し上げます。

八月五日

かしこ

## ノモンハン戦争は何の為の戦争だったのでしょうか？

—歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅に参加して—

杉田 春恵

十年振りにパスポートを取得、孫同伴で初めての中国旅行です。八月十九日北京空港へ降り立ち、想像以上の立派さに、まずびっくり。すったもんだの末に、ようやく出来た成田空港とは比べ様も無い広大な規模でした。この旅は観光ではなく、ノモンハン事変の戦蹟、方正への墓参り、現在の旧満州の戦後の復興を見届けたい思いからでした。

参加者の中には学識、専門的に勉強をなさった方がいらして、浅学非才の私は本当に勉強になりました。ノモンハン事変は何の為の戦争だったのでしょうか？ 専門的に現在も研究をなさっている中国人「徐占江先生」への、鋭い質問もあり、大変実り有る一夜でした。広い広い大草原で虚しい戦をした日本軍隊。装備もろくに無いまま兵を無駄に死に追いやった参謀本都が、机上で作戦し、何の反省もないままに第二次大戦でまたまた国の内外へ戦災を拡大、国民を苦しめたことは許すことは出来ません。日本軍の作った要塞を見学、胸が痛くなりましたが、そこへ記念館を建て、抗日？ 平和目的？ 友好的になれるのでしょうか。私は真実恐ろしくなりました。

チチハルは六十五年前、新婚旅行に行った思い出の地でしたが、龍沙公園は昔の傍は無く大都市となり高層ビルが林立、思い出だけ心の内でさようならを云いました。札龍<sup>ジョロロン</sup>大湿原に舞う丹頂鶴に心いやされました。

八月二十四日、バスは広野をひた走り「大慶油田」へ。あちらこちらに「カマキリの手」の様な形をした掘削機械が現在も掘っている光景と、現代式の機械で採油しているのを目の前で見ながら、過日、茅原教授が「大慶の油田が中国の経済発展を担ってその原動力となっていたのです」、と仰った言葉を思い出し、満州には石炭しか無いと思っていた私が恥ずかしくなりました。

そしてこの油田で生産を高めた功績者「王進喜」を讃えた「鉄人記念館」を見学、そのスケールも大きく三十年後に涸渇する油田を見通して、ここを観光名所にしようと云う、将来を見通しての記念館を作った中国の先見の明に脱帽です。ハルビンの夕食は久々の日本料理、グッドタイミング！！

ハルビンは昔から垢抜けした街として憧れていましたが、現在は何処へ行っても道路工事、建築ラッシュ。きっと近い将来、見違える様な街になっていることでしょう。

ハルビンから方正へ三時間、開拓団の人々が逃げまどったであろう道を通して日本人公墓へ到着。ハルビンから同道下さった千光寺・竹井成範住職様と共に線香をたむけ読教、「安

らかに眠り下さい」、そしてこのお墓を作って下さった中国の方々へ深い感謝を捧げました。隣接したお墓は四百人の日本人が自決した墓とのこと。どんなにか口惜しく悲しかったことでしょうか。ここへもお参りさせて頂きました。

ノモンハンから方正への長い道程でしたが、ずっと慰霊にご一緒させて頂きたく思い続けて参りましたので少しも疲れも感じず、いろいろと知識を頂き、現在の軟弱な日本が見習うべき中国への関心を深めた旅となりました。

ハルビンへのバスは稲刈り間近の広大な農地をひた走りました。夕暮れの西の空が茜色に染まり、大きな太陽が沈み始めました。ふっと東の空を月が昇って来ました。満月です。こんな風景はどこでも見られることは無く、まさに大陸ならではのことでしょう。中国旅行の終りに素晴らしいプレゼントになりました。

このツアーには各地の方々がいらっしゃって交友を深め、八十三才の私を暖かく見守り手を貸して下さいました。深く深く感謝申し上げて居ります。孫の啓輔も責任を果たし安堵した様です。

この度の旅行にお世話になりました方々に心からお礼申し上げ、旅の思い出を綴ってみました。有難うございました。

# 棄 民

山岡 紀代子

政府より引揚げ証明届きたり今し六十五歳の我に  
長崎に被爆せし夫と満州を彷徨ひし私の八月九日  
満州に我と紙一重の運命<sup>きだめ</sup>分け父母探す残留の子ら  
牡丹江のいつこの果てにか眠る母恋ひて弟は海を渡れり  
私の一生いつの頃から狂へると信置きかねて棄民と拗ねき  
引揚げの舟底に眠る乙女子は毬栗頭にをとこ服着て  
内地まで連れて戻りし母の骨引揚げ列車に盗りし人あり  
「支那の児は売られてゆきます上海に」毬つき唄にわが魘さるる  
父・子のみの引揚げ姿に「おかえり」と祖母は瞬時に娘の死を悟る  
胸を病み引揚げ途路の武漢にて逝きたり母と末の弟  
内地に待つ伯母への手紙に乳足りぬ身の悲しきと書きし母はも  
舞鶴の岸に打ち寄する波の彼方母の眠れる満州はあり  
引揚者記念館より望む海遠くて近し旧満州は  
母の位牌抱きて下船舞鶴港父の無念を継ぎて生き来し  
六十余年隔てしもなほ孤児といはるる残留の人に故郷あらず  
残留の孤児に日本の犯したる罪いふなくて繁栄の国

棄民なりしことは言ふまじ満州は父の夢なりしわがルーツなり

吾の胸の肋膜にいささかの翳ありと母と同じき命生きゆく

ああ満州いま中国の地に立てり吾が<sup>わ</sup>生れし<sup>あ</sup>国母眠る国

母眠る大地に続く中国の土の<sup>ひとくれ</sup>一塊抱きて還らむ

満州の凍土に若く眠る母面差し似たる娘の嫁姿

初節句の我を抱きし写絵の母を恋ひつつ紙の雛折る

<解説> 山岡紀代子（やまおか・きよこ）さんは1940年（昭和15年）、旧満州の牡丹江で生まれた。前年の1939年、一家（旧姓・有賀）は、長野県上伊那郡辰野町沢底より牡丹江に移住された。父親は満鉄関係の仕事。1945年日本への引揚げの途上、母と次弟を亡くされている。93年頃より短歌を始められ、03年NHK全国短歌大会で特選。05年短歌結社『国民文学』に入会された。『国民文学』は与謝野鉄幹の流れを汲む窪田空穂が責任編集者となり、小説・文芸評論・美術に関する月刊誌として1914年に創刊され、第7号より歌誌となった。『国民文学』の歌風は創刊以来、生活実感を重視した写実詠であるという。「棄民」は、07年『国民文学』特別作品に入賞した。上記の22首は、特選歌に数首を加え、棄民意識から希望への思いを詠ったものである。

今回、山岡さんとの縁をつないでくださったのは、この夏の「歴史検証の旅」にご夫婦で参加された小柳さんである。参加者全員に旅の思いなどを会報に寄稿してくれるようお願いしたところ、小柳さんからは「山岡さんの歌の想いを胸に抱いて旅に参加した。その歌を載せてほしい」との要望があった。

小柳さんは山岡さんの「春の気をしつとりふふむあかときを独り占めして朝刊配る」という歌が、新聞配達で生計を支えてこられた誇りと喜びが溢れていて好きだという。じっくりと山岡さんの歌を味わっていただきたい。（大類善啓）

## 方正日本人公墓を参拝する旅

島田 成夫

10月10日から17日までハルピンと長春に行ってきました。この旅は伊藤州一さんご夫妻に同行し、お墓詣りと伊藤さんが資金を寄贈して改築したハルピンと長春の小学校を訪問する旅です。

ハルピンから車で約3時間、防雪林とトウモロコシ畑が飽きるほど続く。この長い道のりを開拓民の人達は歩いて避難しようとしたのだろう。ようやく方正の公園墓地に到着した。車から降りると、10月の風が冷たかった。歩き始めると少し緊張した。この地の下に約5000名の方が、名前を知られることもなく眠っている。一步一步大地を踏みしめながら感じていた。どんなにか寒かったろう、どれほど苦しかったろう、誰にも手をとられることなく、誰にも名を呼ばれることなく亡くなった方も多いただろう。

中国残留孤児・婦人の事を知ったのは70年代の後半、方正の日本人公墓のことを知ったのはいつ頃だろうか？ 今やつとその公墓に参拝することが出来る。伊藤さんご夫妻と日本から持参した、酒・水・煎餅とお線香を墓前に供えて黙祷した。

89年茅ヶ崎鶴峯高校に転勤し、そこで中国残留日本人の2世の生徒達に出会った。彼らには、一部の科目は教室での授業と平行して個別授業を行った、初め2名の男子生徒の日本史の授業を担当し、以降数年に渡って中国帰国生徒と接する機会があった。彼らは何時も屈託無く中国での生活を話してくれた。油条を豆乳に付けて食べるのは美味し、と。

2年生の3人の授業の時、3人とも日本語はもうすっかりマスターし、一般教室の授業でも十分可能だった。ただ一人の生徒の休みが多かった。気にはなったが長期ではないので特に理由を聞かなかった。秋が終わる頃このままでは進級が難しくなる状態になっていた。2人の友人に「どうしたのかな？」と尋ねた。「彼女の母親が病気で病院に行きます。彼女はその時付き添わなければなりません」。中学・高校生の日本語習得は目を見張るほど早い、4、50歳台の父母の日本語学習は機会も少なく難しい。

3年生の男子生徒が中国に一時帰ることになった。彼の母親は日本人で、父親は中国人だ。中国人の父は、彼の母親が「日本に帰国したい」と言った時、「君達の母親は今日まで中国で大変苦勞してきた。日本に帰りたいというなら一家全員で日本に行こう」。家族4人で日本に帰国した。しかし、誰が想像できるだろう、彼の父親が癌を患ってしまった。父親は死の迫った病床で「やはり故郷は懐かしい」とつぶやいた。母親は働いている、長男の男子生徒は病の父親を連れて故郷に帰り、看病し最後を看取って多くの人達に挨拶して再び日本に帰ってきた。

1名、2名の歴史を辿ってもはかりきれない人間の命の重さがある。満蒙開拓民の27万人と言われる方々にどれほどの歴史があったのかとても計り知れない。この地に眠っている5000名の方々も。

日本の軍部、政府の無謀な政策、無責任な対応が満蒙開拓民の人々の人生を過酷な、深刻な、計り知れない重いものにした。45年8月各地の開拓民は、最後の望みを託してこの方正地区まで避難してきたが、関東軍に裏切られ、食糧もなく零下40度の厳冬の中で、寒さと飢えと病で命を失った。

ハルピン・長春を訪れる機会を得て、出来る限り有意義な旅にしようといういろいろ資料を探した。むかし三木卓の『滅びた国の旅』を読み、その後角田房子、小川津根子そして井出孫六、小林英夫などの本などを読んでいたが、「方正日本人公墓」のことについては知らなかった。

偶然資料を探していたところ、ネットで「方正友好交流の会」を知り、電話すると大類さんが快く対応してくれ、「星火方正」の冊子と資料、さらにハルピンの石金楷さんを紹介して頂いた。

方正で亡くなり野ざらしにされた日本人の方々の冥福を祈ろうと、63年に方正県の方々が省や中央政府の承認を得てこの地に公墓を作った。私はこの経過を、大類善啓さんの朝日新聞「私の視点」の記事と、当時黒竜江省人民政府外事弁公室の趙喜晨さんの回想記録で詳細に知った。特に文革の中でも方正地区の方々や省政府が身の危険も感じながら、この公墓を守り続けたことは感動的なことだ。

墓地にしばらく佇み、読んできた資料を思い起こしながら出来る限り当時の、そしてこれまでの状況を思い起こそうとした。関東軍幹部の東宮鉄男や加藤完治ら中心に企図された「満蒙開拓民」構想は、「武装移民」時代から、二・二六事件後、帝国議会で「国策」として決定し、“お国のために、五族協和”をスローガンに貧しい農村の2、3男がそして、花嫁候補が送られた。敗戦の時期には北部の開拓民は27万人と言われる。

この国策として積極的に、時には強制的に移民させた「満州の土地」は実質的には、現地の漢族、満族、朝鮮族などの既耕地を、安価にあるいは乱暴に入手したものであった。初めから、五族協和などはなく、危険を孕む開拓民の生活であった。開拓民は「被害者であると共に加害者でもあった」。開拓民はその土地を一生懸命耕作し豊かな実りを作り、「これは天皇に、靖国に奉納する作物、これはお国のため戦う関東軍の兵隊さん達に差し上げるもの」と日々労働に励んだ。

44年マリアナ沖海戦に敗れ、サイパン島を占領された時から、日本の敗戦は決定的になっていた。軍部も実情は承知していた。東条内閣に変わる小磯内閣は、戦争処理内閣だったはずだが、しかし軍部の誰も戦争を終わらせる方策を積極的に語らない。強気の、硬派の意見がむなしく軍部・政府を覆った。

45年4月「中立条約は延長しない」との連絡からソ連の参戦が十分に戦略的に読み取れたはずだ。5月には具体的に駐ソ大使、武官から「ソ連参戦」の具体的連絡と「早期の和平工作」の必要性が軍部中央・政府に連絡されている。しかし深刻な即刻の事態と受け止められた様子がない。「新京」の関東軍司令部の住宅が新装改築されている。「日ソ中立条約」があり、ソ連は参戦しないだろう。ソ連の条約違反は明白だが、ソ連参戦の状況は具体的に連絡されている。関東軍はほとんど対応せず、8月8日のソ連宣戦布告、「満州」侵攻に至ってはじめて具体的な対応をとった。それは「開拓民と居留民を速やかに避難させる」対策ではない。すでに、南方移動で減少・弱体化していた関東軍を、開拓民などの現地応召からさらに「根こそぎ応召」して補充していた関東軍は、大連・新京・図門以南に移動し、朝鮮半島・本土防衛に当たる。開拓民から召集された兵士達は、お国のために、その自分たちの家族、親戚、友人を「放棄」する命令をされる。取り残された、「放

棄」された開拓民は年配男性か女性、子供が圧倒的に多かった。そこにソ連が参戦し、自国民を保護すべき関東軍は移動し、開拓民は言葉では言い尽くせない困難な状況、逃避行が行われ、多くの人命が失われた。

方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓、中国養父母公墓、もう一つ藤原長作記念碑（遺骨が分骨されている）を参拝し、陳列館を見学した。周囲の様子はもうすっかり秋が終わり、落ち葉を踏みしめながら、冷たい風に吹かれて墓園を離れた。開拓民の人達は、45年敗戦の時この10月頃もまだどこに逃げのびればよいのか分からず、寒さと飢えと病に苦しみながら歩いていたのだろう。細い雨が小雪に変わったように見える。10月12日の寒い一日だった。

ハルピンに戻って大類さんに紹介いただいた、紅十字会養父母連絡会事務局長の石金樫さんにお会いすることが出来た。現在ハルピンで確実に連絡取れる養父母の方は5名になりました。年に2度はお会いしていますが、なかなか生活が大変の様子です。石さんから『中国残留日本人孤児』という極めて貴重な本を頂きました。また「DVD」も翌日コピーしてホテルまで届けてくれました。残念ながら養父母連絡会はハルピン以外にはないので他の地域のことは明確ではないとのことでした。

15日長春で、「長春中日友好楼」を探しました。通訳の方は知りませんでしたが、幸いに運転手さんが知っていました。長春市平陽街に見つけることが出来ました。89歳の2名の方が生活していました。男性の方は病気で休養している様子でしたが、女性の方はお元気で伊藤さんご夫妻と私を部屋に招き、「座ってください」と椅子を勧めてくれました。笑顔の「秦お婆さん」にお会いすることが出来ました。残留日本人の帰国が盛んになった80年代後半頃、私は養父母はどうなるのだろう、と思っていた。大類さんのお話では日本政府が養父母の生活には全く支援金を補助していないという。もうかなりの高齢で生活は大変厳しい。日本に帰国した方々も言葉の壁が厚くなかなか十分な仕事に就けない。養父母の支援はしてあげたいが自分たちの生活が精一杯だ。ぜひ日本政府の支援を要望する。

もう一つ伊藤さんご夫妻に同行して貴重な体験をした。

方正の街から車で2時間くらい「沙河子の炭坑」にある小学校を訪ねた。炭坑村に入ると周囲一面ボタ山、昨年も来たという運転手さんも道が解らない。通行する人も、車もなくボタ山の中を30分探してやっと小学校に着いた。伊藤さんが寄贈して改築したのは05年でその時は100名以上の子供達がいたが、炭坑の爆発によって操業が出来なくなり、失職した人は皆炭坑を離れざるを得なかった。今年小学校に在籍していたのは4年生の男子生徒2名だけ。2名だけの学校生活は寂しいだろうな、おとなしく、何かを聞いても首を頷くように振る姿が印象的だった。私は地図を広げ、中国と日本の位置を探し、面積や人口を尋ね、何倍かな？ と尋ねた。通訳、先生を通して子供達は計算して答えた。やっと少し表情が出てきたように思えた。お土産を渡し別れを告げて外に出ると相変わらず重く黒い雲が立ちこめ細かな雨が降っている。子供達の家はどこ？ 冬は寄宿舎かな。彼らがなんとか小学校・中学までは学習を続ける事が出来ることを祈った。炭坑は今再操業に

向けて再建中だという。

長春では「双陽区農村の小学校」を訪問した。校門に着くと子供達が2列に並んで校舎の入り口まで並んでいる。これはとても苦手、出来れば平常の授業をして欲しいが・・・。校長は会議室に招いたが私たちは少しでも子供達と会うことを望んだ。少し大きな教室に全員が集まっていた。03年に改築した時はやはり100人以上いたが、農村の過疎化が進み、両親の出稼ぎなどによって、今年の在籍は、1年から6年まで54名。

伊藤さんの挨拶後、私はここでも地図を広げ話をした。1年から6年までいる。通訳と先生に尋ねながら、一人一人に回答して貰った。やはり54名の生徒がいると活気がある、沙河子の炭坑の小学校は、村全体が元気がない状態、子供が元気がないのも仕方がないだろう。長春では子供の質問が相次いで面白い、次々に手を挙げて質問する。伊藤さんと2人でせっかく手を挙げている子供を見逃さないように我々も夢中になって対応していた。質問が終わると、子供が前に出て、歌う、踊る、演技をする、漢詩を暗唱する。事前に練習したのかは解らないが、積極的に手を挙げて名乗る姿に、我々も、先生も、子供もみんな笑顔で楽しめた。

尖閣列島問題の時期でした。タクシー乗車拒否に2度会いました。その一方で16日私は一人で、長春公園に行き、友人から聞いた「日本人慰霊碑」を探しました。公園では土曜日の晴天もあって沢山の人が運動していました。ローラー・スケートをする高齢者グループの側でしばらく眺めた後、「日本人の慰霊碑を探しているが知らないか」と尋ねました。すぐ10名ほどの人が集まり、みんな以前は有ったが、今はもう無くなった、と言います。残念戻ろうとすると、一人の女性が、墓碑は壊れて解らないが遺跡はある、私が連れて行ってあげる。「很近」と言うのですが、20分以上歩いて大きな森林公園に着きました。その公園の中で彼女は落ち葉を掻き分けあちこちを探し回り、やっと墓跡と壊れた墓碑らしいものを見つけました。かなり崩れた円墳状のものが幾つもあり、その周囲に2,3重に樹木が植えてありました。帰りはバス停まで送ってくれました。バスを見つけると彼女は走り出し、ドアを押さえて運転手に「ちょっと待って、日本人だ」を繰り返し、私に「早く急いで、駅は終点だから」と背中を押しました。バスに乗ると最前列の若い女性がすぐ席を譲ってくれました。帰国後写真を送ろうとしたら、彼女の方からメールが来て、メールに添付すれば時間もお金も省けると。最後に嬉しい体験をして帰国しました。

トウキョウ・オキナワ・ヒロシマ・ナガサキを日本人は実感することが出来る。しかし柳条湖、慮溝橋、南京、731部隊、「方正」は実感はおろか事実も知らない人も多いのではないだろうか。私の旅は、過去を振り返り、未来に続く友好交流を続けて行きたいと念願する旅だ。今私にはお金も力もない、いただいた大類さんのパンフレットをコピーしてあらゆる機会に知らせていきたい。

(しまだ・しげお：1941年生まれ。02年、神奈川県立高校を定年退職。退職後中国語を学習し、中国の戦争責任を考える旅と観光旅行をしてきた。方正日本人公墓への旅は、「私にとって一段落の旅になった」とのこと)

## 日本人公墓と 731 細菌部隊記念館を訪ね、改めて戦争を考える

高橋 修司

1月に、「中国『帰国者』家族とともに歩む練馬の会」(同歩会)主催の映画「嗚呼 満蒙開拓団」(羽田澄子監督)を観た。その時、今回、訪問ツアーの世話役をされた「方正(ほうまさ)友好交流の会」の奥村正雄さんから背景説明を受けた。中国ハルピン市郊外の方正県に5000人近い死者たちを葬る『日本人公墓』が存在していることを知りツアーに参加した。

この「方正地区日本人公墓」建立の経過は以下のとおりである。もともと中国の土地であった旧満州に国策として入り込んだ開拓民は、ソ連の参戦、それに続く敗戦の知らせと同時に祖国を目指して逃げ惑い、難民、流浪の民と化した。多くの人々は零下40度という酷寒にさらされ、飢えと栄養失調、発疹チフスなどによってこの方正の地で息絶えた。そして、生き残った人から残留「婦人」、孤児が大量に発生したのである。それから数年、累々たる白骨の山を見たある残留「婦人」は、何とかして骨を拾って埋葬したいと願った。その願いは最終的には当時の周恩来首相のもとまで届き、建立が許可された。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、日中が国交を回復する10年ほど前のことである。まだ貧しかった中国がお金を出し、公墓を建立し、長年にわたって維持管理している。

6月24日、方正県政府を表敬訪問し、「中日友好園林」に向かった。そこには、他に、大量自決があった「麻山地区日本人公墓」、「中国養父母公墓」、稲作を指導した「藤原長作記念碑」、友好の記念碑、墓参記念植樹林、記念館が整然とあった。藤原さんという人は中国に何年間も手弁当で訪れ、稲作技術を伝授し、「日中友好水稻王」と感謝、尊敬されている。養父母公墓は孤児だった日本人が建立したもので、テレビでも放映された小説「大地の子」(山崎豊子著)の「養父」のような人がたくさんいたことがわかる。少し、救われた気持ちになった。涼しい風のなか、様々な思いを巡らせながらお参りした。

「731 細菌部隊記念館」を訪れたのは26日、37度と一番暑い日だった。

「731 部隊」は細菌戦を行う特殊部隊でハルピンを中心に開発と実験を行った。資料によれば10年間に少なくとも3000余のロシア人、朝鮮人を含む人々が生体実験により殺害され、中国全土で行われた細菌戦でたくさんの方が亡くなり、不発細菌爆弾のためなどで現在も被害が続いている。敗戦の際に、関係者が米軍に実験資料を提供して訴追を免れたことは非公然の事実として有名である。

「悪魔の飽食」(森村誠一著)が出版されたとき大変な衝撃と反響が起きたが、残された本部建物の陳列品、破壊から残った煙突、生きて戻れなかったと言われる地下通路と判明している犠牲者の写真・名札を見ると、事実だっただろうと思うし、「世界遺産」への登録の手続きが進んでいると聞き、「原爆ドーム」、「アウシュビッツ」と考え合わせ、意義あることと思わざるを得ないと思った。

戦争は終わった後も人々に影響を残す。今回の方正訪問は残留孤児の聞き取り調査もあった。調査に当たった方々によれば周りの中国人も孤児だったと言っているのに物的証拠がないため日本政府から認められていないとのこと。この女性はすでに子供のみならず孫もりっぱに育ってい

るが、日本人と認定されることが宙ぶらりんな状態を解消し、本人、家族とも精神的に安定することになると話しているとのこと。私もそう思う。

映画にインタビューで出演し、満州で母と妹をなくした方は回数を忘れるほど中国東北地方を訪ね、現地の中国人と交流しているとのこと。帰ったらすぐ獣医の仕事が待っていると笑っていた。

ハルピンで生まれ、兄と弟をなくした女性は、ハルピン訪問を永年希望していたとのこと。95歳で亡くなった父の波乱万丈の人生や、自分も孤児になった可能性があったと言う話が興味深くリアルに受けとめられた。兄弟のお墓探しでは特定できなかったが、猛暑のなか、日本から持参した水をまく姿が印象深く残っている。

最近、中国の「膨張」につれて、私たち日本人の中にも複雑な感情が沸き起こっている。屈折したナショナリズムは危険だ。今回、あらためて「過去から教訓を学び、これからは生かす」大切さを感じ取った。

(たかはし・しゅうじ：東京都練馬区職員労働組合顧問、59歳。定年後は中国で古代史を勉強したいと、いま中国語を学習中)

## 方正再訪

ちば中国帰国者支援交流の会  
吉川 雄作

6月下旬、2006年以來2度目となる方正訪問の旅に参加した。今回は、担当の奥村氏を含めて6名の小グループで、お互いの距離が近い海外旅行となった。しかし、同行の飯白氏（9頁参照）と私には、長く日本人認定を求めているながら未だ果たせない方正在住の一婦人、徐士蘭への聞き取りとビデオ撮りという“重い目的”があった。

4年前には一部工事中箇所があったハルビンから方正への高速道路は全線開通し、時間も短縮された。途中の休憩所で、雪のように舞い飛んでくる「柳絮」を初めて体験した。

方正の市街地は心なしか以前よりも活気が感じられた。定宿の鑫禧商務酒店は変りなかったが、前回裏返しになっていたホテル名ピンイン表示の「N」の字が直っていた。

表敬のため向かった方正県政府庁舎への道は、両側に高い建物が整然と建ち並び、メインストリートとしての体裁が格段に整っていた。

2泊の滞在中に、朝市の溢れんばかりの活気、夕どきの市街地の賑わい、鑫禧大酒店地下の銭湯入浴など、方正の市民生活の一端を体感することができ、方正が一つ身近になった。

行程の前半は本隊(?)とともに、方正政府・中日友好園林（方正地区日本人公墓・麻山地区日本人公墓・中国養父母公墓・陳列館）を、翌日は伊漢通（松花江河畔 船着場跡）・革命烈士墓地などを訪れた。



朝市広場入り口

「中日友好園林」への道路は、バスで入り口まで入れるようになっていた。入ってすぐ右手に、前はなかった大きな碑板「中日友好園林简介」が目にとまる。

公墓は4年前同様、ひっそりとしたたたずまいの中にあっただけに、あれこれ撮影しているうちに、気がつくとも、木々のざわめき、鳥のさえずりの中で一人になっていた。

前回、雨漏りの跡が痛々しく、陰鬱な印象だった陳列館内部は、きれいに補修され、明るくなって、よく管理が行き届いていると見受けられた。

翌日、伊漢通の松花江河畔を訪れた。着いてしばらくは別の場所に来たのだと思ったほど景観が変わっていた。堤の上に建っていた大きなレンガ倉庫がなくなり、川砂の堆積場になっていた。サンドパイプの先から砂混じりの水が絶え間なく吐き出され、大きな砂山を築き上げている。しかし、ゆったりとした川の流れと、対岸のはるか向こうになだらかに広がる山並みは4年前と同じだった。

65年前もこのような景観だったのであろうか。



飯白氏・奥村氏・从会霞さん・孙洪波さん  
方正到着の日、公墓と烈士墓地からホテルに戻って部屋でくつろいでいると、なにやら人の気配がした。徐士蘭の家族が予定よりも早く来たという。急いで奥村さんの部屋にカメラを持って行く。徐士蘭の三女从会霞さん、次女の孫娘孙洪波さんが来ていた。すでに奥村・飯白両氏とガイドの王さんとの話が始まっている。三脚を立てる余裕もない。撮ったものがこの後どのように扱われることになるのかは分からないが、とにかく手持ちのまま撮影開始。撮影機材は特別のものではない。手持ちでの撮影で手が痛くなってきた。

会霞さんと洪波さんがほとんど間を置かず話す。それも話しているうちに気持ちが昂ぶってくるのか、早口で声高に話す。時おり奥村さんが質問をしたり相槌を打ったりしている。飯白さんはかつて中国人として暮らしたことのある人だから、話の内容はすべて理解していると思われるが、頷きながら聞いている。私は未だ学習中の身で、二人の話から単語一つすらなかなか聞き取ることができない。ガイドの王さんが通訳してくれるのでかろうじて話の内容を知る。奥村さんから今回訪問の目的（ビデオ撮りの趣旨）とこちら側の紹介の後、二人からはこれまでに行われた厚労省の調査のこと、日本人である証拠としている種痘痕のこと、養父のことなどが話されたようだ。こうしてビデオ撮りが始まった。

翌日午後、徐士蘭ご本人が、会霞さん洪波さんと一緒にやってきた。

実は、方正へやって来るまで、奥村氏自身でさえ、彼女が現在置かれている環境や生活状況についてはほとんど知るところがなく、果たしてこちらの取材に応じてもらえるかどうか不確か、という状況であった。

実際に会った徐士蘭さんは、70歳というが、ずっと若々しく、本人が言うとおりに健康そのものに見えた。そう思えば長い間のさまざまな苦難を背負ってきた女性……と見えなくもないが、言わば、品のよい「ふつうのおばあちゃん」という印象で、ホテルでは娘と孫が一生懸命に話すのを黙って聞いているだけであった。

私たちが密かに抱いていた心配は杞憂となった。

ホテルの前で記念写真を撮り、奥村さんらハルビンに戻る本隊を送り出した後、飯白さんと私は、洪波さんが運転するホンダ・アコードで徐士蘭の自宅に向かった。ふだんは三男の家族と一緒に生活している。住まいは方正の中心部を抜けて5分ほどの住宅街の一角、同じ造りの庭付き二軒長屋が並ぶ住宅街の一角にあった。正確な間取りは分からないが、3LDKというところであろうか。通された部屋には、応接セットとテーブル、ドアに「倒福」、壁に赤ちゃんの写真が貼ってある。壁際の台（下は暖房器）には花が飾ってある。隅にテレビとパソコン・オーディオセットがあった。簡素で落ちついた日常が感じられた。

徐士蘭・从会霞さん・孙洪波さんのほかに、長女の从会英さん、そして三男从保国さん夫妻

が加わり、休憩を挟んで30分以上、徐士蘭本人へのインタビューとビデオ撮りをする。飯白さんが、奥村さんとの打ち合わせ事項に沿って言葉を選びながら質問をする。質問に答える徐士蘭の声は大きく張りがあり、話し方もはっきりしているので安心した。話の内容は前日と重なりながら、幼少の頃の記憶、養父に虐待されたこと、失われた証拠品のこと、種痘痕やピアス穴のこと、これまでの厚労省の調査のこと等々多岐にわたった。

私は話し手の声がしっかり録れるよう、また画面から外れることがないようにカメラを動かして追いかける。話の細部は分からないが、彼女と家族の、何としても自らの「出自」をはっきりさせたいという一途な思いがひしひしと伝わってくる。時々会霞さん・洪波さんが補足する。そうした間にも、ふと沈黙の時間が入り込むことがある。思い出したくないこと、話したくないことがあるのか……。テープが終わり近いことを示す赤い点滅が出たのを機に終わりにしてもらったが、どこまで撮っても尽くせないという思いが残り、カメラのスイッチを切って立ち上がったときには、こぼれそうになる涙を隠すのに苦心した。

帰り際に、庭を一巡りしてもらい、彼女が丹精込めて育てている野菜や花を見せてもらった。片隅には鶏や鶯も飼われている。生きものを慈しむ彼女のやさしい眼差しを見た。

ハルビンに戻る前に、二台のホンダ・アコードに分乗して、方正の名勝地を案内された。

方正公園内の仏教寺院は、比較的新しく建立、あるいは移築されたお寺と思われる。正殿だけでなく、数体の仏像を順に巡りながら、礼に従って参拝する姿には、徐士蘭一族が敬虔な信心の持ち主であることを思った。われわれも中国式を真似て参拝した。



二日間、延べ1時間20分ほどに及んだインタビュー録画はこうして終わった。一家は、言わば見ず知らずの我々の取材に快く応じてくれただけでなく、大歓迎してくれた。

徐士蘭さんが、当時としても子沢山と思われる三男三女を立派に育て上げ、今はその子

供たちと嫁・婿と孫たち家族の愛情に包まれた生活を送っていることに安堵し、また、虐待を受けた養父についてさえ、「今自分がこうして生きているのは養父のお蔭……」、と言い切る余裕を持っていることに深い感銘を受けた。

飯白さんと私は、彼女が間違いなく日本人であるとの確信を得たことで完全に一致した。仮に厚労省の認定が取れなかったとしても、彼女と家族の悲願に対して、何らかの形で応えてあげたいと心から思っている。〔2010.11〕



双龍湖にて 筆者・徐士蘭・飯白氏

# Viewpoint

軍の食糧倉庫のあった方正県に2万人もの開拓民が避難してきたが、日本軍は既に撤退して、遼東ソ連軍の猛攻や言語を絶する劣悪な環境下で帰国できたのは4分の

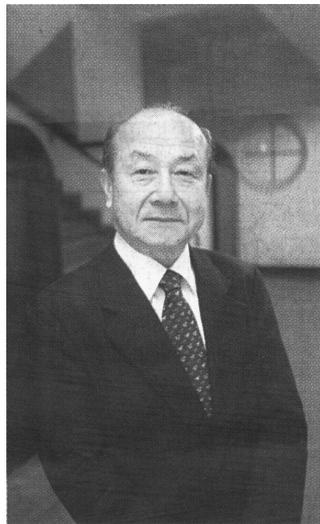
終戦65周年を迎えた本夏、筆者は日中科学技術文化センターが主宰する「現代史の歴史検証の旅」に参加し、中国のノモンハン、ハイル、チチハルなど中蒙国境の辺境を回ってきた。そこで耳にした状況にはなお敗戦の疼き感じさせるものが多く、戦後はまだ終わっていないとの思いを強くした。

この旅には、満蒙開拓団や旧満鉄の関係者が多く参加され、その体験談に心痛めた。終戦直前に19歳で現地徴兵され、国境の要塞で九死に一生で帰還した85歳の老兵は亡き戦友への慰霊に、ノモンハン戦で戦死された叔父上の遺影を抱いて現場でお詣りなど、涙無しには聞けない実話があった。

また旅の最後にはハルビン市郊外の方正県で日本人公墓を参拝したが、そこにも壮絶な悲劇があった。ソ連軍の侵攻に追われて関東

## 旧満州の日ソ戦跡を巡って

拓殖大学名誉教授・茅原 郁生  
同海外事情研究所客員教授



同胞の屍は方正県の中国農民の手で荼毘に付され、当時の周恩来総理の許可を得て近くの小高い丘に葬られ、今日まで日本人公墓として地元民によって祀られていることである。その隣には成人男性が徴兵された開拓村で残された老人、婦女子400名が集団自決された遺骨も公墓に祀られていた。これら公墓に合掌しながら日本はこれら惨劇から目をそらしたままでよいのか、と痛切な思いであった。

者の存在を抜きに日中関係や戦後は語れないのではないかと。また旅の主目的であったノモンハン戦跡の検証は、中蒙両軍の国境監視塔が点在する360度広がる荒涼たる草原から始まった。ノモンハン事件(ノモンゴルの国境防衛戦)は旧満州国とノモンゴルの国境紛争であったが、実態はハル八川を巡る関東軍と機甲戦力まで繰り出したソ連軍との前哨戦であった。関東軍はソ連軍の戦力評価を誤り、近代的機甲戦への認識不

角にあり、戦局の把握も困難で、旅の参加者からは辻正信参謀らの無謀と功名心への非難が集まっていた。多くの戦記書も認めているとおり、わが方の戦車戦力の劣勢を自兵戦で補っており、傲りに基づく戦略の誤りを現地の敢闘精神などで戦術的に補わせたという問題があった。その無謀さはノモンハン部落の外れにそり立つ鉄筋3階建ての戦争記念館で、ソ連戦車に日本兵が肉弾攻撃した火炎ビロケットが多数陳列されていたのが物語っている。また戦死兵だけでなく、敗戦の責任から自殺に追い込まれた連隊長などに対して忠霊塔の建立で戦を美化した旧陸軍の体質や制度の問題も見せつけられた。

そもそもノモンハン事件の勃発は、当時関東軍が対ソ戦に備えて満州国の国境線の安泰を積極策で牽制しようとした結果でもあった。当時、陸軍中央は泥沼化した中国との戦争の早期解決とソ連との2正面作戦回避を指す中で、「侵されても侵さない」対ソ隠忍姿勢を指示した。現地関東軍はその意に反して「ソ満国境紛争処理要綱」を策定し、積極姿勢による対ソ牽制を狙いとしていた。これに対して陸軍中央は当時、独伊との三国同盟を巡る確執などに忙殺されて指導不十分であり、加えて

1程度で大部分の方は餓死、凍死された由。旧軍食糧倉庫の前で胸が締め付けられる思いであった。せめてもの救いは、累々とした

そして中国方正県の農民が負しい中で日本人丁重に用ってくれたご好意こそ日中草の根交流の原点ではないかとも思った。中国の奥地で知られることもない積善や痛みに耐えながら黙している関係

な機甲部隊にどのように立ち向かったのか、犠牲の多い理由が納得できた。

実際、前線司令部のあったカンシル廟(ツマ教寺院)もわずかに山砲用のトーチカが守る平原の一

ともあれ今日も中国東北地方の辺境に残された戦争の後遺症はお生々しく、日本人として忘却の彼方に置き去りにするわけには行かない思いを強めた旅であった。(かやはら・いくお)

### 生々しく残る惨劇の跡 反日教育に供する中国当局

足と小松原師団の兵力の逐次投入というミスが重なって戦局は大敗北を喫した。

ここでノモンハン戦史を詳述する紙幅はないが、隠れる地形的起伏もない一面の草原に立つて圧倒的優勢な機甲部隊にどのように立ち向かったのか、犠牲の多い理由が納得できた。

実際、前線司令部のあったカンシル廟(ツマ教寺院)もわずかに山砲用のトーチカが守る平原の一

# ノモンハン戦争の跡地を訪ねて 異郷での虚しい戦争を痛感

## 大類善啓さん 方正友好交流の会事務局長

71年前の夏、日本軍とソ連軍は、満州とモンゴルの国境付近で4カ月にわたる死闘を繰り広げた。この戦争は、日本では「ノモンハン事件」として知られている。戦場となったのは、ハルハ河に沿った南北60キロ余りの砂がちの草原で、関東軍の独断専

この8月19日から一週間、近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅というテーマで中国東北部を旅してきた。

参加者は、ノモンハンで叔父や、母の許婚を亡くされた方。中国南部の戦線で人を殺めた、そのことを忘れるため毎晩浴びるように酒を飲み、58歳で逝った父を思う人。チチハルに住み、学び、働いていた人たち、対中経営戦略論や中国軍事を専門とする研究家など、それぞれ深い想いとドラマを秘めた人たち。そして日中両国の歴史に、真摯に立ち向かおうとする人たちがいる。

### ■ノモンハン戦争

1939年満蒙国境のノモンハンでおこった日ソ軍の衝突で、双方が2万人前後の死傷者を出した。ソ連では「ハルハ河の勝利」、モンゴルでは「ハルハ河の戦争」と呼ぶ。5月モンゴル人民共和国

### 大草原が延々と

8月20日の朝、北京からハイラル港に降り立つ。うだるような蒸し暑さの日本から来た者には、ひんやりとする空気が心地よい。

ノモンハンに向う舗装されていない道路を走るバスの車窓から見えるのは、ただただ広漠たる大草原である。放牧の牛や馬、羊が時に見えるが、ほぼ同じ風景が延々と続く。「国境？そんなものが海の上にあるものか。わしは一度も見たことがないぞ。」伊集院静は近著『お父さんとオジさん』で、朝鮮から渡ってきた父を描いたが、その中に出てく



ノモンハン戦地に向うには、まず飛行機か列車でハイラル（海拉尔）へ。ハイラルから車で片道およそ3時間かかる。一番近い街は新巴爾虎左旗



敗戦後の逃避行で犠牲になった数千人の満蒙開拓民が眠る「方正日本人公墓」を参拝。高野山真言宗の住職・竹井成範氏の下、慰霊法要を行った。8月25日、黒竜江省方正県で



黒竜江省甘陽県には、新潟出身者650人余が移民した「朝陽開拓団」の家が当時の姿で残っていた。住人の中年女性が「開拓団の家だったと親から聞いた」と証言してくれた

る父の言葉が何からしらくとなく、日本は太平洋戦に出される。国境？そんなもんがこの草原の上にあるものか。しかし今から70年ほど前の1939年夏、モンゴルと満洲国との国境紛争は、ソ連軍に対する甘い認識と、辻政信を代表とする関東軍参謀たちの冒険主義的な性格が合わさり、二つの傀儡国家を挟んで、ソ連軍と日本軍の大規模な戦争へ発展した。結果は、壊滅的な損傷を受けて日本軍は敗北した。それから2年後、ノモンハン戦争の教訓を汲むこ

い、とおっしゃる。私は忘れたいと考えている。これは良いことではない、日本側が忘れたいということになれば、これは悲劇です。逆私達が良いことと語ったという（本紙、9月5日号2面、藤野文昭氏「中国に魅了されて」）この陳毅の言葉は今日、極めて重要だ。

この大草原で、関東軍の兵士たちは、日本では想像もつかないような数の大群に悩まされた。私たちは、バスの接触事故もあり、ハイラルからノモンハンまで5時間かかったが、当時の日本軍は完全軍装の徒歩で1週間かかったという。なぜこんな大草原までやってきて戦ったのか。思えば、日本列島から遠い異郷の地に「国家」をつくり、遙かモンゴルの草原の地までやってきた。今更ながら愚

かな軍の参謀や戦争指導者を笑っても、虚しい。

その後、ホロンボイルの新巴爾虎左旗からチチハル、大慶、ハルビンを経て方正県へ行った。革命烈士記念碑に黙祷を捧げ、その後「中日友好園林」へ行き、方正日本人公墓に参拝した。高野山真言宗の住職、竹井成範氏がわざわざ慰霊法要のため、岡山から駆けつけてくれた。方正日本人公墓建立は、当時の陳毅外相の署名批准後、周恩来の下で許可された。先の陳毅の言葉が、公墓建立の思想的立脚点である国際主義的精神とも思い出されるのだ。

（おおるい・よしひろ  
〓 日中科学技術文化センター常勤理事、方正友好交流の会事務局長）

## ほうまさ ノモンハンと方正で国際主義的精神を思う

——第3回「近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」報告記——

大類 善啓

一昨年、「友好の原点を訪ねる旅」を企画したところ大好評だった。昨年に続き今年で3回目の「近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」では、8月19日から26日まで、北京からハイラル、ノモンハン、チチハル、大慶、方正を訪ねた。普通のツアーではなかなか行けない地域でもあり、また近年、ノモンハンが脚光を浴びていることもあってか、応募者は「方正友好交流の会」の会員や前回の参加者などを含めて、瞬く間に当初の定員をオーバー、参加をお断りした人も出た。最終的には事務局を含めて総勢35名の訪中団である。

### ドラマを秘めた人たち

センターの理事・矢島敬二さんも昨年同様参加。団長もお願いした。同じく前回も参加された理事の服部健治さんは、中央大学大学院の教授、中国駐在11年、中国経済の専門家であり、旅の間は参加者へ丁寧な解説もしていただき、大いに勉強になった。今回は副団長を務めていただいた。

また日中関係研究所の会員で、中国軍事問題の専門家である拓殖大学名誉教授の茅原郁生さんや、ノモンハンで叔父や、母の許婚を亡くされた方。中国南部の戦線で人を殺めたことを忘れるため毎晩浴びるように酒を飲み、58歳で逝った父を思う人。満州からシベリアに送られた兄を持つ女性、満州にいた日本人に嫁ぎ、白城子からチチハルに新婚旅行に行かれた婦人、チチハルの宮前小学校を卒業後、満鉄チチハル支社に勤めた方など、それぞれ深い想いとドラマを秘めた人たち、そして日中両国の歴史に真摯に立ち向かおうとする人たちが参加者である。

### ノモンハンで「国境」を思う

8月20日の朝、北京からハイラル空港に降り立つ。うだるような蒸し暑さの日本から来た者には、ひんやりとした空気が心地よい。ノモンハンへ向う、舗装されていない道路を走るバスの車窓から見えるのは、た

だただ広漠たる大草原である。放牧の牛や馬、羊が時に見えるが、ほぼ同じ風景が延々と続く。

「国境？ そんなもんが海の上にあるものか。わたしは一度も見たことがないぞ」。伊集院静は近著『お父さんとオジさん』で、朝鮮から渡ってきた父を描いたが、その中に出てくる父の言葉が何かしら思い出される。「国境？ そんなもんがこの草原の上にあるものか」

しかし今から70年ほど前の1939年夏、モンゴルと“満洲国”との国境紛争は、ソ連軍に対する甘い認識と、辻政信を代表とする関東軍参謀たちの冒険主義的な性格も合わさり、二つの傀儡国家を挟んで、ソ連軍と日本軍の大規模な戦争へと発展した。結果は、壊滅的な損傷を受けて日本軍は敗北した。それから2年後、ノモンハン戦争の教訓を汲むことなく、日本は太平洋戦争に突入した。

### 中国もノモンハン戦争に研究のメス

今回ゲストとしてハイラルからノモンハンまで同行していただいた徐占江氏（ハルビン市ノモンハン戦争研究所所長、ハルビン市社会科学院侵華日軍要塞研究所所長）によれば、中国でも近年ノモンハン戦争を研究するようになったとのこと。以前は、ソ連、モンゴル、“満洲国”、そして日本の「4カ国」の立場からの調査研究だったが、これからはできるだけ多面的な角度から検証していきたいという。

ソ連が解体しロシアの機密資料が解禁され、ジュコフの暗号電報も解読できるようになり、今まで書かれていたのとは違う資料も出てきたという。ソ連も航空機や歩兵戦で思った以上に損失があり、ソ連軍の圧勝という定説と異なる面が浮かびあがってきたのだ。ソ連もモンゴルも大変だった、と徐所長は語った。

### 虚しさ迫る関東軍の冒険主義

この大草原で関東軍の兵士たちは、日本では想像もつかないような蚊の大群に悩まされた。私たちは、バスの接触事故もあり、代行車が来るまで2時間近くか

かり、結果的にはハイラルからノモンハンまで5時間ほどかかったが、当時の関東軍は完全軍装の徒歩で1週間かかったという。なぜこんな大草原までやってきて戦ったのか。思えば日本の指導者たちは、遙か遠い異郷の地に“国家”をつくり、モンゴルの大草原までやってきた。今更ながら軍の参謀や戦争指導者の愚かさを笑っても、虚しい。

今その激戦地だったここに、「愛国主義教育基地」としてノモンハン戦争遺跡陳列館が建っている。その手前には、当時のノモンハン戦争を偲ぶレリーフが作られていた。悪辣な侵略者である関東軍を打ち破ったソ連軍戦士の勇ましい姿が描かれている。現在の中国の立場を表しているのだろうか。

陳列館の中には、関東軍が残していった火炎瓶や兵士の眼鏡、鉄兜、三八式歩兵銃などがガラスケースに収まっている。

陳列館の外の草原には、ソ連の戦車BT-7が数台置かれている。当時の戦車とは思えず、くすんだ感じがしない。専門家である茅原郁生さんに聞けば、当時のソ連軍の戦車を模し、強化プラスチックなどで外装を施したのだろうとのことだった。叩いてみたら「コンコン」と音がしたという。

陳列館の正面前には「平和の鐘」がある。昨年作られたという。日本などからの旅行者を期待しているかのようにこの地は整備しつつあるようだ。

### 「憎しみ」を超えて国際主義的精神を！

ノモンハンを後にして、ホロンボイルの<sup>シンバルコサ</sup>新巴爾虎左旗<sup>キ</sup>を經由し<sup>アムダロ</sup>阿木古郎へ行き泊まった。翌日、ハイラルへ再度向かうなか、関東軍がノモンハン戦争の際に軍事拠点とした甘珠爾廟（カンジュル廟）を見学。また、関東軍が作った北山要塞跡も視察した。ここにも博物館が建っている。

先のノモンハン戦争遺跡博物館もそうだが、ここでも博物館のコンセプトになっているのは、「侵略の歴史を忘れるな」である。確かに忘れてはいけない。

しかし、1960年当時の陳毅副総理は、日本作家代表団の副団長として訪中した亀井勝一郎に、「日本軍国主義の弾圧を受け投獄された亀井先生が、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私達は忘れたいと考えている。これは美談です。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れたいとい

うことになれば悲劇です」と語ったという。（「日中文化交流」NO.716より）この陳毅の言葉は今日、極めて重要だ。

一昨年訪れた瀋陽市郊外の、柳条湖事件を記念して作られた9・18歴史博物館は装いも新しくなり、そこには「我々は決して忘れない」というトーンで、展示物が構成されている。日本の残虐な行為だけを、これでもかこれでもかと陳列しているのだ。出口にあった参観者の感想メモノートには中国語で、「日本人は人間ではない！」と記されていた。ここには、歴史を鑑として未来に向かうという、次の世代への友好への志はない。

これでは、日本への憎しみを一方的に刻印するだけであり、その憎しみを超えて、国家に支配された人々との「新たな連帯への絆を創っていく」という発想が全く生まれてこない。新たな憎悪を作りだし、一方的に「日本人（全体）は憎い」という発想になってしまう。周恩来や陳毅たちが苦闘の末に辿りついた国際主義的な精神が全くないがしろにされている。新中国の崇高な精神はどこへ行ったのか、と思うのは私だけではないだろう。

### 方正で慰霊法要

4日目のチチハルでは、郊外の甘南県の朝陽山開拓民跡を訪ね、現地の方々と交流した。市内の宮前小学校跡は今、チチハル第三十四中学となっている。参加者の中で最年長、85歳の丸井保さんが出た学校だ。丸井さんは夫人のみどりさんと並んで、仲間からカメラのフラッシュを浴びた。丸井夫妻の眼には涙があった。もう一人、杉田春恵さん（83歳）は、白城子からチチハルの龍沙公園に新婚旅行で来たとのこと。お二人にとって65年ぶりのチチハルである。

大慶では、石油生産基地から加工基地へと変貌しつつある姿を確かめ、ハルビンを経て方正を訪ねた。

方正では、革命烈士記念碑に黙祷を捧げ、中日友好園林へ行き、日本人公墓に参拝した。高野山真言宗の住職、竹井成範氏がわざわざ慰霊法要のため、岡山から駆けつけてくれた。方正日本人公墓建立は、当時の陳毅外相の署名批准後、周恩来の下で許可された。先の陳毅の言葉が、公墓建立の思想的立脚点である国際主義的な精神とともに、改めて思い出されるのだ。

（社団常勤理事、方正友好交流の会事務局長）

### 先崎千尋の

# オピニオン

「中国では日本人といじめられ、日本へ帰ったら中国人といじめられ、私の国はどこなの?」。5月29日に土浦市民会館で「嗚呼 満蒙開拓団」が上映されたが、終わってから映画の冒頭に登場する池田澄江さんら2人の元残留孤児が舞台から切々と訴えた。

をしっかりと受け止めていく構成。作者自身の目と耳と足を駆使して現地の風土を、一歩ずつ確かめていく展開は、口当たりの良い歴史解釈が束になってもかなわない、百聞に勝る発見に満ちている」というのが受賞の理由だ。

## 嗚呼 満蒙開拓団

この映画は、中国大連に生まれ、戦後岩波映画で記録映画の演出、脚本に携わった羽田澄江さんが撮った作品。2009年度文化庁文化記録映画大賞などを受賞している。「数十年も故郷に帰れなかった満蒙開拓団民の人々の思い

をしっかりと受け止めていく構成。作者自身の目と耳と足を駆使して現地の風土を、一歩ずつ確かめていく展開は、口当たりの良い歴史解釈が束になってもかなわない、百聞に勝る発見に満ちている」というのが受賞の理由だ。

自分で生きていこうとした。しかしその土地は、もともとそこに住んでいた中国人から取り上げた土地。そういう事情は一切知らされず、ただひたすらお国と家族のために彼らは満州へ渡って行って、働いた。

この映画は、開拓団がなぜ送られたか、どんな悲劇をたどったのか。今まで知らされてこなかった歴史の事実が元孤児たちの証言と現地取材の

開拓団の人たちが頼みにしていた満州軍はその時はすでに南へ撤退し、ソ連の南下を防ぐために江河にかかる橋まで破壊したという。開拓団を見捨てた、見殺しにしたのだ。映画のなかの証言にもあるが、開拓団の人が役人や軍の関係者に乗せたトラックや汽車に手をかけると、その手を振り払って去って行った、という。



茨城大学地域総合  
研究所客員研究員

### 先崎 千尋さん

【略歴】1942年那珂市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。農協職員、瓜連町長、ひたちなか農協代表理事専務などを経て現在、特定非営利活動法人有機農業推進協会理事長、茨城大学地域総合研究所客員研究員。著書に『農協に明日はあるか』『ほしいも百年百話』など。

記録によって克明に描かれている。悲劇は敗戦間際の8月9日にソ連が日本に宣戦を布告し、北部満州に進撃してきたことから始まる。ソ連国境近くに多く置かれた開拓団は、表面

きは開拓であっても国のねらいは安上がりの軍隊、「一人間トーチカ」だった。ぎりぎりの時に渡満し、ソ連軍が入ってきた時に荷物が届いた家族。逃げまどうさなか、苦渋

の選択で子どもを置いてきた母親。その場に歩けなくなつた祖母を置き去りにした人。開拓団の人たちが頼みにしていた満州軍はその時はすでに南へ撤退し、ソ連の南下を防ぐために江河にかかる橋まで破壊したという。開拓団を見捨てた、見殺しにしたのだ。映画のなかの証言にもあるが、開拓団の人が役人や軍の関係者に乗せたトラックや汽車に手をかけると、その手を振り払って去って行った、という。

## 560名のお客様を迎えて

～黒部市での「嗚呼 満蒙開拓団」上映報告～

鮫沢 祐二

黒部市国際文化センターコラーレは1995年（平成7年）11月3日文化の日に富山県黒部市にオープンしました。今年が開館15年目となります。

コラーレでは開館当初より黒部市出身で岩波ホール総支配人の高野悦子氏に企画・構成をお願いしている「世界の名画を見る会」という自主事業を継続的に開催し、岩波ホールで上映された世界の名画を北陸のコラーレでも上映し、富山県を中心に隣県の皆様にもお越しいただいている企画です。上映前には高野悦子氏や上映作品の監督自身による作品にまつわるお話も講演会や対談という形で伺え、作品の内容や監督の情熱がより伝わり易く好評を得ています。今回の「世界の名画を見る会『嗚呼 満蒙開拓団』」で31回目の上映となります。

今回の羽田澄子氏演出「嗚呼 満蒙開拓団」との出会いは高野悦子氏からの1本の電話からでした。高野氏からはコラーレ側の意向も尊重していただき「嗚呼 満蒙開拓団」ともう1本の海外の候補作品を提示されましたが、地元富山県にも満蒙開拓団として満州に渡られた方々が多く、県内に日中友好協会が14団体もあることから即答させていただきました。

また、羽田澄子氏演出作品との出会いは2003年1月の「世界の名画を見る会『平塚らいてうの生涯』」であったこともあり、主催者としては上映会当日が楽しみでした。テレビ・ラジオやチラシ・広報誌の宣伝効果もあり、「世界の名画を見る会『嗚呼 満蒙開拓団』」には560人のお客様をお迎えすることができました。上映前には羽田澄子監督による「『嗚呼 満蒙開拓団』この映画から思うこと」と題した講演会も開催しました。実際に開拓団として現地で生活されてきた方々や、そのご家族や親戚の方々等、60代から80代のお客様にたくさんお越しいただきました。

ここで「嗚呼 満蒙開拓団」のお客様から寄せられたアンケートの一部を抜粋させていただきます。今回の上映会の報告とさせていただきます。また、今回の上映会ができたことを主催者として大変光栄に思います。高野悦子様、羽田澄子様、大竹洋子様、日中友好協会の皆様、方正友好交流の会、そしてお世話いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

以下はアンケートの抜粋です。

- ・「満蒙開拓団に行っていたので上映されたことはほとんど経験し、感慨深かった。」
- ・「良き映画を作って下さり、ありがとうございます。若い世代に受け継がれることを祈ります。」
- ・「両親からポツポツ聞いていたことが、この映画に語られていて涙が止まりませんでした。」
- ・「戦後生まれです。昭和2年生まれ之母から満州へ行った方々の悲劇を少しだけ聞い

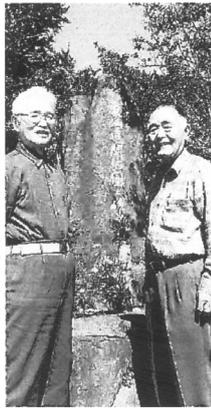
ていました。映像で見ることができて良かったです。ありがとうございました。」

- ・「93歳の祖母が開拓団にいたそうです。先日、その話を直接聞いたばかりで今日の映画も胸に迫るものがありました。会場には若い人をあまり見かけませんでしたが、私が知ることを友人や妹たちに知らせていきたいです。ありがとうございました。」
- ・「もっと沢山の場にて上映して下さい。子どもたちにも命の大切さを知るきっかけにして欲しい。本日は感動しました。」

(さめさわ・ゆうじ：財団法人黒部市国際文化センター事務局長。1995年、黒部市国際文化センター職員として採用され、主に舞台、照明、市民参画による運営に携わる。2006年、事務局長になり現在に至る)

# 満蒙開拓団の証言上映

## 22日 益田の元入植者団体主催



記念碑の前で往時を振り返る松永さん（左）と加藤さん（益田市美術館で）

戦前の国策により中国東北部に入植し、終戦前後の混乱で多数の犠牲者を出した「満蒙開拓団」を取材した映画が22日、益田市の県芸術文化センター「グラントワ」小ホールで上映される。同市美都町から入植、現地で多くの仲間を亡くした「大頂子東仙道開拓団の証を守る会」が主催。「悲惨な過去を知り、平和の尊さを考えて」と呼びかけている。

### 「平和の尊さを考えて」

体験者の証言を集めた「平和の尊さを考えて」の形で1943年から、移動ドキュメンタリー作品「嗚呼、満蒙開拓団」(2008年、製作・自由工房)。全国で上映会が開かれていたが、元開拓団員らによる主催はまれという。満蒙開拓団は、国内の入植者や口飽和解決などを目的に、1931年から旧満州・内蒙古地区に送られた移民。終戦までに約27万人が入植し、ソ連軍侵攻や、戦後の逃避行の中で8万人以上が犠牲になったとされる。大頂子東仙道開拓団は、当時の東仙道村から分村す

る形で1943年から、移動ドキュメンタリー作品「嗚呼、満蒙開拓団」(2008年、製作・自由工房)。全国で上映会が開かれていたが、元開拓団員らによる主催はまれという。満蒙開拓団は、国内の入植者や口飽和解決などを目的に、1931年から旧満州・内蒙古地区に送られた移民。終戦までに約27万人が入植し、ソ連軍侵攻や、戦後の逃避行の中で8万人以上が犠牲になったとされる。大頂子東仙道開拓団は、当時の東仙道村から分村す

た悲劇を知る人は少ない。語り継ぐために映画は大きな方になる」と期待する。上映は午後2時半、7時から2回。チケットは500円で高校生以下無料。問い合わせは加藤さん(0856・527064)。

2010年10月17日付け 読売新聞朝刊島根県版



8月の益田市訪中墓参団。方正県政府前。前列中央が外事弁公室王偉新主任、その左が加藤重幸氏さん、右が松永正さん。後列中央が2月の松江上映会で奔走された加藤尚子さんだ。

## 成功裡に終わった『嗚呼 満蒙開拓団』自主上映会

—「大頂子東仙道開拓団の証<sup>あかし</sup>を守る会」が益田市内外に呼びかけて開催—

加藤 重幸

前略ごめんください。

暫らくは電話による応答で失礼しましたが、このほど計画しました映画会が盛会裏に終了することが出来ましたので、ご報告いたします。

当日は気温も 20 度をこし快晴でした。そのため会場のある市街地外からの出足がよく 2 時半の上映予定時間より 2 時間も前から続々来場され、午後の部に 300 人強が夜の部にも 150 人を超す観客を迎えることができました。

当初から私はチケット入場者 400 人無料入場者 100 人を見込んで計画していました。しかし最も期待していた中学・高校生は一人も来てくれませんでした。ショックでした。市内の高校 4 校は私が直接訪問しポスターとチラシ数十枚と同封しています「開拓団と東仙道村」のチラシも添えて生徒たちに宣伝してもらおうようお願いしたのに誰一人理解してくれませんでした。中学は東仙道と真砂の学校に高校と同じようなお願いもしたのですが駄目でした。子供たちには何で興味を示さないのか寂しい、情けない気持ちを今も持ち続けています。

愚痴はこれくらいにして、当日は小ホール前のホアイエ一杯に 150 枚の写真をはじめこれまでに東仙道開拓団関係の各社(朝日・読売・毎日・山陰中央)の新聞記事の抜粋や開拓団が満州開拓で使用していた農機具などの写真と略図・「満洲開拓民入植図」と現在の 700 万分の 1 の中国(昭文社)の地図を並べて紹介等々をパネルに貼り付けて展示しました。

また折角の機会ですから、七三一部隊記念館、偽満洲皇宮、9・18 記念館、旅順関係訪問時の写真も添えました。

そして映画会の資料として、①自由工房が PR 用にパンフレットから抜粋されたもの、②大類先生から送られた「日本人公墓を知っていますか、③参考消息、④「中国に存在する『日本人公墓』が問いかけるもの」⑤「ノモンハン戦争の跡地を訪ねて」と私が前に作成した「満州開拓と東仙道村」をビニール袋に入れ、映画「嗚呼満蒙開拓団」アンケート用紙を添えて来場者に配布しました。

アンケートについては約 260 人の方から回答をいただきました現在集計中です。(他事ながらこの報告書作成中私の家内の母が突然他界しましたので分析も中断していますので手間取っています)

資料は 750 部用意しましたので、大類様から提供いただき残りしましたものを「星火方正」の販売残数返却に添えてお送りしますので、良かったらご使用ください。

何はともあれこの映画上映会は私としては大成功だったと自負しています。

他の市町村で行われている自主上映会場の様子は全く分かりませんが、送出自治体を巻き込み、入館料 500 円を設定したことで自由工房や関係者の方々にご迷惑をおかけしたのかも知れませんが、私たち「大頂子東仙道開拓団の証を守る会」が少なくとも現益田市民

に県内唯一の分村開拓団として送出され、大きな犠牲を強いられまた悲惨な体験をしながら生還できた皆さんたちのことを語り継ぐことは本当に大変なことです。それをやろうとしても500人もの人たちに知ってもらうには何年も何十年もかかるか知れません。正にこの映画をつくって頂いて私たちにそれを活用させて頂いたことに感謝しています。

この映画会開催に当たりまして、大類様には格別のご支援ご協力いただきましたこと厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

早々

平成22年11月3日

方正友好交流の会

大類善啓様

島根県益田市

「大頂子東仙道開拓団の証を守る会」 加藤重幸



写真上は、会場に設けられたパネル展示風景。下写真は上映会場風景だ。

## 益田市での上映会アンケート集計 感想記述

### 午後の部

- 1、義勇軍とは年齢的にもかけはなれて居て、、、、、、が多い 85歳男性 美都町
- 2、シベリア抑留などソ連は非常に卑怯なことをしてきた、もっとそのことを国際的に知ってもらわなければならないと思います。親戚の人が北鮮や満洲から引き揚げたりシベリア抑留を経験しています。 60歳代女性 益田市
- 3、映画をありがとうございました。 57歳男性 美都町
- 4、歴史の史実の上に今の平和があることを忘れないでいたい。若い人にも見る機会を与えてほしい。ありがとうございました。 73歳女性 益田市
- 5、平和を保つ為集団安保が必要なのでは。 79歳男性 北九州市
- 6、兄がソ連で亡くなっているので感動した。 70歳女性 神田町
- 7、企画された方々に心から拍手を送ります、ご成功の試みだと思います、ありがとうございました。 74歳女性 益田市
- 8、平和を大切に本当の意味の平和希う。 70歳男性 美都町
- 9、生還者及び遺族は当時を忘れ得ない、しかし歳月の経過と共に記憶が薄らぐ、これを後世に伝承し恒久平和の実現が帰らぬ同胞に対する我々に課せられた使命である。  
年齢等すべて不明
- 10、このような悲惨な歴史事実を戦後久しく語られていなかったことと、日本の戦後の問題に連なる、、、、、、。 69歳男性 遠田町
- 11、時間の関係で最後まで見れなかったのが残念。 68歳男性 益田市
- 12、悲しくて見るのが辛かったです。 86歳女性 益田市
- 13、義勇軍の一員として志願したけれど14歳と5ヶ月で入隊、仕様和20年3月1日出て行った、、、、の渡満の出来なかったことが、今日のこの中にいさせてもらう、ありがたいことです。 80歳男子 津和野町
- 14、若い者に見せたい。 69歳男性 益田市
- 15、もっと若い人に見せるべき、中学生とか高校生等。 73歳女性 益田市
- 16、あの方達は大変な生活を送られたことに頭が下がります。 73歳女性 益田市
- 17、心が痛み涙があふれました。 76歳女性 遠田町
- 18、二度と戦争はあってはならないことです。年寄り、女、子供がギセイになるだけ、今も戦争の練習してるなんて(米軍・自衛隊)国民はどうしてこのことを考えないのだろうか。 65歳女性 高津町
- 19、戦中を生きてきたので実態がよく分って悲惨さが痛いほど分ります。 85歳女 美都
- 20、かつて悲惨なことがあったというよりも、日本の国のあり方を見つめていかねばと思った。 75歳女性 高津
- 21、広く日本の人に伝えることが必要と感じました、二度とない世界であってほしいです。 71歳男性 戸田町

- 22、開拓団のご苦労知っていたつもりでしたが、切実に身につまされる心地です。現在の生活を見直さなければと反省します。国・軍部の当時が土地拡張国勢広める為だと思います。中国の養父母の暖かい親切、日本人も考える必要があると思います。  
91歳女性 益田市
- 23、日本の政府が引き起こした戦争でこうゆう悲劇が起きたのだから、二度と戦争はしてはいけないと思います。  
58歳男性 遠田町
- 24、時に昔のことに帰るのは良いことだと思われた。  
71歳男性 高津
- 25、地元の問題でもあるこの事実を次の世代、そして一人でも多くの人たちに伝える必要があると思いました。  
40歳男性 益田市
- 26、戦争は決してしてはいけない事をあらためて感じた。  
女性 遠田町
- 27、戦争は絶対いけない、ギセイになるのは弱者だ、はがゆい。  
70歳女性 美都町
- 28、改めて平和を作ることの大切さを思います、日本国政府の政策の無謀さを思う。  
65歳男性 大田市
- 29 今の平和な生活をさせてもらって本当にすまないと思いました。  
72歳女性 美都町
- 30、このような機会をつくっていただき本当にありがとうございました。  
38歳女 東町
- 31、平和運動に努力していきたい。映画上映実行委員会に深謝。  
63歳男性 遠田町
- 32、東仙道の方の映画で欲しかった。  
64歳男性 神田町
- 33、改めて自分を見直す時を得ました。現在の平和と幸せを  
女性 益田市
- 34、これだけの取材はすごいと思った。平和を大切にしたい。  
50歳女性 市内
- 35、本当に悲しいことだったと思います。  
81歳女性 ...
- 36、資料がとても参考になった。  
72歳男性 益田市
- 37、開拓団の敗戦による逃避行に伴う数々の証言の記録、よく証言されたし大切にしたい。そして補償もしっかり考えていきたい。それがこの証言を大切にすることになるだろう。方正公墓をはじめ知り、中国の配慮に感謝したい。  
81歳男子 益田市
- 38、沢山の人のギセイにより平和であることを忘れずに次世代に伝える必要があると思います。  
78歳女性 西平原町
- 39、胸が痛みました。何時の時代も為政者は責任を重く捉えきちんと責任を取らねばと思います。この平和は沢山の犠牲者の下にあることを忘れてはいけません。特に若い世代は知るべき歴史の事実です。  
69歳女性 幸町
- 40、どんな仕事をしていたか知りたかった。母の弟は元気で帰りました(21歳頃)。三年前に亡くなりました、映画を見せたかった。  
女性 七尾町
- 41、国は慰霊碑や公墓を建てるような政策—棄民政策を子供たちに教えるべきだ。  
60歳男子 益田市
- 42、この事実を風化させることなく、後々伝え平和の尊さを知らせて貰いたいです。自分の子を殺すなど異常な状況は戦争の極限状況で起きることです。絶対にあってはならないことだと思います。  
76歳女性 幸町
- 43、このフィルム是非図書館か美都振興センター等にDVDにして希望者に公開できるように

- にして欲しい。 78歳男性 久城町
- 44、当時を思い起し涙を流しました。次回も出席したいです。 不明 山口市
- 45、今回の映画で行かれた方のご苦勞がいかに大変だったか改めて感じました。今の平和を崩すことのないよう、深く心にしみました。 68歳女性 益田市
- 46、国は国策でありながら、多方面で責任が取れてないのに改めて腹がたつ思いです。 64歳女性 土井町
- 47、小生の1・2年先輩で義勇隊員となった人が居た。 78歳男性 乙吉町
- 48、時間的なこともあるが、もっと若い人に多く見て欲しい。 69歳男性 東町
- 49、忘れてはならないことである、語り継がれることを願う。 70歳女性 山口市
- 50、この映画を見させて頂いたお陰で私も6月に撫順・方正・七三一部隊に行きました。ありがとうございました。 69歳女性 松江市古志原
- 51、満洲依蘭県島根報国農場に入隊、終戦後帰国、今日の映画感無量 86歳男性 高津

## 夜の部

- 1、今の平和を大切にすること 53歳男性 中須
- 2、この悲惨な事実を忘れてはいけない、この映画会を教えて下さった加藤さんありがとう。 70歳男性 あげぼの町
- 3、国の責任のなさが情けなく思った、国家権力の恐ろしさを感じた。 62歳女性 西平原
- 4、父親が経験者です、昨年84歳で死去。 54歳男性 益田市
- 5、歴史の事実を知らされて改めて自由と平和を希求します。 79歳女性 高津
- 6、政府の無責任さは今も変わらない。 、、歳 益田市
- 7、今は亡き父が真砂開拓団で行っていました。父を思い大変だったんだと思いました。 67歳女性 久々茂町
- 8、私の父は恥ながら離団者の26名に入っている娘ですが、この映画を見て何故日本政府がこのような政策を行ったか、ご苦勞された方亡くなられた方を思うと胸が痛みます。 69歳女性 益田市
- 9、映画を見て今の平和を大切にすることが良く分かりました。 58歳女性 津和野町
- 10、改めて今の平和に感謝したいと思いました。 62歳女性 遠田町
- 11、戦争は絶対あってはならない。 、、、歳女性 須子町
- 12、世界平和のためにできることをやっていきたい。 71歳男子 須子町
- 13、政府の開拓団に対する補償。中国の育ての親の人民に考え方と一方の怒り(日本が悪いこともあるが)。二度と戦争を起してはならない。もっと国民どうし心を通じた付き合いが出来ないものか(日本も海外に出ざるを得ないが相手国の気持ちの尊重を) 62歳男性 幸町
- 14、今平和の世の中に感謝します。 63歳女性 益田市
- 15、私も朝鮮からの引揚者です。心に響く作品でした。 77歳男性 幸町
- 16、平和こそ使命とする人々を期待する。 96歳男性 益田市

17、人殺し・物盗り・武器には武器では絶対に自らも亡びることにつながる。トラブルは話し合いで恒久平和を希求する。軍隊のない国も世界の中に数カ国存する。

71歳男性 益田市

18、知らなかったでは許されない。そのような思いがした。

38歳男性 木部町

19、先祖のうち二人が兵隊で戦死している為大変興味を持っていました。今回のように戦争以外の視点からその悲惨さを問いかける活動は大変意義のあることだと思います。年輩の方が多くいらっしゃってました。一工夫必要かと思いますが若い世代にも伝えて頂きたいと思います。

39歳男性 さいたま市

20、子どもを置き去りにしなければならなかった親の気持ちは、たまらなく辛いなと思いました。国策で連れて行かれたことがはっきり分りショックでした、今の国のあり方はどうなのでしょう、憲法9条をちゃんと守らねばなりません。

40歳女性 益田市

21、二度とこの様がないことを願います。

、、、歳女性 あげぼの町

22、こうゆう歴史の事実をもっと知る機会を持ってもらいたいです。

52歳女性 益田市

23、私たちは平和な時代に生きていますがそれは多くの人々のギセイの元にあるのだと思いい知らされました。

57歳女性 益田市

24、小中学生に見せたい内容でした、加害者であったという視点が少ないのが残念でした。

47歳男性 益田市

25、どんな国でも国は人を殺させ、殺す力を持っていることを知ることだと思います。そこにほんろうされることが戦争の悲惨さ、地獄なのだと思います。その国をどうかそうした力をチェックすることが一番です。

59歳男性 益田市

26、実際の惨さは大変なものだったと思う、国策でこんな目にあつたのだから国はもっとしっかりすべきだ。国を動かすのは国民なのだから一人ひとりが自分の意見をしっかり持たなければならないと思う。そのためにはどんな事実があつたのかを知らなければならぬ。ありがとうございました。

62歳女性 益田市

27、ありがとうございました。よかったですよ。

52歳男性 東町

28、歴史の事実は重い。

69歳男性 益田市

29、国は国民をだましてはいけない。国民はだまされてはいけない。

74歳女性 高津

30、仙道の皆さんの苦勞もいかばかりかと思われませんが、もう少し仙道や真砂の皆さんの様子があるのかと思った。

72歳男性 高津

31、自分も満洲で生まれたが父が満鉄に勤めていたので優遇されていたことを始めて知った。一度生まれた所を訪ねてみたいと思っていましたが、開拓団の方々の悲惨さを知り物見遊山で訪ねることは恥ずかしいと思いました。

64歳女性 益田市

以上

註 美濃郡東仙道村→美濃郡美都町(S29)→益田市(H16)→現在

美濃郡真砂村→益田市(S30)→現在

# 慰霊の夏

益田市から旧満州へ

語り継ぐ  
思い

①

晴れ渡った空、さわやかな大陸の「方正」に近づくと高速道路両側の風を受けながら益田市訪中墓参 側に延々と広がるトウモロコシの団（加藤重幸団長ら10人）を乗せたバスは1日、中国・黒竜江省の省都ハルビンの市街地を出て走り続けた。東へ約185キロ。目的地は「また戻ってきたなあ」という感覚です。当時はもっと荒れ地が



開拓団が入植した「大頂子地区」のあった双発村で、村民ら（左側）から話を聞く松永正さん（右から4人目）ら墓参団＝2日、黒竜江省依蘭県



開拓団当時の松永正さん＝1943年10月、依蘭県馬家溝

# 開拓団 悲劇の記憶

多かった。景色も全く変わってしまっただけだ……。67年前、益田市美都町の旧東仙道村から旧満州に送り込まれた開拓団の一員だった松永正さん(82)＝同市桂平町＝は車窓の向こうをじっと見つめた。

松永さんらにとって方正県は「悲劇の地」。1945年8月、ソ連軍が国境を越えて侵襲したため、三江省（現・黒竜江省）依蘭県に入植していた開拓団は敗戦前日の同14日に避難を始め、たどり着いたのが方正だった。松永さんら男性は軍隊に召集され、開拓団に残っていたのは高齢者や女性、子どもばかり。

「栄養失調で小さい子どもは泣き声も出なくなり、冷たくなった」「収容所の東、4、5キロの山中には亡くなった顔見知りの人たちなど、日本人の遺体が一面に放り出されていた」。開拓団員や家族らは別の開拓団の人たちと方正県内で冬を越したが、飢えや病などで次々と倒れていったことを松永さんは帰国後、知った。

旧満州で亡くなった開拓民ら5

## 繰り返さぬための使命

千人近い人たちが葬られている方正県の「方正地区日本人公墓」。墓参団の団員らは木立に囲まれた墓の前で花を手向け、線香の煙がなびく中で、並んで手を合わせた。

敗戦後、ソ連軍の捕虜となり栄養失調で牡丹江市の病院に入院した松永さんには忘れられることのない光景がある。出雲出身の45歳ごろの補充兵が、親子ほどの差がある20代の古参兵4人に病室で囲まれ「お前それでも軍人か。訛りをたたき直してやる」と言われ、復唱させられていた。

旧東仙道村の開拓団

旧満州にもう一つの村（分村）をつくる計画で、旧東仙道村の「大頂子（だいてんす）東仙道開拓団」がハルビンから東北東約300キロにある依蘭県の「大頂子地区」に入植した。1943年1月に先遣隊が出発、45年5月までに1388人（家族や途中離団者含む）が入ったが、ソ連軍侵襲や敗戦の混乱の中で置き去りにされた。高齢者や女性、子どもは依蘭から方正へ逃げたが、飢えや病などで半数近い65人が帰国できずに亡くなった。

戦時中、国策で益田市美都町の旧東仙道村から旧満州（中国東北部）に送り込まれた開拓団。敗戦の混乱の中、帰国できずに亡くなった多くの人を慰霊するため、益田市訪中墓参団が7月31日から今年7日、旧満州を訪ねた。終戦から65年。元開拓団員らの高齢化で今回が最後となる墓参に同行し、開拓団の悲劇の歴史と向き合おうとする人々取材した。（野中一郎）



# 慰霊の夏

益田市から旧満州へ

語り継ぐ  
思い

㊦

「戦後65年、家族は誰も来られなかったが、やっとお参りする事ができました。ただ安らかに眠ってほしいと願うばかりです。浜田市三隅町の花田弘子さん(72)は1日、開拓団で犠牲となった人たちが眠る中国・黒竜江省方正県の「日本人公墓」の前で目を潤ませた。

1943年、直二郎さんは村幹部から頼まれ、団長として35歳で旧満州へ。45年8月、軍隊に召集され、シベリア抑留を経て47年に帰国したが、開拓団に残された妻と三男は方正で死亡。次男は中国人に引き取られ、行方がわからなくなった。

直二郎さんはふだん、戦争や開拓団のことは口に出さなかった。でも弘子さんは中国残留孤児の肉親捜しを伝えるテレビ番組を食い入るように見詰めていた姿を覚えていた。「声をかけても返事をしなかった。やっぱり置いてきた子

のことが忘れられんのだなあと思



故花田直二郎さん

小学2年生の時に終戦となった弘子さんに直接の戦争体験はないが、学校校庭にはジャガイモやサ

ツマイモが植えられ、勤労奉仕で田を耕した。夜は空襲に備え、家の明かりが漏れないよう灯火管制が敷かれていた。



# 伝える 家族として

「時の権力からお国のため、村のためとすかされて開拓地へ送り込まれた善良な男女老幼たち。敗戦難民時、無残な犠牲となり果て、北満の荒野に屍をさらした。戦争の悲惨を二度とくり返してはならない。」  
直二郎さんが83年に開拓団の記録をまとめた本「大頂子東仙道

## 祖父のたどった「足跡」

「祖父は戦争をしたくて行った訳ではないのに巻き込まれてしまった。満州に家族を残したまま召集され、別れも言えなかった悔しさを伝えなかったのだと思う。」  
直美さんは持つてきた祖父の本を母と一緒に日本人公墓の前に供え、目を閉じた。  
「世の中の人の記憶から開拓団の悲劇が忘れ去られていくのを私個人が止めるのは難しいかもしれない。けど今回で終わりにするのはなく、家族として受け継ぎ伝えていきたい。」

故花田直二郎さんがまとめた本を「日本人公墓」の前に供える花田弘子さん(手前)と直美さん(1日、黒竜江省方正県)

# 忘れてはいけな



「日本人公墓」に千羽鶴をかける加藤尚子さん(奥)＝1日、黒竜江省方正県

## 慰霊の夏

益田市から旧満州へ

語り継ぐ  
思い

①

旧満州(現中国東北部)で亡く  
なつた開拓団員らが眠る中国・黒  
竜江省方正県の「日本人公墓」で  
幸团长ら10人)。その中に赤や

黄、青、緑など、ひとときわ色鮮やかな千羽鶴を墓石にかける松江市大庭町の加藤尚子さん(71)の姿があった。  
旧満州へ開拓団を送り出した益田市美都町の旧東仙道村とは縁がなかつた尚子さんが墓参団への参加を決めたきっかけは、開拓団の悲劇を描いた1本の記録映画「嗚

## 平和の願い つながる心

呼ぶ。満蒙開拓団(羽田澄子監督)だった。  
人権問題を考えるため毎年、映画上映や講演会の開催などを続けている尚子さんらのグループが、今年2月に松江市内での映画を上映した。そのことを知った墓参団団長の重幸さんが益田市でも上映会を開きたいと連絡を取り、「よかつたら一緒に旧満州へ行きませんか」と手紙で誘った。  
「国策で中国の広大な大地に送り込まれ、犠牲となつた開拓団員たちがいたことを忘れてはいけな」と映画を見て改めて思った」と話す尚子さん。原点は幼心に体験した戦争の記憶だ。疎開先の宇都宮市郊外で、空襲で真っ赤に燃える市街地の空を見た。「あのとき戦争はいけななんだ」と思った。  
1987年から県立大東高校(雲南市大東町)で美術の非常勤講師をしていた当時、同僚で日本史を教えていた浜田孝志さんから、前身の大東高等女学校の生徒らが45年4月、皇国農村学徒報(国隊として三江省(現黒竜江省)依蘭県にあった島根県報國農場に送り込まれたことも聞いていた。  
「開拓団の悲劇は身近にあったことなんだ。映画の舞台となつた旧満州に自分の身を置いて考えた」。墓参には友人2人にも声をかけて加わつた。戦時中、中国・河北省張家口で暮らした松江市玉湯町の平松百代さん(71)は、張家口から屋根のない無蓋貨車にぎゅうぎゅう詰めとなつて北京まで逃げた体験がある。大連から引き揚げてきた同市浜乃木、豊永瞳さん(68)は、満州の奥地から避難してきた女性が「途中で川に子どもを投げ捨ててきた」と泣き崩れる姿を覚えている。  
現在、同市内の私立高校で美術の非常勤講師を務める尚子さんは、開拓団の話聞いて休み時間に千羽鶴を折るのを手伝ってくれた生徒らに「平和を願うみんなの気持ちを伝えてくるわね」と告げた。「墓参に参加し、多くの開拓民が亡くなつた事実を五感で感じた。こんな歴史があつたということと子どもたちにも伝えていきたい」  
(この連載は野中一郎が担当しました)

## みんなの家主催『嗚呼 満蒙開拓団』上映後の感想

- ・ 真実です。
- ・ 歴史の一断面が正しく記録された映画だと思いました。
- ・ ドキュメンタリー映画、事実ですね。戦後 65 年、まだ終わっていないと思いました。
- ・ 国の責任なのか、政府の責任なのか、映画の中での肉声は本物だと思います。厳しい生活を強いられた戦後の日々は、本当に考えられないご苦労だったと思います。
- ・ 方正の場所とそこでの出来事を知り、感動しました。歴史を知ることは絶対に必要だと思います。とても良い時間でした。この映画を子供達（中高生）に是非、見せてほしいと強く思いました。
- ・ 多くの犠牲の上にある今の平和を大切にしたい。政権争いばかりでなく、政治家に見せたい映画でした。
- ・ 私達、戦争体験者から見ると、ある一部分と感じました。映画よりもっと酷い、表現ができないような体験を致しました。
- ・ 証言映像集で、こういうのも「映画」というのか疑問でした。俳優が当時のことを演じている映画が良かったです。『妹 ～中国残留孤児を捜して～』とか『脱出 開拓団全滅の記録』という本を読んでも、悲惨さが分かります。
- ・ 「お国のため」のひとつで、こんなにもむごい人生を強いられた方々がいることに、胸がつぶれる思いでした。戦争は絶対にイヤです。平和を大切にするために、私は努力したい。もう、「国家が、云々」などと言う政治家の言葉には騙されません。
- ・ 当時は渡満できぬもどかしさに苛立ったりしましたが、映画を観て、「あー、満州へ渡らなくて良かった」と思いました。渡満していたら、言葉も風習も分からず、生きられるかどうかかも知れないことでしょう。
- ・ 戦争中、小学 1 年生だった私ですが、防空壕に避難した記憶や、サイレンが鳴って学校から逃げ帰った記憶があります。でも、この映画を観て、私が想像する以上の、戦争の恐ろしさ・残酷さを感じました。今、のほほんと日々過ごしている自分達、これで良いのだろうかと思わせられました。
- ・ 国策によって満蒙開拓団に駆り出され、関東軍及び国に捨て置かれてしまった母子、その責任を取ろうともせずに捨て置いてきたこと。中国の人々が幼い命を救ってきたことを知りました。戦争をしてはいけない、軍国主義国家にしてはいけないと思いました。
- ・ 私の実姉家族も終戦直前に満州より帰国したので、本当に心に深く感銘致し、自分自身

が逃げているようでした。この苦しみは誰の責任かをつくづく思います。

- ・養父養母のことを思って墓に参るところが印象的です。中国での、一部の人かも知れないけど、考え方が大きい、心が広いと感じられました。日本人の中にも良い仕事をした人がいたことを知って、ホッとしました。
- ・終戦間際になってまでも、開拓団を送り込むなど、国家の為すことの理不尽さを思った。沖縄にしろ、開拓団の逃避行にしろ、国によって他人が被った被害の大きさ。
- ・皆様の勇気と、ご奮闘に心から感謝しております。
- ・私は泣いてしまいました。
- ・想像以上の時代でした。次の世代に平和のありがたさを伝えたい。
- ・だいたいのは知っておりましたが、詳しいことが分かり、感謝致します。昔(昭和 19 年)、小学校高等科 2 年 (現中学 2 年) の子供達の少年開拓義勇軍への勧めの訓練に、少しですが参加したことで、ずっと心が痛んでおりました。益々、深く感じます。
- ・戦争を忘れがちになる日常に、忘れてはいけないと、良い機会でした。
- ・過去にこんな悲劇があったことを、初めて知ることができた。
- ・昭和 40~45 年、東京で生活をしていた時に、日中友好に関わったことを思い出しながら観ていました。学生時代にこの映画を観ていたら、活動もまた異なっていたのかな…。私の友人 (新潟在住) は、今も日中友好に力を入れています。
- ・この企画をして下さってありがとうございます。いろいろなことが詰め込まれていて、考えると大変です。中国人とか日本人とかというより、人間愛で行動している人達に感動しました。
- ・開拓団の人達には、頭が下がります。今日の映画を観ることができて、本当に良かったと思います。

### 戦争体験ミニトークの感想

- ・戦争は絶対にしてはいけません。皆で平和を守りたい。
- ・とても悲しい出来事を思い出させて、かわいそうだったが、語らなければ分からないので、話をしてもらって良かった。
- ・国策とはいえ、生死を決められ大変でした。戦争は絶対してはならないと思います。御身大切に長生きして下さい。
- ・まさに生き証人ですね。いくら話しても、話尽くされないことでしょう。ご苦労様でした。

- ・お二人とも、家族にも語れない苦しい心の中の思いを話されたことに、感謝します。
- ・何のための開拓団だったのか。人に話すこともできない体験をされたことに、心が痛みます。戦争とはいったい何なのか。人間が人間でなくなってしまうのでしょうか。
- ・昔のご自分の体験を、多くの人々に、時間の許す限り、語り継いで頂きたいと思います。ありがとうございました。
- ・何とか生きようと思っても、尋常では生きられぬ地獄のような状態から生き延びてこられた方々のお話。悲惨な様子を聞いて、戦争がどんなに残酷なものであるか。今日のお二人のお話は、ほんの一部であって、開拓団にまだまだ多くの方々がおられたことを考えさせられます。
- ・体験を語ろうという気持ちになって下さったことに感謝します。辛い経験を思い出し、伝えなければと考えて下さり、この会が大変有意義になりました。お二人とも、お元気で、良き日々を過ごしてほしいです。「平和を守ろう」という力強い言葉に感動しました。
- ・長い間、語れなかった体験談をありがとうございました。本当に、二度と戦争はしてはいけないと、強く思いました。
- ・お二人のお話、よく理解出来ました。日本は絶対に戦争はしてはいけません。
- ・国から見捨てられ、広い広野を家族と共に帰国をと、一筋に歩かれたご苦勞。察するに涙、胸が詰まります。
- ・菊池良三さんは一般開拓団と思いますが、ご苦勞様でした。浅賀俊之さんはハルピンの渡辺中隊で、何かと街に近い所の訓練所で過ごしたことと思いますが、終戦後、よく元気で帰られたと思います。本当にご苦勞様でした。

### 満州に住んでいたたり兵隊で行ったりしたお身内の方はいますか

- ・私の主人は13年前に亡くなりましたが、兵隊で満州にいた時の話、特に寒かった話をよくしてくれました。指が凍傷になり、人差し指の爪がだめになっていました。夏は満人のスイカ畑で訓練をし、満人が追いかけてきても日本兵は知らん顔で荒らし回ったとか、かわいそうだったとか。それから昭和20年の暖かくなった頃に、新しい軍服を着せられて、北から南へ行くべく船に乗り、これで最後と思ったそうです。九州を下り、潜水艦がいっぱいで、そこで沖縄戦に向かうことを知らされたとのこと。通信兵でそうこうしているうちに終戦で、持って帰ってきた物は「飯合」「貯金通帳」「靴下」。初年兵は貯金を下せなかったそうで、「俺は国に貸しがある。一銭も国からもらっていない。ただで働

いた。」と言っておりました。戦後の国民年金だけ。今、官僚の人達のことを思うと、主人が生きた若い頃がかわいそうです。

- ・母は単身で大連に行き、外国の商社で働き、昭和23年にトランク一つで帰国しました。何も聞かなかったし、何も語らずに亡くなりましたが、辛かったことが偲ばれて、映画の間中、涙が流れました。
- ・私は最後の義勇軍で、内原訓練所に入所し、東京第37中隊の第一小隊長でした。なかなか渡満できず、広島の西條訓練所にいる時に原爆に遭い、終戦となり、丸麦を塩で炒ったものを軍足に詰め、それをかじりながら、東京へ帰ってきました。
- ・私は義勇隊関東軍体験者です。
- ・私は第四次義勇隊開拓団員でした。終戦時のことを思うと、何ともやるせない気持ちでいっぱいです。
- ・私の義兄は職業軍人らしく実姉と写真見合いをし、満州に行き、子ども3人を連れて無事に帰国しました。満州での生活は、写真を見ると、義兄は軍服とサーベルで威張っており、姉や子供は奥様・坊っちゃんというような感じで、内地の人より恵まれていたようです。
- ・近くにおりますが、あまり話したがりません。
- ・叔母一家、いところが満州から引き揚げましたが、これほど酷いとは思いませんでした。幼児二人を亡くしています。

## 方正日本人公墓に眠る日本人開拓団や日本兵の人達へのメッセージ

- ・私も間もなく近くに参ります。どうか安らかにお眠りください。
- ・安らかにお眠り下さい。
- ・平和を心から希望します。
- ・無事、帰国されたご家族様の、今後のお幸せをお祈り致します。
- ・戦争を起こさせてはいけません。日本国憲法を守り、前進発展させたいと思います。
- ・皆様のご苦勞、そして、命を落とされたむごい戦争という事実、亡くなった人々のこと、決して忘れてはならないと、強く感じました。今、のほほんと暮らしている私達は、本当にこれで良いのか。現在の日本という国のあり様を考えると、恥ずかしく申し訳なく思われます。今日の映画をもっと多くの人に観てほしいと感じました。しかし、個人として何をしていったら良いのか…。

- ・満蒙の大地に、夢と希望を抱きながら、家族をも連れていかれ、苦しみの果てに亡くなられた方々に、何と言って良いのか分かりません。せめて、並みの言葉ですが、安らかにどうぞ、としか言えません。
- ・世界平和
- ・平和について考える人が増えていくようにと願います。
- ・長い間、ご苦労さまです。心から感謝御礼申し上げます。
- ・長い間、大変なご苦労だったことでしょう。私達は、なんと幸せなことか。どうか、安らかにお眠り下さい。
- ・歴史に翻弄された人々に、心から手を合わせたいと思います。
- ・今の平和を孫に手渡す努力をします。開拓団で亡くなられた方々の命を、無駄に葬り去るようなことはしません。

NPO法人みんなの家 主催  
映画『嗚呼 満蒙開拓団』上映会

鑑賞後のアンケートのまとめ

■平成 22 年 5 月 15 日 松崎町環境改善センター 1 階ホール

参加人数 102 人

■平成 22 年 5 月 16 日 西伊豆町中央公民館 3 階ホール

参加人数 63 人

■NPO法人みんなの家：静岡県賀茂郡西伊豆町中 745-3

## 日中船舶衝突事件から何を学ぶか

服部 健治

9月7日に尖閣諸島（中国では釣魚島）周辺での海上保安庁の巡視船に対する中国漁船の追突事件に端を発した一連の事態は、中国との付き合いを再考させる深刻な衝撃を与えた。短期間で端的にあぶりだされたことは、脆弱な日中関係の本質だ。特に対抗処置として中国政府が打ち出したレアアースの対日輸出差し止めは、対中ビジネスの練り直しを迫るものであった。

中国人船長の逮捕抑留からフジタ社員の最後の1名が解放されるまでの騒動、続く中国内陸部で頻発した反日デモ、さらに海上保安庁撮影のビデオ映像が11月5日にインターネット上に流失、と事態は混沌とし、日中双方の政権内の確執にまで飛び火してきた。日本ではビデオ流出の実行者が海上保安庁職員であったがゆえに、国家公務員の秘守義務や国民の知る権利といった問題まで発展してきた。嘆かわしいことは、日中首脳の間をかけた十分な会談がいまだ実現していないことだ。

今回の問題から何か教訓をくみ上げてみたい。とりわけ中国ビジネスの最前線にいる日本の企業家がどうすればいいか考えてみたい。

まず今回の衝突は偶発だったと思うが、近年尖閣周辺に多数の中国漁船が押し寄せる実情では中国側にも「未必の故意」はあった。つまり事件の偶然性は必然性の時間軸で起こったわけで根本解決がないわけだから、将来も発生する確率が高い。それゆえ中国と係わるビジネスをする者にとっては、「カントリーリスク」の必然性を再度認識する必要がある。

次に主権侵犯をめぐる“予想外”と“想定外”の齟齬が顕在化した。中国側は“予想外”の日本側の動きに直面した。即ち日本側は船を捕捉しても、従来通りすぐに退去させるとふんでいたところ、「国内法」（公務執行妨害）で処分すると決め、さらに前原外相の強硬発言（中国はヒステリーなど）と民主党の“粛々”対応も“予想外”だった。

日本側も“想定外”だった。中国側が外交以外の分野にまで揺さぶりをかけてきたこと、船長釈放後の「謝罪と賠償」の要求、フジタ職員1名を継続して拘束したことなどである。

中国政府が従来にない強硬な対応を見せた理由は何か。中国にとって日中関係で譲れない原則は3つあると考える。それは「3つのT」と呼称する。「Taiwan」（台湾問題への干渉）、「Territory」（尖閣諸島の領有）、「Textbook」（教科書問題＝歴史認識）の三大問題だ。歴史認識に関して日中戦争を侵略でない、南京虐殺はないなどといえ、中国人の感情を傷つける問題に直結するが、損得の実害はない。実際、小泉総理の靖国神社参拝では“政冷経熱”という状況で経済活動は維持された。しかし、領土、台湾は失うか失わないかの実利にかかわる問題であり、歴史認識の感情レベルの問題でない。これまでインド、旧ソ連、ベトナム、フィリピン等との国境紛争では中国は武力発動も辞さなかった。尖閣領有は主権にかかわる原則問題とみなし、外交攻勢のみならず政治、経済、文化、芸能など民

間交流までストップさせてきた。そのためレアアース輸出も影響を受けた。

第3に日中双方とも結果的に損をした。日本政府首脳は、外交分野以外の交流事業まで波及させる中国側の“想定外”の展開に狼狽し、日本は圧力を加えれば引き下がるとみられ、“外交的敗北”とまで揶揄された。また外交上の考慮ということで、中国人船長を処分保留にした検察庁は“外交一元化”の原則を侵害したことになるし、民主党政権が「指揮権発動」まがいの政治圧力をかけたのではないかと非難も高まった。

中国にとっては、強硬な対応が裏目に出て、ASEANはじめ世界で「中国脅威論」の再来を招く契機となった。米国も尖閣諸島は安保条約の範囲内であると言い出したことは中国にとって不利だ。さらに今回のことで民間交流まで止めたことは、中国に理解を示そうとする多くの親中派の日本人が中国嫌いになってしまった。周恩来時代以来、民間交流を重視するのは、中国の伝統的なきめ細かい外交戦術であったが、2年前北京オリンピックの聖火リレーを守ろうと傍若無人にも巨大な中国国旗を振りかざして長野住民の輦蹙をかけたのと同じ事態になってしまった。そのうえ一党独裁に対する明白な“ノー”を貫く劉曉波氏のノーベル平和賞受賞は、嫌中を加速させた。

だが、10数年前と比べて明確に中国のほうが、日本よりバーゲニング・パワーの強大さと持ち駒数は増大している。日本経済が中国に依存しているのはその証左だ。中国は国連の常任理事国であり、政治的影響力を保持し、軍事、経済力、外貨保有、そして観光団、民間交流まで左右できる。今後中国がさらに強大になることは間違いない。じたばたしても仕方がない。そこで日本はいかにたくさんのバーゲニング・パワーを堅持しておくかである。より高度の先端技術、モノ作り、ファッション、アニメ、建築などのソフトパワー。誰も中国から学ぼうとしないけど、日本からは学ぼうとする清潔、安全、礼節の社会システム。数年先に中国の空母が出現することを見込んで、尖閣諸島の実効支配のため日本も海軍力の増強が急がれる。「実効支配」もバーゲニング・パワーのひとつであり、それゆえ“主権棚上げ・共同開発”などの提案も可能となる。

中国は敵ではなく友人だが、率直に言って味方ではない。また、共産党政権と中国国民は区分すべきだ。中国共産党は歴史上日本との戦いの中で成長してきた。残念ながら体内には反日・抗日・嫌日のDNAが根底にあることを絶対に忘れてはならない。とくにマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、並びに社会主義を国民が信奉しなくなった今日、政権維持の立脚点はナショナリズム（愛国主義）であり、必要以上に抗日戦争の戦果を鼓舞し、日本軍の残虐性をあおる反日教育が実施されてきた。愛情でなく憎しみで統治すれば、その政権は「ダモクレスの剣」だ。

他方、日中両国は地勢的に移転のできない関係であり、日中両民族は永遠の友好と平和の建設に邁進することだ。過去に日本は中国を侵略し、多くの災害をもたらしたので、一層民族間の友好には気を使うことである。同時に中国人の深層心理には、依然日本を懲らしめたいとする気持があること、「排外主義」の歴史的伝統も残存することを理解しなければならない（日貨排斥のスローガンはまさに義和団事件や1920～30年代と同じ）。これは

長い歴史と文化を持つ誇り高い民族が欧米列強・日本に圧迫されたことによる被害者意識の残影と羨望に起因する。「日中友好」の空念仏でなく、異文化交流の観点が大切である。

緊迫した時期こそ、日中関係は「理解・協力・信頼」の構築が主流であり、「対立、憎悪」は傍流であるとする、一段高い視角が求められている。

日中間の領土問題の根底には、明、清、並びに琉球王朝以来の古文書をどう判断するのか、並びに主権概念を規定した近代国際法をどう見るかといった根本問題が存在する。ただ、日中経済関係の高い相互補完性、緊密性を無視して、「領土問題」が解決しないとすべの日中交流関係は改善しないとす“入り口”に持ってきてはならない。

中国とビジネスをしている日本の企業家が、実際の対応として心しておくべきことは何か一例をあげてみる。

① 中国人と領土問題で議論しても感情論に陥るから避けること。しかし、東シナ海に石油資源が発見されてから中国が領有権を主張してきた事実などは率直に述べ、「異なった考えもあること」「相手の意見も尊重して聞いてみる」といったことを学ばせること。

② 中国人個人をいじめたり、中国人の店に投石したりする狭隘な国粋主義は反対すべきだ。中国大使館などに脅迫状や危険物を送りつける行為は糾弾すべきである。

③ 在中国の日系企業で働く中国人従業員には、わが社は中国の発展と人民の生活向上のために頑張っているのだと話し、後ろめたい気持ちにさせないこと。

(はっとり・けんじ、日中経済協会北京事務所副所長、愛知大学教授などを経て現在、中央大学大学院戦略経営研究科教授。中国駐在 11 年。昨年に続き今年も日中科学技術文化センターと本会が主催する「近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」に参加)

## 無神経な「拓魂」碑文と満洲開拓団

宮下 春男

### <拓魂慰霊祭>

毎年4月第2日曜日には、元満洲開拓団、元満洲義勇隊開拓団、元満蒙開拓義勇軍（隊）訓練中隊、元満洲の農業開拓に何らかの係わりを持った人々、団員や隊員だった人々、その家族や関係者が、全国から東京都多摩市連光寺の“拓魂公苑”に集まってくる。拓魂公苑は京王線聖蹟桜ヶ丘駅近くにあり、新宿駅から京王線準特急で約30分、聖蹟桜ヶ丘駅からバスに乗換え約15分で着く。バスを降りて緩い坂道を進行方向へ40メートル程歩くと三叉路の右側が公苑で、その奥に「拓魂」と彫られた石碑が置かれている。その両側には卒塔婆とも思える各団碑が林立している。碑文によれば173基が各団等により建立されたとのことである。この日に集い、かの満洲で犠牲となった人々の霊を偲び慰めるためにはるばるとやって来た方達である。

平成22(2010)年4月11日(日)は4月の第2日曜日。私は新宿駅9時11分発の京王線準特急に乗った。目的は聖蹟桜ヶ丘、正確には多摩市連光寺にある「拓魂」碑への慰霊参拝と、この日に全国から集う人々に会うためである。午前10時頃公苑に着くと、既に三々五々、人々が各々の団碑の前に塊のように集い、線香、花や清酒等供え物を捧げ、その前で満洲の地で亡くなったかつての仲間、親兄弟の霊を偲び、かつ参拝者お互いの久闊を叙す姿が広い苑内のあちこちに色々な輪を形作っていた。11時を過ぎる頃にはさしもの苑内は人で溢れるばかり、幸い晴天に恵まれ団碑の前にシートを広げてくつろぐ場面もあった。また、来苑者は元青少年義勇隊関係者を除くと当事者である1世は少なく、子の世代、中には孫を連れた人もいて、3世代あるいは4世代に亘ってこの慰霊祭に集まった人達であった。

しかし、道路から苑内に入る通路は鎖が掛けられたままで、人々はその脇から入って行った。私も鎖を跨ぐことをしないで脇から入ったのだが、何故か寂しい気がした。公苑の奥には公苑の由来を書いた碑がある。

### <拓魂公苑>

先ず「拓魂」と書かれた碑である。裏側には「満洲開拓殉難之碑、昭和38年4月、加藤完治書」とある。この人の名は満洲開拓に関心のある方で知らない人はあるまい。満洲開拓の父とも言われ、満蒙の農業開拓を推進した先駆者であり、また茨城県で私立高等学校を運営しながら、特に“内原訓練所”と言われた、青少年を満蒙開拓に送り出すための基礎訓練を行う訓練所を運営したことでも知られている。

拓魂公苑の由来は「拓魂」碑の左奥に建立されている碑の上段に刻まれたこの碑文をお読みいただければ一目で理解されよう。

#### 満洲開拓殉難者之碑建設の由来

この碑は 満蒙の眩野に無惨に散った八万の開拓者と その人々を守りつつ自らも逝った関係者多数の御霊が合祀してあります

昭和七年(一九三二年)はじめられた満洲の開拓事業は 満蒙の天地に 世界に比類なき民族協和の平和村建設と 祖国の防衛という高い日本民族の理想を実現するために 重大国策として 時の政府により行われたものであります

凍土をおこし 黒土を耕し 三十万の開拓農民は 日夜 祖国の運命を想いながら 黙々と開拓の鋤を振りました 然し その理想の達せられんとした昭和二十年の夏 思わざる祖国の敗戦により 血と汗の建設は一瞬にして崩れ去り 八万余の拓士と関係者は 満蒙の夏草の中に露と消えていきました

そして そこには未だ一輪の花も供えられたことはないのです

ここに同志相図り 水清きこの多摩川の丘に一碑を建て 祖国と民族のために 雄々しく不屈の開拓を闘い抜き そして散っていった亡きこれらの人々の御霊をお祀りすると共に 再びかかる悲しみのおこることなき世界の平和の実現を心からお祈りせんとするものです

昭和三十八年八月

建設委員長 安井 謙

公苑は昭和 33 年に満洲開拓殉難者之碑建設委員会が設置され、多摩市聖蹟櫻ヶ丘の一角に土地を求め碑が建立された。昭和 38 年 8 月には盛大な除幕式が挙行され、以後毎年 4 月第 2 日曜日を拓魂慰霊の日と定めて、毎年執り行われてきた。38 年から参加している人の話では、初期の頃には苑内に入りきれない程に多くの参加者があったという。時が過ぎるとともに高齢化し、参列者が減少して行った。その後の公苑運営については、これも経緯を説明した碑文が下段にあるのでこれも原文を紹介する。

上掲の由来文にもあるように、非業に斃れた満洲開拓犠牲者の御霊を祀るべく、関係者相図り、昭和三十二年に国や全国都道府県の強力なご支援と、内閣総理大臣や各国务大臣を歴任された方々など多くの有識者のご理解とご協力のもと、満洲開拓殉難者之碑建設委員会(委員長安井誠一郎東京都知事)が発足し、その後、跡を継いだ実弟の安井謙氏(後の参議院議長)を筆頭とする建設委員各位の並々ならぬご尽力によって、同三十八年ようやく満洲開拓に所縁のある景勝の地、ここ聖蹟櫻ヶ丘の一角を選定して土地を取得し、その中央に拓魂碑を建立、同年八月十日に除幕式が執り行われました。

さらにその後、碑の周囲を取り巻くように、関係者それぞれが在満当時所属していた開拓団ごとの団碑の建立も逐次行われ、その総数百七十三基を数えるに至り 現在見られるような拓魂公苑に整備されました。

爾来三十有余年、全国拓友協会と拓魂碑奉賛会の共催のもとに、桜花爛漫の四月の第二日曜日を「拓魂祭」の例祭日と定め、毎年毎年全国津々浦々から集い来る老若男女の数はたとえ荒天風雨の日となるも 1,000 名を下ることはなく、各々がこの拓魂碑及び各団碑の前にぬかずき、香を焚き花を捧げ、在りし日の肉親縁者や同志を偲ぶ慰霊の行事を続けて今日に至りました。

いま、私ども満洲開拓関係者の最大の悲願は、この公苑と拓魂碑等の永久護持にあります。そのための方途として、この度理解ある関係各位のご尽力と、東京都知事のご英断により、これらを都有施設としてお引き受け戴くとともに、爾後の維持管理

をもお願いすることとなりました。

それに伴い、ここに全国拓友協会の所有にかかる公苑敷地一六二一㎡及び樹木、拓魂碑団碑等の一切を東京都に寄付することと致しました。

拓魂よ永遠なれと念じつつ

平成十三年一月吉日

社団法人 全国拓友協会

会長

戸谷義次

建立以来 38 年にして、自己運営でなく東京都へ管理を移管する為に、公苑とその施設一切を都に寄付したのである。平成 22 年は建立されてから 47 年、都に移管されてから 9 年、流石に苑内は雑草や枯枝等が掃除され管理されていたが、日曜日とは言え、例祭日にも拘わらず入り口は鎖が掛けられたままであった。都の主催ではなく縁故者が自主的に行っているという解釈なのだろうか。公苑に隣接して都立桜ヶ丘公園がり、近くには公園管理事務所も存在している。

私が参加した慰霊祭風景は平成 20 年からであって、参拝者の方のお話では平成 18 年までは共同の拓魂祭が開かれていたとのことであった。たまたま、(社)全国拓友協会を探すためにHPを開いていたら「多摩ニュータウンタイムス」が出て来て第 42 回拓魂祭(2004, H16 年)の催しを報じており、写真では拓魂碑の後ろに幔幕が張られ、碑を背に挨拶する姿があり、それを取り巻く大勢の人の輪があり、テントも張られている様子が映し出されていた。

平成 22 年の例祭日は 20 数団の関係者、凡そ 150 人程の参加者であった。12 時を過ぎると何時の間にか人の気配が薄れ、上野駅に出てパーティを開くという方もいた。午後 1 時の苑内は酒を酌み交わしている 2～3 のグループ以外は静になっていた。

私は改めて団碑を参観した。団碑の順序は入植順或いは都道府県順などではなく、建立について有志が一致した順番に建立されたのだろうか。碑は圧倒的に義勇隊開拓団又は義勇軍(隊)の団碑が占めていた。一般開拓団は 40 数碑であり、避難途上で多くの犠牲者を出した開拓団では第 1 3 次興安東京荏原開拓団(東京送出)、第 6 次黒咀子開拓団(石川、富山)、第 4 次哈達河開拓団(全国混成)、第 8 次韓家開拓団等の碑があった。県単位の碑もあり、また、弔いの碑文の団碑もあった。

団碑には、倒伏防止のために鉄パイプが団碑の上部に廻らされており、如何にも情のない無機質を感じた。自由参拝になった途端に公苑入口の鎖も外さず、まるで余人立ち入るべからずと言っているようであり、団碑に巡らされた錆びたパイプは刹那的で無神経であり切ない気持ちにさせられた。崖側の下には民家が接近しており、倒立防止の為にはやむを得ない措置なのだろうが、情のない、それでも管理してやっているという表示なのだろうか。

#### <満洲開拓団の入植布置>

私は、参拝者がいなくなった苑内 170 数基の各団碑を巡りながら、拓魂碑やこのような団碑が建立された由来に思いを巡らせていた。何故、満洲開拓団が僅か 13 年間に 27 万人から 32 万人にも及ぶ大量の移民がなされたのか。何故、全国 47 都道府県全てから満洲開拓団が組織され送り出されていたのか。何故、満洲在留邦人の犠牲者の半数近い 8 万人が

開拓団員とその家族なのか不思議であった。碑文を読むと「世界に比類なき民族協和の平和村建設と、祖国防衛という高い理想を実現する為に重大国策として時の政府により行われたものであります」。とあり、祖国防衛とは何を意味しているのか碑文を眺めながら考え、ふと思いついた節が脳裏に浮かんだ。

2. 26 事件後に成立した広田内閣は、昭和 11 年 8 月に七大国策の一として「満洲農業移民 20 万年 100 万戸移住計画」を策定したが、これも関東軍が策定した計画を日本政府の国策として後追いで定め大量の移民を行っていたのだ。随意でないため、全国から限なく送り込まれたこともうなずける。また、農業開拓団なのだから未開の僻地なのは仕様が無いのかと思っていたのだが、忘れもしない 2008 年 12 月 5 日に国会図書館を訪ねて満洲開拓団関係の資料を漁っていた。そして「満洲開拓年鑑 康徳 11 年(1944 年)刊」の復刻版を手にし、そこで「各種開拓民の配分配置」なる文章に出会った。開拓第一線地帯、開拓第二線地帯及び開拓第三線地帯！！「開拓第一線地帯」とは、間島省より牡丹江、東安、三江、黒河、興安北省及び興安南省をいい、主として第一線皇軍に対する兵站基地、労力、軍馬、兵力の給源、宿営拠点を指し、開拓民の十分の四を配置する。」と記述されていた。

さらに色々な資料を読んでいる中で、満洲国政府の開拓総局長を勤め、敗戦時には東満総省（東安省と牡丹江省を合併）の省長であった五十子巻三が「満洲開拓政策の三大目標は国防の強化、農産の増産、民族協和であったと思う」とし、その中で特に国防に関して「満洲開拓民はどんな点で日満共同国防の強化に貢献したか」というと、第一線の国境付近の開拓地は第一線軍の兵站基地—敵方への進出路、宿舍、食糧飼料労力車馬等の給源として役立つ—として、第二線主として小興安嶺から横道河子、鏡泊湖あたりを繋いだ線の内側の開拓地は、匪民分離の拠点として、そうして第三線即ちその他広く全満の開拓地は農産増産の基地、民族協和の場として役立つということであった」（ああ満洲・国づくり産業開発者の手記 p647）と述べている。これは開拓団を関東軍の兵站基地・輜重兵と化す何ものでもない。＜輜重＞、大辞林によれば、輜は衣類を載せる車、重は荷を乗せる車の意。さらに旧陸軍で、前線に輸送・補給する食糧・被服・武器・弾薬などの軍需品の総称とある。輜重兵とはこれらを運ぶ兵隊のことである。何ということか満洲開拓団員は満洲国境で農地に固定した関東軍の輜重兵の役割を果たさせられていたのである。

満洲開拓団はそもそも武装移民団として送り込まれた経緯はあるが、それはまだ治安が安定していないからが理由と私は考えていた。しかし、防衛庁防衛研修所戦史室による「関東軍<2>」において「満洲国における居留民については、他の支那及び南方面と異なり国策に基づく開拓団という存在があり、その少なからざるものは関東軍の指導により国境に入植し、交通線の維持確保・生産・補給など兵站に一役も二役も買っていた。しかも根こそぎ動員において、そのうち兵役に堪える壮年層は殆ど召集され、さらに青少年義勇隊員 12,000 名も倉庫警備及び勤労奉仕に従事し、残る大部分は老幼婦女という団が少なくなかった」（p 353）。と満洲開拓年鑑や五十子氏の説を裏付けている。これが祖国防衛という文言で表された事由なのだろうか。

### < 関東軍の北辺振興政策 >

ならば、関東軍が何時、開拓団を兵站基地や輜重兵にしようとしたのか。「満洲国史・総論編」によれば北辺振興については、少なくとも“支那事変”が勃発した 1937 年頃からであろうとしている。中国本土での戦局は当初の不拡大方針とは逆に燎原の火のように燃え広がり（日本軍が際限なく拡大した）、国際連盟を脱退したことにより、対外的には孤立化へと追い込まれていった。窮余の策がドイツ等との三国同盟、日ソ中立条約などであるが、関東軍はこれまでの作戦方針を変更し、日満一体となった防衛線を確保すべき必要に迫られ、防衛戦を満ソ国境においた。このため関東軍は大・小興安嶺、完達山脈の外側に配置されることになったが、自然環境劣悪のため、兵力の機動不便かつ後方の補給困難の状況であり、この隘路打開のため軍は満洲国、満鉄の協力が不可欠となった。政治上からは産業開発 5 ヶ年計画により、総体的には向上したが、地域差が大きく、鉄道沿線地帯は急速に発展したが、奥地は行政の浸透力も弱まり、殆ど放置状態のところが多くなかった。東北部国境方面では原住民が国境観念に乏しく、満ソ間を自由に往来しており、これらを是正し行政浸透と民心把握・安定が緊急の課題であった。さらに経済上からは多数の軍隊が国境方面に配置されると、その補給が大仕事であった。例えば日本軍に不可欠の米の補給は、北辺の寒冷地では現地調達が難しく、これを内鮮からの輸入に頼ると軍事輸送に支障をきたす。これを解決するには現地自給体制をとる以外に方法はなく、そのため開拓政策の推進、建設資材の生産工場配置等の措置が必要となってきた。と「満洲国史」は記述している。

関東軍は 1938（昭和 13）年 12 月、「国境方面における国防的建設に関する要望事項」を策定した。その要領で述べている重点的形勢地域は正に「開拓第一線地帯」に一致している（満洲国史総論編 p657）。これらのことから類推すれば、1939（昭和 14）年頃からは意図して開拓第一線である国境地帯に開拓団が入植させられていたのであろう。しかも日本政府の策定した 20 ヶ年、100 万戸の開拓団の移住入植は、昭和 14 年頃から急増しており、団数においては昭和 14 年に集団 40、分散 23、計 63 団、昭和 15 年には集団 64、集合 56、分散 12、計 132 団、昭和 16 年には集団 44、集合 32、分散 4、この年から義勇隊開拓団 68 が入植し、合計 148 団と急増しているが、関東軍の意のままに国境方面に配置され、銃器で武装させられていたのだ。これが祖国防衛の実態だったのだ。

### < 開拓第一線地帯入植開拓団の犠牲者 >

敗戦時、国境の開拓第一線地帯に入植した開拓団はどうだったか。東安、間島、牡丹江、三江、黒河、興安北及び興安南の各省には開拓史等に基づく筆者のラフな推計では在籍者約 95,900 人で全満入植者の 39.8%であり、配置 40%と合致する。うち死亡者約 29,800 人で在籍者の 31%となる。未引揚者が約 15,800 人あり満蒙終戦史の前例により、その内約 60%が死亡者とするると死亡者の合計は 39,280 人となり在籍者の 41%である。全開拓団員在籍者 27 万人中死者 8 万人（29.6%）に比し、41%は極めて高い死亡率である。この中には義勇隊開拓団員も含まれ、義開団員は青年で独身者が多く避難行動が比較的容易であったことなどから、幼い子供を抱えた団員家族の犠牲は相対的に高いことが考えられるため、

数字以上に偏差がある筈だ。いずれにしても満洲開拓団の中にあつて国境第一線地帯に配置された開拓団は敗戦時には如何に過酷な状況であつたかを物語っている。

満洲開拓団は原住民の土地を収奪して入植したと非難され、侵略の先棒を担いだとして忘れ去れようとしている。しかし「満拓」と称する国策会社が事前に関取等を行い、殆どの開拓団員達は何も知らずに宛がわれた土地に入植したのだ。多くの開拓団は鉄道沿線から遠く、電気もないところで農耕に勤しんだのである。

最近、「昭和史の天皇 第6巻 昭和44年刊、読売新聞」を再度開いた。「満洲の田舎にいた日本人、つまり開拓団の人達がどんな目にあつたかについても触れておかねば片手落ちになる、それにこの人達は、世界移民史上かつて見ない悲惨な最期を遂げた人々だったのだから、なおさら省くわけにはいかない。もともと移民という言葉は、新天地を求めて海外に雄飛するロマンチックな夢や志望がひそむ反面、故郷を食い詰めて日本を出て行くといった暗い語感ももっている。しかし、満洲開拓団も、その移民には違いないが、ただの一攫千金的な熱に浮かれて出たものでもなければ、食い詰めた人たちの集団移動でもなく、ひたすらわが国策として送り出されてきたものだった、それだけに、その末路が一層あわれなのである」と。確かに前に述べたように全国47都道府県全てから、東京都や北海道も例外ではなく送り出しているのだ。

改めて考える。世界の移民史の中で、直接軍事目的の移民で全国の行政単位全てから移出させた事例があつたらうか。加えて27万人から32万人もの短期間・大量の集団移民は現地での、特に土地に絡む摩擦が大きいことは言うまでもないことなのだ。約5万人もの頼みの夫や父は召集されて不在。加えて関東軍の防衛視点から原住民の強制立退き・特定部落への強制的集約等。僅か13年間。恨みを持った原住民本人・当事者が健在だった。ソ連軍が侵攻する前から各方面軍司令部等は軒並み後退しており、戦闘最中の8月10日~12日にかけて戦闘部隊の前線からの転進・撤退が命令されていた。そして敗戦。天地逆転。22万人もの逃避。略奪・暴行、飢え・寒さ・伝染病。退避避難中の犠牲者1万2,000人、都市部に收容されても窓や扉を破壊された寒風吹きすさぶ学校等、飢え、酷寒30度に達する寒さ、栄養失調による病気・伝染病等による死者6万8,000人、合計犠牲者8万人。農民である移住者の36%もの犠牲者。何たることか。

「拓魂」、あの碑文は満洲開拓を推進した者が書くものだったのだろうか。慰霊祭当日の公苑の鎖掛けのままの入り口。あの錆びた鉄パイプで縛られた団碑、昨21年は他に所用があつて参加できなかったが、平成20年にお会いし話を伺った阿城大谷団の方は90歳を過ぎていらしたが今年はお見えではなかった。静に減少しつつある参拝者。拓魂碑の存在がひっそりと忘れ去られようとしているのではないか。私は“物言わぬ農民”を見た思ひだつた。満洲開拓団員は祖国防衛のために犠牲となつたのだ。施設は東京都に寄付されたと言うが、もっと国民的に慰霊されてしかるべきでなかろうか。

(みやした・はるお：1936年富山県生まれ、1943年満洲開拓団員の家族として渡満、1953年帰国、1994年通商産業省（当時）を退職、宝飾業界等を経て現在無職。09年8月、方正友好交流の会主催の「歴史検証の旅」に参加。方正日本人公墓を参拝した)

# 『新潟県満州開拓史』を自費出版して

高橋 健 男

## 1 人を弔う

人はその人生を全うしたとき、名を刻して弔われる。手厚く葬られて墓所に入り、法要が重ねられる中で、愛する人・親族・関係者の心の中に生き続ける。これが世の常である。

しかし、戦争の時代には、おびただしい数の弔うことがかなわない「異常」や「非常」があった。死地さえ分からない。「西太平洋にて」の兵士の死亡公報は、愛する人に死者がどこに眠っているかを伝えることはない。長かるべき生身の“生”を無残に断ち切れ、人間一代の歴史を未完のまま抹殺されたその人の“生”を、詳しく知る術はない。

「弔う」とは、その場におもむき死者を見舞うことであるという。突然の死を迎えた人たちに対し、東南アジア、南方諸島やシベリアの奥地に少しく墓地や慰霊の碑があるという。遺骨収集団が訪れ、少なくない遺骨が拾い集められ弔われている。

ひるがえって満州開拓民殉難者について見ると、戦後日中間で「遺骨の収集は行わない」との申し合わせがなされたように聞く。そういえば「方正地区日本人公墓」に収容された遺骨は、方正県人民政府の手によって収集された（奥村正雄『天を恨み地を呪いました』等参照）。「麻山地区日本人公墓」にも、関係者の強い願いから慰霊・遺骨収集団が組まれ遺骨収集がなされたが、主だった遺骨は収集団が拾い集める前に、これも黒龍江省か現地の人民政府の手によって収集され、方正に墓も建っていたという。収集団は麻山谷に残る遺骨を探して拾い、そして公墓に収めたいらしい（中村雪子『麻山事件』、団史『麻山の夕日に心あそばさず』、『昭和57年年度哈達河会報』等参照）。

新京（現・長春）や奉天（現・瀋陽）の都市部まで避難し、それぞれの収容所で没した人たちは、収容所脇の空き地や公園の大きな穴に次々と運ばれたと、多くの手記にある。拙著出版後、「新京の収容所の位置が分からないか」とか、「身内が新香房で亡くなったというが、現地はどこで、今どうなっているか」など、関係者からの問い合わせが続いた。しかし、場所の特定はかなわない。西本願寺とか白菊小学校・室町小学校とか緑園地区とか、収容所の名前さえも分からないのである。

新香房は今の広大な農地のどこかに葬られていたのであろう。多々あった日本人墓地は戦後中国の都市化・開発によってビルの下であったり道路であったり、土地改良で造成された農地のどこかであったりする。いずれも墓標さえないかつての日本人墓地なのだが、そこは人を弔う場とはなっていない。

「弔う」とは「とぶら（訪）らう」こと、すなわち「問う」こと、「問い訪ねる」ことといわれる。「使者の枕辺に寄り添い、親しくその人の名を呼び、その声を聴く」ことであるという（村山常雄『シベリアに逝きし46300名を刻む』）。その意味で「方正地区日本人公墓」「中日友好園林」は、特に開拓団関係者にとって特異な存在である。

## 2 名を刻す

ある日、渡満家族（叔母夫妻）の養子となった弟二人の消息を求めて、ある老人が自宅を訪れた。戦後65年にして、何が何でも現地慰霊に出向きたいという。だが、その老人は叔母一家が加わった開拓団の名称も、弟たちがどこでどのように亡くなったのかも分からない。唯一の頼りは戸籍に記された一行の死亡証明だった。

その一行を見せてもらって驚いた。「麻山にて死亡」と記されている。老人はいつか「自決した」との話の聞いていた。二人の弟は麻山事件での死亡者である。哈達河開拓団には新潟県から20ないし21家族が入植していた。哈達河開拓団新潟部落についてはその概要、逃避行経路、麻山での自決などの詳細を私は承知しており、拙著にも記録済みであった。老人に地図を示しながら、第二人、昭和8年と10年生まれの正平、元也が養子となった東松治・キニ家族の最後に共に思いをはせた。

東家は一家して麻山の避難集団の中にいた。叔父は麻山の決死隊のひとりだった。新潟県庁に残る開拓団員名簿を調べる。叔母・キニの名があり、「麻山にて自決」と朱書きがあった。ところが、夫の名も、消息を知りたい第二人の名もそこにはなかった。「麻山地区日本人公墓」に収められた遺骨は400体を越すが、たぶんそこにも個人名は記録されていないのではないかと。弟の消息を求めていた小出公司さん（新潟市）は今秋、一人で哈達河と麻山、そして方正の地に立った。戦後65年にして念願がなかった。

元日本軍兵士の中には「無名戦士の墓」に眠る人も多い。死者ひとりひとりが“無名”であるはずがない。人は必ず名を持ち、その「名前のうしろには人生があり、個性があり、悲しみや痛みがある」（浅田次郎『終わらざる夏』）。それなのに、誰によってもその人の名が刻されていない。

シベリア抑留死亡者4万6千人強の名を刻した村山常雄さん（糸魚川市）は、自身も4年間のシベリア抑留体験者である。ロシアから返還された抑留者名簿には、名前がカタカナ表記の上に、ロシア人の耳に響いた日本語は実名とは異なる表記に、あるいは同一人物名が重複して見出された。旧厚生省もその個人名を整理していない。村山常雄さんは10年に及ぶ調査で、知りえたすべてのシベリア抑留死亡者の個人名を漢字に直し、その名を刻した。しかしなお、約1万人の死者については何の情報も得られないという。

旧満州への慰霊の旅に二度同行させてもらった吉泉昭雄さん（横浜市、羽田澄子監督の「嗚呼満蒙開拓団」に登場）は、方正で妹二人を失った。依蘭付近の馬太屯開拓団からいっしょに方正まで避難していた吉泉昭雄さん（当時17歳）は、そこに名は刻されていないかもしれないが、妹の没した地、没した様子は克明に覚えている。だから、その地で深く、静かに慰霊する吉泉昭雄さんの姿に接する。一方、小出公司さんのように亡くなった弟の名を刻した文書すら見出すことのできない人もいる。

各県で慰霊祭が営まれているが、満州開拓民殉難者名簿が整えられてこなかった理由は何であろうか？そしてそれは誰の手によってなされるべきだったのだろうか？

### 3 伝え残す

死者の名も刻されず、その人がどのような死を迎えたのかも分からない状況は、一人の人間の“生”を、“死”を、あたかもなかったような状況にしてしまう。家族の心にはいつまでも残るが、公的には抹殺されているかのようである。

満州開拓団個々の入植地での様子、避難と殉難の様子についても同じことが言える。新潟県には残念ながら、県人開拓団全体を記録したものが戦後65年の間、編纂されることがなかった。いろいろ理由はあったのだが、新潟県は全国約半数の『〇〇県満州開拓史』がない県のひとつとなっていた（全国各県での編纂状況については『星火方正』第7号参照）。

そんな中、数年前に私は新潟県が送り出した全開拓団、全義勇隊の「実態調査表」ならびに開拓団員名簿を発見できた。作家の合田一道さんからは所持する「北満農民救済記録」

の中の新潟県開拓団記録をコピーしていただくことができた。これらにより『新潟県満州開拓史』の編纂が可能になった。

新潟県からは2戸、10数戸、あるいは20～50戸と参加した武装移民・試験移民期から第5次開拓団までが8開拓団(集団)、県単独編成の開拓団(集団・集合開拓団、分散・自由移民を含む)が第6次から第14次まで26開拓団、義勇隊は全国混成の第1次第2次に13中隊、県単独編成の第3次から第8次まで13中隊、合計60開拓団(集団)が渡満していた。その数約1万3,000人、全国第5位であった。

その全集団に関して関係者からの体験聴取を重ねた。県内外ならびに旧満州入植地等の関係地の調査に出向いた。記述の肉付けのためには欠かせない作業であったが、新潟県庁で「開拓団実態調査表」を閲覧・コピー入手する作業同様、編集終了までに足掛け6年の長い年月を要した。戦後65年の年にまとめ上げることができ、幸いに思う。8月9日、毎年、ソ連軍が満州に侵攻したこの日に行われる新潟県満州開拓民殉難者慰霊祭において、約5,000人の殉難の御霊に拙著を献納することができた。

拙著が新潟県において初の『満州開拓史』となったわけだが、その編集・執筆では以下の5点の特色を持たせた。

- ① 新潟県が送り出した満州開拓団・義勇隊開拓団(中隊)関係資料の発掘とその収録
- ② 各開拓団『団史』、関係者『手記』、戦後の親睦会の『会報』等の発掘とその活用
- ③ 関係者100余名を訪問しての体験談の聴取とその採録
- ④ 昭和20年までの地方紙記事の発掘とその参照
- ⑤ 開拓団殉難者慰霊碑の確認と碑文・写真の掲載
- ⑥ 満州開拓民引揚者の生活再建・戦後開拓の詳述

満州開拓団の記録は、その悲惨な逃避行ゆえにいわれる「引揚物」としてつづられることが多い。困苦・殉難は詳しく記録されるべきことであるが、開拓団入植から村づくり、生活の足跡も詳しく触れられるべきである。また、渡満を決意するにいたる当時の社会状況や各個人の事情も忘れてはならない。さらには、戦後帰りついた祖国・故郷でどのように迎えられたか、戦後新たに開拓に入った地での生活再建についても落とすことができない。それぞれがすべて生身の人の人生を語っているからである。

戦後開拓での生活再建は生やさしいものではなかった。緊急に斡旋された入植地が不良地であったり、1・2年であきらめなければならないような土地であったりした。不慣れがゆえの脱落者も出た。そこから海外への移住を選択した人もいた。一応の生活安定を得るまで、それらの人には30年、40年の月日が必要であった。満州開拓民を語るとき、その人の人生すべてをカバーする必要がある。

『新潟県満州開拓史』はB5版2段組、750ページの大部となった。現在の出版界事情からも内容が新潟県に特化したものであることから、自費出版とならざるを得ず、地元業者に依頼して完成した。著書は国会図書館ならびに近県県立図書館、新潟県内の各市町村中央図書館、大学図書館等に寄贈し、満州開拓団関係者ならびに関心をもつ人たちに読んでいただけるようにした。

# 講 評

第13回文化賞

2010年9月2日記者発表での各選考委員のコメントから抜粋(文責:編集部)

## 選考委員長

色川 大吉 (歴史家)

## 選考委員

鎌田 慧 (ルポライター)

中山 千夏 (作家)

土橋 寿 (日本自史学会会長)

秋林 哲也 (編集者)

小飯塚一也 (ライター)



応募総数641点のうち226点が第1次選考を突破し、うち64点が第2次選考を通過し入選。最終選考会で大賞、部門賞、特別賞、計10点が選ばれた。

## 部門賞

### 研究・評論部門



書名 満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける 13-8257-05

著者名 高橋健男 (新潟県)

発行社(者) 批評社 印刷所 理想社

サイズ 四六判 ページ数 370 発行日 2008.7.10 定価 3150円 HP登録済

内容紹介 満州開拓民に何が起きたのか、中国残留孤児はなぜ生まれたのか。日本敗戦後の中国黒龍江省方正で酷寒の越冬中に約5000人の避難民が斃れた。それらの人たちは今、中国国内唯一の「日本人公墓」に眠る。方正に集結した開拓団避難民のことを中心に据え、満州開拓民の困苦・悲惨を解き起こし、後世に伝える。

### 研究・評論部門

#### 『満州開拓民悲史』

一碑が、土塊が、語りかける—

高橋健男 (新潟県)

第2次選考を通過した研究・評論部門の入選作品10点の中から、高橋健男さん(新潟県)の『満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける—』を部門賞に選んだ。

高橋さんは1946年、戦後生まれの元教員で校長先生なども歴任された方。旧満州



についてはライターやカメラマン、当事者などいろんな方が書いているし、社会的にもいわゆる残留孤児や帰国された方々の悲話が伝わっており、今も残る問題だ。高橋さんは膨大な資料をほとんど網羅して、実際にいろんな開拓地に墓参団とともに訪れて取材をきちんとしている。訪問できなかったところも資料を読み込んで書いており、満州開拓についてのまとめという意味が大きい。聞き取りや撮影などもしっかりした労作だ。

ハルビン郊外の方正というところに中国人が日本人開拓団避難民受難者のために公墓を建てている。日本人は加害者として旧満州を侵略したわけだが、被害者である中国人が加害者の中の被害者、満州開拓団の犠牲者についての歴史も継承しようとしている。基本はもちろん日本による侵略だが、高橋さんが懸命に取材してきたなかに、双方が乗り越え、お互いに変ってきたという「歴史の時間」が反映している。

方正の公墓は最近公開された映画『嗚呼満蒙開拓団』(羽田澄子監督)にも出てくるが、高橋さんはもっといろんな地域を訪れて書かれており、貴重な仕事をされたことを評価したい。(鎌田 慧)



満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける—  
研究・評論部門賞

## 問題の根源を知り後世に伝える

高橋健男



戦後65年の今、戦後生まれの人が全人口の4分の3を占め、戦前・戦中のことは急速に忘れ去られようとしている。しかし満州開拓移民に起因するいくつかの問題は、現在の問題として今も引き続いている。私たちは問題の根源を知る必要がある。

私が満州開拓団関係の調査研究を始めて10年になる。この間、関係者の慰霊訪中への同行、慰霊・親睦の会への参加、個別の自宅訪問や文通により体験を聴取してきた。そしてこれらで知り得た歴史事実を著作と講演で後世に伝える活動をしている。

中国黒龍江省ハルビン市郊外の方正<sup>フワンチエン</sup>県に、中国人が日本人開拓団避難民殉難者のために建立した「方正地区日本人公墓<sup>ほうまさ</sup>」がある。中国国内唯一の日本人殉難者のための“おおやけ”の墓である。建立は日中国交樹立9年前のことで、文化大革命期にも紅衛兵による破壊から守られてきた。後年、「麻山地区日本人公墓<sup>まさん</sup>」や「中国養父母公墓」も建立された。だから今この地は開拓団関係者が必ず立ち寄る慰霊の地、日中友好の原点・象徴の地となっている。しかし、このことは日本国内ではほとんど知られていない。

「中日友好園林」として整備されている墓苑は、黒龍江省ならびに方正県人民政府が維持管理している。本来なら日本政府が責任を持つべきであろうが、支援は筆者も会員である「方正友好交流の会」をはじめとする民間団体や引揚関係者によって細々と続けられてきている。日本政府が支援金支出を決めたのは平成21年10月のことである。

『満州開拓民悲史』は、多くの開拓団避難民が酷寒の越冬生活を余儀なくされたここ方正の地に焦点を置き、そこに集結した避難民の逃避行や収容所生活の困苦、残留婦人の姿などを詳述した。

各種資料、現地訪問、関係者からの聞き取りにより、満州開拓民が陥った悲惨な状況を解き起こし、後世に伝えるものである。

## 読むほどに滲み出る悲嘆の情念

編集・発行者 佐藤英之 (批評社)

第13回日本自費出版文化賞の「研究・評論」部門で、『満州開拓民悲史』が受賞作品になったという吉報を、高橋健男さんからお知らせいただいた。この本は、本来、自費出版という形ではなく、オリジナル出版として刊行すべきだという想いが強かったので、版元としてはいささか恥じ入る感情と喜びが錯綜して素直に頷けなかった。戦争体験の伝承が希薄化していくなかで、国家の政策で満州開拓に動員された人たちの無念の想いが凝縮されて表現されているこの本は、読むほどに悲嘆の情念<sup>じび</sup>が滲み出て、落涙なしには読み進めない。高橋さんの誠実で実直なお人柄が偲ばれる秀逸な作品である。

本の刊行と相前後して羽田澄子さんの映画作品「嗚呼 満蒙開拓団<sup>あ あ まんもう</sup>」が全国上映され、また、高橋さんもかかわっておられる方正友好交流の会の会報「星火方正<sup>せいりか</sup>」や各地方紙で紹介されて幸運にも重版することができた。この本が若い人たちにも読まれることを祈念して止まない。

“瀋陽からニイハオ”

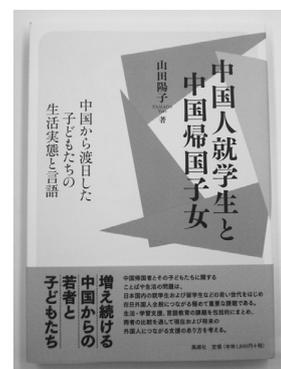
## 日本で『中国人就学生と中国帰国子女』を出版して

山田 陽子

2010年6月に日本で出版しました『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』という本についてご紹介させていただきます。

本書は、ヒトとモノの国際移動によるグローバル化が進展した日本で、どのように生活やことばの支援を行っていけばよいのかを言語教育の具体的な実践例から考えようとしたものです。

まず、日本の地域社会で生活する「中国人就学生」と「中国帰国子女」の生活実態を調べました。中国から日本に来た若者・子どもたちは何を思い、どんな生活をしているのでしょうか。中国からの渡日者は増加し続けていますが、私たちの身近に住んでいるにもかかわらず、かれらの生活ぶりは意外と知られていません。そこで、かれらの日本における生活実態を把握して、どのような支援が必要なのか、私たちに何ができるのか、現在および将来の外国人問題に生かせる施策とは何かを考えました。



本書の内容は長野県と愛知県での5年間にわたるフィールド調査（聞き取り調査、面接質問紙調査、史資料調査等）からの知見によるものです。長野県は周知のとおり満洲移民を多く送出したところですが、長野県の小さな村が実践した中国帰国子女教育から、外国にルーツをもつ子どもたちの支援に生かせる数々のヒントを得ることができました。ここでは、満洲引揚者が日中正常化以降に帰国した人たち（中国帰国者）に生活や言語の支援を行なっていました。

愛知県でのフィールド調査では、60数名の中国人就学生ひとりずつに聞き取りを行ない、日本語学校での学習と中国帰国子女教育の学習目的・学習方法・教育の担い手等を比較することで、中国人就学生にはどのような支援が望ましいのかを考えることができました。

本書は日本社会と中国社会を架橋する「若者・子ども」が主人公です。第Ⅱ部に登場する中国帰国子女は、「中国黒龍江省ハルビン市方正県」から渡日した子どもたちです。黒龍江省で私が実際に撮影した開拓団部落の写真も掲載しました。

私は2010年4月から中国遼寧省瀋陽市の東北大学（日本語学部）に赴任し、中国全土か

ら集まった大学生と大学院生に日本語科目と言語学を教えています。東北大学は、「張学良」が1920年代に築いた大学です。満洲（中国東北部）から帰ってきた人たち（満洲引揚者、中国帰国者）のことを勉強していた私が、まさか、満洲の中心都市であった瀋陽（奉天）に住む機会を与えられるとは思ってもみないことでした。

瀋陽に赴任して3カ月経った7月には、「瀋陽日本人会交流会」が開かれ、在瀋陽日本国総領事のご臨席のもとに約100名の在瀋陽日本人が集まりました。大学教員は私ひとりで、あとは日系企業の駐在員とご家族でした。アジア最大の重工業都市として知られる瀋陽だけに、電器会社、自動車タイヤ・モーター・ゴム製品・工業用ペンキ・電子部品製造、建築機械会社などの日系企業が進出しています。東北大学も日本の大学や企業と学術交流、技術提携などを積極的に展開しています。

9月には、東北大学主催の国際シンポジウムが開催されました。多くの日本人研究者が中国人研究者とともに研究成果を発表し議論しました。私も国際シンポジウムの運営補助や研究論文を通じて、日中両国の文化を比較する楽しさを味わいました。

東北大学から少し離れますが、黒龍江省の「方正日本人公墓」にはこれまで二度参りました。中国に日本人公墓があることは中国人大学生の誰も知りません。毎年多くの日本人が公墓を訪れていることを教室で話しますと、そのような草の根の日中友好交流が長年続いていることに、学生たちは驚愕するとともに深い興味をもって聞き入っていました。

厳しい風土の瀋陽で、中国人大学生にサポートしてもらいながら何とか生活をしています。日本の大学で中国人留学生を教えていた経験から、中国で日本語を学ぶ中国人大学生と日本の大学で日本語を学ぶ中国人留学生との違いも感じています。本書は、私が実際に働いてきた日本語教育現場のリアルなエッセンスがいっぱい詰まった本になりました。他にない調査データを豊富に掲載しました。インターネットで「中国人就学生と中国帰国子女」というタイトルを検索していただきますと、内容が詳細に出てまいりますので、ぜひご覧くださいますようお願い申し上げます。

書名 『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』

A 5版 220 頁、1800 円税別、風媒社 (Tel.052-331-0008)

(やまだようこ：中国遼寧省瀋陽市「東北大学」日本語学部教員)

## 養父母会ニュース

ハルピン市日本残留孤児養父母の会  
事務局長

石 金 楷

- ① 7月8日、上海テレビ・ニュースチャンネルの要請をうけ、養父母会のスタッフが「昔」番組のインタビューに答えました。当時の人の回想を通して、当時の養父母が曾ての恨みを忘れ、広い心で日本の残留孤児を育てた感動的な話を再現し、崇高な母性愛を讃え罪深い戦争を断罪しました。
- ② 7月27日から29日まで、映画『舞踊学部』（別名・中国のお母さん）演劇グループの招きで、養父母と一緒に青島へ行き、「中国第7回ハスの花賞」キャンパス舞踏コンテスト活動に参加しました。養母李淑蘭と石金楷秘書長は、主催の中国舞踊家協会に「感謝状」を贈呈し、まったく新しいスタイルで中国のお母さんの大きな胸の内を解き明かしたこと、独特の角度から戦争と平和の問題にアプローチされたことに対して、お祝いと感謝を表明しました。
- ③ 7月31日、8月1日、石金楷秘書長は黒竜江省社会科学院東北アジア研究所のお供をして方正県の調査活動に立ち会い、関係部門、スタッフと交流活動を行いました。
- ④ 8月2日、日本のNHK報道局の石部俊を案内してハルピンの残留孤児、藤川和子、楊治国などを訪問。3日、方正の日本人公墓、友好園林を訪問。方正在住の孤児・徐士蘭と交流しました。
- ⑤ 8月22日、日本の小野晋也衆議院議員を団長とする「日本人の心の故郷を訪ねる旅」の一行20人が方正地区日本人公募を参拝。養父母会に記念の樹を植えてくれるよう頼みました。
- ⑥ 8月25日、京都大学大学院人間環境学研究所博士課程の南誠先生がハルピン、方正を訪問、養父母の会と交流を深めました。南先生は3年前、養父母の会と交流を始めましたが、近年、残留孤児問題の調査研究に努力され、多くの論文を発表されています。
- ⑦ 10月9日、残留孤児龍鳳雲（桔高弘子）の養父母、龍宝珠、矯俊清夫婦の遺骨がハルピン市濱西鎮から方正中日園林の中にある中国養父母公募に移されました。この移送には連絡会の名誉会長胡曉慧と秘書長石金楷が立ち会いました。

\*

- ① 7月8日、应上海电视台纪实频道邀请，联谊会组织人员赴该频道<往事>栏目组接收访谈。通过当时人的深情回忆，再现了当年中国养父母不计前嫌，以博大，善良的胸怀收养日本遗孤的感人往事，赞美了人间最崇高的母爱，判罪了罪恶的战争。
- ② 7月27日到29日，应电影<舞蹈系>（又名中国妈妈）剧组的邀请，跟日孤养父母一起

赴青岛,参加「中国第7接荷花奖」校园舞蹈大赛。日孤养母李淑兰和联谊会秘书长石金楷向活动主办方中国舞蹈家协会赠送了<感谢状>,对影片用一种全新的形式诠释了中国妈妈博大的胸怀,从一个独特的视角表达了对战争的反思,对和平的向往而做出的成功探索表示祝贺和感谢!

- ③ 7月31日,8月1日,石金楷秘书长陪同黑龙江省社会科学院东北亚研究所赴方正县调研,同有关部门和人士进行了深入的交流。
- ④ 8月2日,日本国NHK报导局石部俊先生来哈尔滨,联议会陪同他走访了在哈尔滨的日本遗孤藤川和子,杨治国,等人。3日陪同他参观了日本人公墓和中日友好园林,还有同申请确认遗孤身分的徐士兰女士进行了交流。
- ⑤ 8月22日,以日本众议院议员小野晋也先生为团长的「日本人心中的故乡之旅」一行20人赴方正县,拜祭了日本人公墓,委托联谊会种植了纪念树。
- ⑥ 8月25日,日本国京都大学大学院人间环境学研究科博士在读生南诚先生访问哈尔滨,方正县,同联谊会进行了深入交流。南诚先生是3年前同联谊会建立联系的,近年来,他致力于日本遗孤问题的研究,多次撰写有关文章。
- ⑦ 10月9日,日本遗孤龙凤云(桔高弘子)的养父母龙宝珠,矫俊清夫妇的骨灰由哈尔滨市宾西镇迁入方正中日友好园林中的中国养父母公墓,哈尔滨市日本留华遗孤儿养父母联谊会名誉会长胡晓慧,秘书长石金楷陪同其亲属参加了骨灰迁葬活动。

## 方正日本人公墓への旅（2011）

### ■ 日程

6月22日（水）	新潟空港ロビーに集合	10:00
	空港発（CZ616便）	12:15
	ハルピン空港着	13:40
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
23日（木）	貸し切りバスで方正へ（高速道・約2時間半）	
	方正県政府表敬訪問、墓参りと日中交流	
	宿泊＝鑫禧大酒店	
24日（金）	ゆかりの地（伊漢通開拓団跡地ほか）訪問	
	貸し切りバスでハルピンへ	
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
25日（土）	ハルピン市内見学（太陽島、731細菌部隊記念館）	
	宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル	
26日（日）	ハルピン空港発（CZ615便）	9:50
	新潟空港着	13:00
	空港ロビーで解散	

\* 時間は現地時間、中国は日本の1時間遅れ

- 定員 15名
- 会費 150,000円（シングルの宿泊ご希望の場合は差額10,500円プラス。集合、解散の新潟空港までの交通費はふくまれていません）
- 申込み 5月20日までに下記・奥村までお申し込みください。なおその折、パスポート（顔写真のページ）を下記のファックスへお送りください
- ご送金ほか
  - ①〔会費の払い込み〕振込用紙をお送りしますので5月31日までに指定の口座へお振込みください。
  - ② 旅行にかかわる保険料は含まれていません。保険は空港でもできます。東京→新潟（新幹線、片道10,470円、高速バス片道5,250円）新潟駅→空港、バス350円、約30分間隔で運行。
  - ③ その他、お問い合わせはお気軽に下記へどうぞ。

### 方正友好交流の会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6

（社）日中科学技術センター内

電話 03-3295-0411

■ 方正旅行の問い合わせ： 奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

## ——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立された日本人公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、国際的な友愛精神、国際主義的な精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は、1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

(口数は最低一口、上限はありません)

## 方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohru@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

# 小説に初登場した方正日本人公墓

—佐江衆一著『昭和質店の客』を読む—

大類 善啓

日本経済新聞朝刊最終面の文化欄は、日経の中でも一番読まれていて人気が高い。経済に疎い私などは、読む先から忘却の彼方に行ってしまうので、日経ではここしか眼を通さない口だ。

2年前の11月2日の朝、その欄に「満州・中国東北部の子供たち」という見出しで、作家の佐江衆一さんが、<「アカシアの大連」が見たくて初めて出かけた>と、大連、瀋陽、長春、ハルピン、牡丹江を旅したエッセイが出ていた。

佐江さんが、老親介護の凄まじい現実を描写した小説『黄落』の作家だと知っていたが、もしかしたら満州体験もある方なのかと思った。が直接の体験はないようだ。しかし、佐江さんにとって満州という言葉は、身にしみつくようにあったようである。

1934年生れの佐江さんは、そのエッセイの中で、<実は戦時中子供の頃、「日本の生命線」といわれた満州に憧れた>子供であったと述懐している。

その旅は、かつての日本時代のヤマトホテルや大連駅などの建造物の見学、牡丹江では高校生との交流もあった。また、牡丹江近郊ののどかで豊かな緑の山々を眺めながら、麻山で父や開拓団の大人から殺された子供たちの顔が浮かび上がってきたと書かれている。そうして、一人っ子として大事にされている現在の中国の子供たちに接しながら、佐江さんは<東京大空襲を生きのびて作家になった者として満州を含む「昭和」という時代を書ききらねば死ねないと思っている>と、締めくくっている。

それから2年後、『昭和質店の客』という小説が完成し、今年7月刊行された。そこでは「満洲」が正面から描かれている。

小説に登場する主要な人物3人は、生活は苦しいながらも楽しく浅草を生きていた人たちである。そんな庶民にも戦争は押し寄せてきた。浅草六区に近い昭和質店に出入りする人々も、いやおうもなく、戦場に駆り出されて行った。

柳田保雄は、今92歳、養護老人ホームの介護ベッドにいる。その柳田老人が「どうしても語っておかねばならないことがあります」と回想する。

保雄は、満洲移民の大義を信奉し、「五族協和」「王道楽土」と信じた満洲へ、大きな夢を抱いて開拓民になり妻子を呼び寄せる。同時に、“松竹座のトクちゃん”と呼ばれ、エノケンやロッパの物真似をして映画館の呼び込みをやって親しまれていた父も満洲へ呼び寄せた。しかし幻の「満洲国」は崩壊した。

ソ連兵に子供たちは虐殺され、婦人たちは強姦された上で殺される。どうせならと、妻子も父も「自決」させた。そうして自分ひとりが死に損ね、ソ連に抑留されて帰国した。

今介護ベッドで毎夜見る夢は、ソ連軍の戦闘機の爆音の中、泣き叫ぶ血みどろの乳呑児



を抱きしめ、どこまでも続く暗い泥んこ道を逃げ続ける自分の姿だった。

保雄が遙か満州の大地に両手を合わせ、現在は中国東北部と呼ぶ旧満洲を調べていくと方正に日本人公墓があるのを知ったという形で、公墓の建立の経緯が保雄によって語られる。

「知りませんでした。偏屈者、頑固者の私は、目と耳を固くとざし石になって（満洲のことを忘れようと）逃げまわってきたのですから」と、日本人公墓のことが1頁ほど書かれている。ドキュメントではなく小説で方正日本人公墓のことが書かれたのはたぶん初めてだろう。

佐江さんはどこで日本人公墓のことをお知りになったのだろう。実は日経に記事が出たあと、すぐに「星火方正」などをお送りした。その後、『昭和質店の客』が刊行されると、お贈りいただいたので、たぶん方正公墓の存在はこの会報ではないかと思ったが、この原稿を書くにあたって改めて佐江さんに確認した。それによれば、08年6月の中国東北部への旅で、牡丹江の元円明小学校の卒業生から、その存在をお聞きになったが、より詳しくは「星火方正」で知ったとのことだった。

小説では、柳田保雄の他に、「昭和質店」に出入りしていたレビューガールのテンブル染子は慰問団で戦地へ行き、その恋人、進ちゃんは、ニューギニア戦線で地獄の敗走の果てに死んだ。

佐江さんは、本書のあとがきでも、「この小説は、戦争を少しは体験した昭和戦前生まれの私が、死ぬまでに書かねばと考えていた作品です」と書いている。

生き生きと浅草で生きた庶民たちが戦争で翻弄された姿を描いた本書を、戦争の実情を知らない若い人たちにぜひ読んでほしいと思う。 (新潮社刊 定価：1600円＋税)

## 書籍案内

### \* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会 編著

日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進した記録などが収録されている。定価 1500円。(事務局に残部あり)

### \* 『約束 満州の孤児たちの生命の輝き』

増田 昭一 著

牡丹江から逃れて新京敷島地区難民収容所に辿り着いた著者が、かつて孤児室で死んでいった仲間の子供たち、生きて帰ることができなかった子供たちの無念と心の叫びを、書き表した書だ。当時、著者は17歳。孤児たちのお兄さん的な存在だった。毎日、何人もの孤児たちが収容所の中で死んでいく中で、神や仏のことを話し合い、議論し、助けあった子供たちを追想した鎮魂の書だ。本書は次に紹介する『オリオンの墓』の永井瑞江さんな

どの多くの人たちに影響を与えた。また過日ソプラノの甘利真美さんが、増田さんの本をもとに、<歌と朗読でつづる小さな命のものがたり>として今年5月横浜で公演を行った。

(定価：1500円、制作・発行 夢工房 電話 0463-82-7652)

\* 『オリオンの墓—あの冬満洲に消えた難民孤児たちへ』 永井 瑞江 著

著者は1933年、旧満州奉天（現瀋陽）で生まれ、無政府状態の長春で難民生活を経て、長野県上田市に帰国。05年に、満洲国13年間の歴史を少女の目でみた記録『おばあちゃんの満洲っ子日記』を出版。本書は、増田昭一著『約束』に登場する子供たちを連れてきて、満洲の日本人たちの悲劇がなぜに発生したのか、在満邦人への棄民指令の公電、不可解な避難命令と疎開命令など、関東軍の責任の所在を追及している。

(定価：1500円 編集制作 信濃毎日新聞社 026-236-3377)

\* 『満蒙の新しい地平線 衛藤藩吉先生追悼号』

満蒙研究プロジェクト編集委員会編

本書のまえがきに、一橋大学名誉教授の田中克彦氏（モンゴル学、言語学）が、<「満蒙」は、かつて日本がこの地域の支配のために勝手に造った造語であり「満洲国領土内のモンゴル諸族の歴史的空間」という固有の意味をもつものであって、決して漠とした「満洲とモンゴル」ではない>と記している。

第一部は06年の方正の総会で講演をしていただいた衛藤藩吉先生の追悼特集である。その中に「星火方正」4号所収の衛藤先生の原稿<曠野に果てたたちはは>、また大類善啓が「星火方正」6号に書いた<衛藤藩吉先生を偲ぶ>が収録されている。

第2部は満蒙研究。<チンギス・ハン モンゴル帝国成立800周年に思う—モンゴルをノモンハン戦争から読み解く>という刺激的な田中克彦氏の講演が収録されている。

(定価：2381円(税別)、桜美林大学北東アジア総合研究所、川西重忠発行)

\* 『中国残留日本人という経験 「満洲」と日本を問い続けて』 蘭 信三 編

本書は、中国残留日本人の多彩な経験を通して、現代の日本を問い、「満洲」とは何だったのかを総括する。いわば中国残留日本人研究の総決算ともいえる600頁を超える大部の書だ。会員の南誠さんが『想像される「残留日本人」—国民をめぐる包摂と排除』を、同じく猪股祐介さんが『満洲農業移民から中国残留日本人へ』というタイトルで論文を書いている。

(勉誠出版株式会社 電話 03-5215-9021 定価 8000円、税別)

\* 『風雪に耐えて咲く寒梅のように 二つの祖国の狭間に生きて』

可児 力一郎 著

著者は、旧満州へ入植してから17年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003年本書を書き上げた。著者宛てに直接申し込んでいただきたい。〒399-5303 長野県木曾郡木曾町田立1223 可児力一郎

(かに・りきいちろう、定価1700円。電話 0573-75-4755 F A X 0573-75-4557)

## 《報告》

## ありがとうございました

前号の会報10号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2010年12月6日現在)

貞平浩 稲川清一 上条八郎 西永守 牧野史敬 井出正一 小島晋治 山内良子 野田尚道 阪田健夫 田中朝子 小関光二 榎本晴夫 高橋健男 井出孫六 網代正孝 篠田欽次 黒岩満喜 辻康子 星浩一 近藤喜一郎 滝永登 木村美智子 小倉光雄 鈴木春夫 小柴玲子 宮川龍二 坂部昌子 遠藤勇 渡辺一枝 長塚淑江 石橋実 中村静枝 宮田一郎 伊佐昭紀 柴崎葦津子 福久一枝 高木凉子 飯白栄助 佐藤千栄子 東山健吾 石田和久 竹中一雄 山下美子 青柳幸司 山田寿子 齋藤實 竹井成範 川口憲 小栗博 鵜澤弘 大島満吉 森田恭子 宮下春男 風間成孔 米山惇 山本勝彦 北澤広子 町田静子 吉田敬子 栗原貞子 白西紳一郎 杉田春恵 福井以津子 古賀勇一 山田弘子(越谷市) 西沢昭祐 阿部恵一 鳩貝清太郎 鈴木俊作 森清多美江 湊谷節子 鈴木幸子 伊原忠 高橋かよ子 阿久津国秀 齋藤兵一 久保祐雄 佐藤千栄子 中島俊江 羽田澄子 藤村光子 加藤重幸 土居司 木戸富美江 千本健一郎 北澤吉三 前山秀樹 日高美保 石井愛輝 野澤咲子 寺村道生 寺本康俊 小林浄子 桜井博之 塩谷茂和 今村隆一 栗林稔 先崎千尋 山田陽子 打田茉莉 新谷陽子 清水薫 可児力一郎 松澤康雄 岡崎友美 小堀雄三 小林英子 森博勇 香山磐根 小柳保征 佐藤貞雄 島辰夫 山本義輝 駒形好幸 島田成夫 末広一郎



### <編集後記>

前号の9号で、北京の佐渡京子さわたりにさんの原稿の中の写真が間違っていた。佐渡さんは趙喜晨さんちやうきしんを中に挟んで向かって左の方である。佐渡さん、ご容赦のほどを。

日中関係は今厳しい局面を迎えている。だからこそ今、国土の大小にとらわれず、本当に精神的な意味での大国としての度量が両国に求められている。我々としては、方正公墓建立の経緯を追体験しながら、国交回復前の周恩来や陳毅らの国際主義的で懐の深い心を読み取りたいものだと思う。

### 《表紙写真撮影・板垣裕一》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第11号) 2010年12月15日発行  
発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email: [ohrui@jcost.or.jp](mailto:ohrui@jcost.or.jp)  
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F  
(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400  
郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会  
HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>